
東京原人

夏川龍治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京原人

【Nコード】

N2046Q

【作者名】

夏川龍治

【あらすじ】

ケータイが使えなくなったら、あなたはどうしますか？

第一話

博士は、笑っていた。

あやしげな実験機器がところせましと並べられた研究室で、博士は一人、不気味にほくそ笑んでいた。

「グフフ。ついに……ついに……！」

達成感の中にも若干の疲労が入り混じったかすれた呟きを洩らしながら、博士は机の上に置かれた、手足が異常に長い蛇の怪物のようなオブジェを愛おしげに撫でまわした。

「これさえあれば、私の計画は無事に達成される」

博士の頭脳は、ある種の狂気を感じさせるほど明敏に覚醒していた。数日間も徹夜が続いているというのに、いっこうに睡魔のおとずれる気配がない。睡眠欲求のかわりに博士の神経を支配しているのは、欲望の充足の予兆に支えられた、きわめて幼児的な充実感であった。

「これで、計画は成功だ！」

と、博士は叫んだ。

「これでようやく、私の苦勞が報われる……」

博士の口から、自然に解放感に満ちた笑みがこぼれる。そして、それは次第に閉鎖的な空間に身を置いた者特有の陰湿さを帯びた高笑いに変わっていくのだった。

邪惡な興奮にうち震える博士を、研究室の扉の陰から静かに見つめる助手の姿があった。扉の隙間から博士へとまっすぐに注がれたその視線は、どこか冷淡でもあり、それでいてかすかな憐憫を含んでいるようでもあった。

諦観を帯びた嘆息を洩らすと、助手はかすかに頭を振ってその場を立ち去った。

ケータイのアラームが室内に鳴り響く。

「もうちょっと寝てたいのに……」

まだ半分夢の中に浸っているような口調で呟きながら、塚原夏海はゆっくりと目を覚ました。

ほとんど活動状態に入っていない頭のまま手さぐりで枕もとのケータイを掴み、指の感覚だけでアラーム停止のボタンを押す。瞬間的に、部屋が静かになる。

ケータイを使い始めて半年。やっと指の感覚だけでアラームをとめられるようになった。最近では短いメールなら画面を見ずに数秒で打てるようにまで進歩した。ケータイ歴三年の梢なんか、ケータイを操作する相手の指の動きを見ただけでメールの内容がわかってしまうらしい。

頭が目覚めてきたところで、夏海はケータイを開いた。夜中に届いたメールをチェックするところから、夏海の一日は始まる。

梢からテスト関連のメールが一通と、その他に最近アドレスを交換したばかりのクラスメイトから何通かあいさつのメールが届いていた。新着メールだけで、メールの受信画面がいっぱいになってしまふ。けれど、一番送ってほしい相手――守からのメールが届いていない。寂しいわけではないけれど、心のどこかに穴があいているような気がする。

メールチェックを終えて、初めて時間を確認する。しまった、もう八時五分前だ。急いで支度をしないと学校に遅れちゃう。

手際よく制服に着替えて、夏海はリビングに降りた。

リビングでは、美代子が朝食の支度をしていた。ダイニングのテーブルに置かれた白い皿には少し焦げ目のきついトーストが乗っている。ちよūdいいや。朝ごはんのかわりにこれをちよūdとかじつていこう。

「朝ごはんなら、ちゃんと座って食べなさいよ」

トーストを片手にせわしなく前髪を撫でつける夏海を、美代子がサラダを盛りつける手を休めることなくたしなめる。

「のんびり食べてると遅刻しちゃうんだもん」

「それはあんたがいつも寝坊するからでしょ」

反抗期真っ只中の夏海も、美代子の指摘には返す言葉もない。

「せめて果物の一つでも食べていきなさいよ」

「そんなことより、今はトイレが先なの！」

「トイレならお父さんが使ってるわよ」

わずかに内股加減になりながらトイレへと急ぐ夏海に、美代子が声をかける。

「お父さん、会社に行ったんじゃないの」

「今日は何だか、遅い出社でもいいらしいのよ」

二人の会話にこたえるように、トイレのドアが開いた。

「民自党もとうとう終わりか」

と呟いて、朝刊を広げた俊雄が大きなあくびをした。

「何だ、夏海。また遅刻寸前じゃないのか」

からかうように俊雄は言うど、折り畳んだ朝刊を夏海のほうに投げた。ダイニングテーブルの上に無造作に投げ捨てられた朝刊を見て、夏海は顔をしかめた。

トイレで朝刊を読まないでほしいって、何度言えばわかるのよ。

手で持つ部分が中途半端に湿って気持ち悪いんだから。まあ、朝刊はどうせテレビ欄しか見ないから、まだ我慢できる。でも、お父さんのあとにトイレに入るのは、絶対にカンベン。だって、お父さんのあとにトイレに入ったらオヤジ臭さまでうつっちゃいそうなんだもん。

「トイレ空いたわよ、夏海」

「ううん、もういいの」

「トイレ行きたいんじゃないの」

「学校でするからいい」

「トイレを我慢すると体に悪いぞ」

お父さんのせいでトイレに入れなくなったのに、何をのんきなこ
と言ってるのよ。

「あんまりのんびりしてると学校に遅れるわよ」

「あっ、そうだった！」

「ひさしぶりに駅までお父さんと一緒に歩こうか」

「ダメだよ。待ってたら本当に遅刻しちゃうもん」

「あとはネクタイを締めるだけだからすぐに支度できるぞ」

「とにかくダメなの！」

耳たぶまで真っ赤にして抵抗する夏海に、美代子は静かに苦笑して、

「いいじゃないの。親子で歩くのもたまにはいいものよ」

「もう、お母さんまで！」

「ほら、夏海。もうネクタイ締めたぞ」

「勝負あったわね、夏海」

もう、どうしてこうなるのよ。少しでもお父さんと離れていたいのに。まあ、いいか。駅に着くまでずっとケータイをいじってれば喋らなくてすむし。

夏海は諦めたように、玄関で靴を履いた。

丁字路の分岐点で、俊雄は立ちどまった。

ああ、やっとここまでできた。ずっとメールをいじってたから意外にあっという間だったな。早くお父さんとわかれて、学校に急がなきゃ。

「夏海」

自分とは反対方向に歩いて行く夏海に、俊雄は呼びかけた。

ケータイを手に持ったまま、夏海は振り返る。

「気をつけて行くんだぞ」

何よ、それ。そんなありきたりなことを言うために呼びとめないでよ。

「うん」

夏海の不機嫌な呟きは、ケータイの味気ない電子音にかき消された。

えっ、本当にたったこれだけ？ めずらしくマジメな顔をして呼びとめたから、何か大事なことを言うのかと思ったら、そんなありきたりな会話で終わり？ こんな平凡なセリフ、今どきテレビのホームドラマでも出てこないよ。しかも、お父さんのネクタイ、何だかカワイソウなくらいに曲がっちゃってるし。朝着替える時に気付かなかったのかな。あんなネクタイじゃあ、会社の部長さんとかにも印象悪いだろうに。まあ、いいや。お父さんが会社でどう思われようと、私には関係ないし。

「じゃあ、行ってくるよ」

言外にかすかな寛容さを滲ませて、俊雄は言った。夏海は言葉を返すこともなく、俊雄に背をむけて淡々と歩いていく。

ああ、もう。ホント、時間がもったいない。こっちはもう、ありえないくらいにピンチなんだからね。学校に着いたらまず梢に昨日のドラマの感想を報告して、それから守に朝のメールを送って、時間が余ったら授業の準備をして……。その前に、まずトイレ行かなきゃ。

第一話（後書き）

初めての連載です。

平穏な暮らし

「相馬、高田、高橋……ああ、高橋は病欠か」

いっそうにおさまる気配のない騒々しさの中、担任の萩原が淡々と出欠をとっていく。

「田代、田所、玉置……おい、玉置いるか」

「いるよ、先生！」

手鏡から視線を動かすことなく、玉置はこたえた。手をあげておきながら、もう片方の手では器用にファンデーションを塗りたくっている。

「いるならちゃんと返事しろよ」

悲嘆にも似た萩原の呟きも、蜂の巣を突いてさらに木槌で叩きつぶしたような喧騒の中にあっけなく紛れてしまう。もっとも、萩原のほうにしても自分の注意が素直に聞き入れられることなどつゆほども期待していないのだが。

無秩序という言葉が秩序に縛られた存在であるように思えるほど、教室は雑然としていた。化粧をする生徒、朝食のサンドウィッチを堂々と頬張る生徒、騒がしさを一切関知せずにマンガ本に没頭する生徒……まさに「四十人四十色」といった有様なのである。

「千葉、塚田、塚原……塚原、いないのか」

萩原は儀礼的に教室を見まわし、そして呆れたように、

「あいつは今日も遅刻か」

と溜息を吐いた。

「ええと、塚本は遅刻で……」

「塚本はここにいます！」

という必死の叫び声とほぼ同時に、教室の引き戸が開いた。

「次の人の名前を呼んでないから、まだセーフですよ」

自信たっぷりと言うと、夏海は子犬のように舌の先をちらりとのぞかせた。意外なほどに可愛らしい夏海のその表情に萩原はわずか

に相好を崩しかけたが、すぐに教師の顔に戻って、

「あのなあ、塚本。今月に入ってからもう八日間連続で遅刻してるんだぞ。今日を遅刻にカウントすれば九日目だ。少しは自分をコントロールして、一日でも遅刻を減らすように努力したらどうなんだ。そんな子供だましの屁理屈を考えるヒマがあったら……」

「先生のおっしゃることはよくわかります。私も、先生のお叱りやご注意をもっとゆっくりお聞きしたい。でも、その前に……」

「その前に、なんだ」

得意の講釈が遮られたことに戸惑ったのか、虚を突かれたように萩原は問いかけた。クラス中の視線が夏海に集中する。

大げさなほど苦しげに顔をしかめて、夏海は言った。

「その前に、トイレ行かせてください」

時計の秒針が動く音だけが、教室に響いていた。

「……従って、この x と y は反比例の関係にあり……」

数学教師の笹本が黒板に数式を黙々と記していく。

室内は、沈黙すらも居心地を悪くするほどの静寂に包まれていた。といって、生徒たちが笹本の説明を真剣に傾聴しているわけではない。ほとんどの生徒が、携帯電話をいじることに全神経を集中しているのである。その結果生じた静寂であるから、当然疎外感を受けるのは笹本のほうであった。

「この関数をグラフにすると……」

無関心という最大の凶器を背後に感じながら、それでも笹本は淡々と授業を続けていた。教師生活三ヶ月とあって、生徒との距離のとり方が今ひとつつかめずにいるのだった。

まだガチガチに緊張してるじゃん、笹本先生。

机に頬づえをついて笹本の背中を眺めながら、夏海は微笑んでいた。それは、母親が足元の覚束ない幼児の歩く姿を優しく見守っているかのような、余裕に満ちた微笑だった。

教師になってもう三ヶ月目なんだから、いい加減授業に慣れなき

や。何だかわからないけどいつもオドオドしてるんだよね、あの人。ああ、また声が裏返っちゃった。あれじゃあ生徒たちにナメられるわ。学年一の優等生で通ってる湯沢君だって、心の中ではあの人のことバカにしてるよ、きつと。そういえば、湯沢君っていまだにケータイ持ってないんだっけ。まあ、どうでもいいけど。

夏海の意識を現実に取り戻すかのように、夏海の携帯電話が震えた。笹本の視線を気にすることもなく、夏海は携帯電話を開く。

あっ、梢からメールがきた。っていうか、梢、今私の斜め後ろの席にいるじゃん。わかるなあ。授業中に、しかもこんな近い距離でメールを送りたくなる感覚。

（今日、一緒にお昼を食べない？）

やっぱりお昼の誘いだったか。そんなことだったら、わざわざメールしないで口で伝えろなんて思うのはアタマがカタイ証拠。どんな細かいことでもメールで伝え合うのが親友の証なんだから。

（もちろん！　いつものテラスで一緒に食べよう）

よし、これでOK。やっぱり便利だね、メールって。でもホントは、いちいちメールで確認しなくても毎日同じ場所と一緒にお昼を食べてるんだけど。

送信ボタンを押して、夏海は梢の席を振り返った。梢はしばらく携帯電話の画面に視線を落としていたが、やがて電話の着信ランプが点灯すると、安心したように夏海に微笑みかけた。

何とも言えないのよねえ、この快感。秘密を共有してるって言うとちよっとオーバーだけど、それに近い感覚ではある。

満足感を覚えて、夏海は教壇に視線を戻した。しかし、そこに笹本の姿はない。

あれ？　いつの間にか授業が終わってる。しかも、黒板もきれいに消してあるし。まあ、いいや。あの人の話を聞いてなくても、ノートさえあればテストはちゃんと……。あら、ノートに何も書いてない。まあいいか。あとで梢に借りればいいんだし。

平穏な暮らし(2)

昼休み。いつものように、夏海と梢は校内のテラスで昼食をとっていた。

校舎の中央部分にあたるこのテラスは、教室を三つ分つぶして造られただけあって、かなりゆったりとした空間となっている。陽当たりもよく、昼休みには大勢の生徒が談笑の場として利用しているのだった。

「そのお弁当、今日も梢がつくったの？」

色の三原色によってバランスよく彩られた梢の弁当をのぞきこんで、夏海は聞いた。

「うん、そうだよ」

こともなげに頷く梢に、夏海はへえ、と感心したように呟いた。

「大変でしょう、毎日お弁当をつくるのって」

「時々そう思うこともあるけど、お母さんが体弱いから仕方ないんだ。それに、将来いい奥さんになるための修業でもあるわけだし」

見えない圧力をはねのけるかのように、梢は微笑んでみせた。

「そういえば、もうすぐスネークマンの映画が公開になるね」

梢の一言で、夏海の頭は一気に遊びモードになる。

「ずっと観たかったんだよね、その映画」

「映画の公開を記念して、アメリカからスネークマンのオブジェが届いたしね」

「そうなの？ その話、今初めて知った」

「ウソ！ 朝のニュースで言ってたじゃん！」

「ああ、今日は寝坊しちゃったからニュースは見えてないや」

そう言った瞬間、夏海は自分の右の眉毛がかすかに動くのを感じた。それは、夏海が嘘をついた時の、昔からの癖であった。

寝坊してもしなくても、私はニュースなんか見ないもんね。だって、つまらないから。っていうか、高校生でニュースを見るほうが

おかしいよ。やっぱりマジメなんだな、梢って。

「いいよなあ。一緒に映画に行くカレがいる人は」

と、梢はすねたような視線を夏海に向けた。その視線の意味を夏海は瞬時に察して、

「映画が公開されたら二人で観に行こうよ」

「べつに、私に気をつかうことはないよ」

「そんなんじゃないって。私はホントに梢と映画に行きたいの。だって、私たち親友じゃん」

「親友、か……」

夏海の言葉を反芻するかのように梢は呟き、そしてはにかんだように笑った。

「私たち、親友だもんね」

「うん、親友だよ!」

力強く頷きながらも、夏海は自分が次第に冷静になっていくのを感じていた。

ふう、これだからメンドウなんだよな、彼氏のいない人は。まあ、結局映画には守と二人で行くことになるんだろうけど、こんなふうに言っておかないと梢との関係がこわれちゃう。こういうのを（社交辞令）って言うんだっけ。トモダチ付き合いつて、ホント疲れる。

「今朝の夏海にはウケたよ」

思い出したように、梢が微笑んだ。

「えっ、何で。私、何かした?」

「だって、先生の注意さえぎってトイレに行くんだもん。あれは笑えたなあ。防虫剤のCMじゃないんだからさあ」

「あの時はホントにトイレ行きたかったんだもん」

と言って、夏海はほんの少し唇を尖らせた。いくら何でも、トモダチのピンチをそこまで笑うことないじゃない。

「あのセリフのタイミングが最高だったんだよ。クラスのみんなも爆笑してたじゃん」

「それはそうだけど……」

唇を相変わらず不満げに尖らせながらも、夏海は内心では妙な満足感を覚えていた。

人から笑われるのはちょっとショックだけど、そのおかげで結果的に爆笑が起こったんだったら、まあいいか。

「でも、萩原先生は怒ってるかもよ」

と、梢は言った。口調こそ険しいものの、その目はからかうようにゆるやかな半円形をつくっている。

「いい加減、その遅刻グセ治したら？　これ以上遅刻がつづいたら成績にもひびくだろうし……」

「何だかんだ言って、結局マジメなんだね、梢って」

「何よ、その言い方」

梢の声から、からかいの色が消えた。言葉の真意を問いかけるように夏海にむけられたその目も、いつしか水平に戻っている。

「高校に入ってから彼氏もつくらずによく勉強にうちこめるなあって、素直に感心してるだけだよ」

「そんなイヤミやめてよ！」

暴発寸前の感情の爆弾を、梢は夏海に投げつけた。その頬はうっすらと赤く染まり、水平を保っていた目は鋭角な逆三角形をつくっている。

「ねえ、梢どうしたの？」

夏海は戸惑っていた。これほど怒りに頬を紅潮させる梢は見たことがない。

「何か気にさわることも言った？」

まるで、全身の毛を逆立てて怒りを表現している猫を恐る恐る宥めるように、あるいは、眼前で燃え盛る炎をわずかな水によって鎮めようとするかのように、夏海は口調を和らげた。時折眉を八の字に歪めるその表情の裏には、梢との感情のねじれを修復したいというよりも、この場での言い争いを何としてでも避けたいという意識が優先してはたらいていた。

梢ったら、突然どうしちゃったんだろう。いつもは私の話を笑っ

て聞いてくれるのに。お願いだから、文句があるならここじゃなくてメールで送ってよね。こんなところでケンカなんかしたら、みんなに見られるじゃないの。

「ホントに鈍感よね、あなたって」

「鈍感？」

とぼけるわけではなく、素直に夏海は聞き返した。経験したことのない場面に直面しているせいか、頭の中の変換機能がうまく働かない。

「どうせあなたは、私が彼氏のできない、勉強しか取り柄がない人間だと言いたいんでしょ」

「べつにそんなこと……」

「いいわよ、その通りなんだから」

そう呟く梢の目は、暗く沈んでいた。

「あなたはいいわよ。勉強も運動もそれなりにできて、しかも彼氏までいるんだから。あなたみたいな優等生には、私の気持ちなんかわからないのよ」

内心の興奮がおさえきれないのか、梢は立ちあがっていた。

「あなたは私のことなんか忘れて、サッカー部のキャプテン君と仲良くやってればいいのよ!」

そう言い捨てると、まだ半分以上残っている弁当箱を乱暴に鞆にしまい、梢は肩を怒らせて立ち去った。状況をよく把握できないまま、夏海は苛立ちの混じったため息をついた。周囲の視線が痛いほどに突き刺さる。

梢のせいでせっかくの昼休みが台無しになったじゃないの。もうお昼を食べる気分じゃないけど、お弁当をこのまま捨てるのももったいないから、無理して全部食べちゃうか。

周囲の視線を気にしながら、夏海は淡々と弁当を胃袋におさめていく。諍いの苦々しさによって味覚がマヒしているのか、何を食べてもまったく味が感じられない。大好物であるはずの玉子焼きも、今はただのフニャフニャしたスポンジだ。

空虚な満腹感とともに、苛立ちをとまったやるせなさが内心に
込み上げる。

何よ、もう。あそこまで怒らなくてもいいじゃないの。別に梢の
悪口を言ったわけじゃないんだから。これじゃあ、私が梢をいじめ
たみたいじゃん。

トモダチって、本当にメンドクサイ。

平穏な暮らし(3)

淡いオレンジ色に染まった渡り廊下を、夏海は一人で歩いていた。全身に溜まった疲労が伝わったかのように、通学用のショルダーバッグが右肩からだらしなく垂れ下がっている。

今日は、何だかやけに疲れた。昼休みまではけっこう調子良かったのに。そうだ、今日にかぎってこんなに疲れてるのも、梢のせいなのよ。

昼間のケンカが相当こたえたのだろうか。梢は珍しく、午後の授業を欠席した。勉強が唯一の趣味のような梢が授業を休むなんて、本当に珍しいことだ。それだけ昼休みのことが胸にひっかかっているのだということは、夏海にも想像できる。でも、カバンはロッカーに置かれたままになっているから、家に帰ったわけではなさそうだ。部活にだけは出るつもりなのだろう。

何もかも梢が悪いのよ。私はべつに梢をバカにしたわけでも、ましてやイヤミを言ったわけでもないのに、どうしてあそこまで怒鳴られなきゃならないのよ。むこうはさんざん怒鳴ってすっきりしたかもしれないけど、私はあれからみんなにジロジロ見られながらお弁当を食べたんだから、逆にこっちが謝ってほしいくらいよ。まったく、思い出しただけでも腹が立つ。

ふたたび込み上げた夏海の苛立ちも、グラウンドが近づくにつれて次第に薄らいでいった。力いっぱいボールを蹴る硬質な音が、まるで子守歌のように夏海の逆立った気分を落ち着かせる。

一日が終わって、家に帰る前にグラウンドでサッカーの練習をする守の姿を見るのが、いつしか夏海の日課になっていた。一心不乱にボールを追いつづける守の姿を見るだけで、夏海の体から一日の疲れがきれいに抜け去っていくような気がするのだった。

「今日もきてくれたんだ」

と、守は夏海に笑いかけた。かすかな汗の匂いが夕暮れの秋風に

乗って夏海の鼻腔をくすぐる。

「練習、いいの？」

「練習はもうすぐ終わりだから。それに、ちょうど僕も夏海に話があったんだ」

と言って、守はさりげなく前髪をかきあげた。その仕草に、夏海は思わずうっとりする。

やっぱり何度見てもカッコいいよね、サラサラヘアーをかきあげる守って。その指で私の髪も……って、いけないいけない。うっかり妄想モードに入るところだった。

「もうそろそろ、夏海のお父さんに会ってみたいんだけど」

「えっ、どうして？」

反射的に、夏海は聞き返した。

「会って、どうするのよ」

「別にどうするってことはないけど、夏海のお父さんがどんな人なのか、ちょっと興味があつてさ」

「どこにでもいる普通のオヤジよ」

夏海は素っ気なくこたえた。俊雄の話題になると、どうしても表情が陰しくなってしまう。

「もしかして夏海、お父さんとうまくいつてないの？」

「そんなことはないけど……」

夏海は腕組みをして、そして考えた。

ウチの家族は、うまくいつてるのかな。確かに普段の会話は少ないかもしれないけど、今まで大きいケンカもないし、それはそれで普通の家庭……だと思う。でも、守をお父さんに会わせるのだけは絶対にイヤ！

「とにかく、お父さんに会うのは絶対ダメだからね」

「だから、どうして」

「会ったら百パーセント後悔するよ。だって、ウチのお父さん、ものすごく頭がカタイし、着る服も時代遅れだし、人前でも平気でオナラをするし、それから、何度注意しても新聞をトイレの中で読む

し、それに……」

思いつくかぎりの俊雄の悪口を、夏海は並べたてた。夢中で不満を吐き出しているうちに、守を説得するために言っているのか、あるいは自分自身のストレス解消のためなのか、自分でもよくわからなくなってくるのだった。

「ねっ、これで会いたくなくなったでしょ？」

と言って、夏海はとびきりの笑顔を浮かべたが、そこにはもう守の姿はなかった。

（なに必死になってるのよ。カッコ悪い）

自分の影にも笑われているようで無性に悔しくなり、夏海は足もとの砂を思いきり蹴りあげた。

父の戸惑い

「ハックション！」

キーボードに顔を向けたまま、俊雄は大きくしゃみをした。ハンカチで口もとを拭って顔をあげると、ディスプレイには（dふあぎようじゅh）と、資料の内容とは関係のない文字が入力されていた。

「あら係長、おかぜですか」

第一企画課の紅一点、小野寺香織が心配げな視線を俊雄に向ける。幾分アンニュイな色気を含んだその眼差しは、企画課の男子社員の垂涎の的となっていた。

「ありがとう、小野寺君。実は最近ちょっと体調が……」

「ただの花粉症じゃないですか」

と、さして興味もなさそうに言ったのは、企画課一の怠け者、中里太一である。デスクの上の書類はすでにきれいに片付けている……と言うと彼が有能な社員のようだが、何のことはない。片付けたのは書類だけで、肝心の仕事のほうは遅々として進んでいないのだ。それにもかかわらず、今日も五時きっかりに退社すべく、壁の時計と健気ににらめっこを続けているのである。

「いや、こう見えてもアレルギーには強いんだ」

アレルギーに強いも弱いもないのだが、俊雄もなぜか中里に対しては突っ慥貪な態度をとってしまうのであった。

「お体には充分気をつけてくださいね。係長がいないと、あのプロジェクトも動かないんですから」

「ありがとう、小野寺君」

どこまでも穏やかな香織の微笑に、俊雄の頬もついだらしく緩んでしまう。

「よし、もう五時だ」

この瞬間を待ちわびたように呟くと、中里は手際よく荷物をまと

めて立ちあがった。

「それじゃあ、お先に失礼します」

「ちょっと、中里君」

「何ですか」

「今日は君に残業を……」

「お断りします」

にべもなく、中里は言った。

「僕は仕事を勤務時間内に仕上げる主義ですから。これからの時代は、残業を徹底的にカットして業務の能率化をはかるのがベターな選択というものですよ。では、また明日」

自信に満ちた講釈を残して、中里はオフィスを出ていった。

「何がベターな選択だ」

中里の足音が聞こえなくなるのを待って、俊雄は苦々しげに呟いた。

「相変わらずですね、中里さん」

二人のやりとりを聞いていた香織が悪戯っぽく微笑んだ。

「あれで一人前に仕事ができれば文句はないんだが」

「悪い人じゃないんですけどね」

とりなすように、香織は言った。

「残業の徹底カットか……時代は変わったもんだ」

しみじみと呟くと、俊雄はどうにぬるくなってしまったコーヒを一口啜った。

俺たちの若い頃は、ベテランから若手まで、残業をするのが当たり前だった。時には自分から進んで残業を引き受けることもあったし、ましてや上司から残業を命じられたら一も二もなく従うのが会社人間としての常識であった。

しかし、今は違う。残業を命じられることが部下として認められた証などという価値観は、現代の若手社員にはもう通用しないだろう。

「どうされたんですか、係長」

わずかに甘い響きを帯びた香織の呼びかけに、俊雄の感傷的な意識は現実に戻された。

「パソコンの画面、大変なことになってますよ」

香織の忠告に従ってディスプレイに視線を移すと、そこには純粋な日本人が入力したとは到底思えない暗号めいた文字列が表示されていた。

「係長、お疲れなんじゃないですか」

「そうなのかな」

「ネクタイも曲がってますよ」

と言うと、香織はさりげない手つきで俊雄のネクタイを直した。香水のほのかに甘い香りが、俊雄の理性をほんの一瞬弛緩させる。

「係長はケータイをお持ちですか」

「ああ、持ってるよ」

「実は、係長に内密のご相談があるのですが……」

と言って、香織は逡巡するように視線を床に落とした。

「面と向かってはお話しづらい内容なので、メールでお送りしてもよろしいですか」

俊雄の返事を待ちわびつつ、それでいてどこか時間の経過を恐れてでもいるかのように、香織の唇は不安げに閉ざされていた。

「それは構わないよ」

寛容な微笑とともに、俊雄は言った。悪戯による叱責を放免された幼子のように、香織は安堵の色を満面に浮かべた。

「よかった。係長ならきつと相談に乗ってくださると思ったんです」
一点の虚飾も感じられない香織の言葉が、俊雄の上司としての自尊心を絶妙に刺激する。

「じゃあ、早速メールアドレスをお教えしますね」

はずんだ調子で言うと、香織はバッグから携帯電話を取り出した。

「係長のケータイって、赤外線はできるんですか」

「あいにく電話の機能には詳しくなくてね。けっこう新しい機種らしいからそういうのもついてるかもしれないが、よくわからないんだ」

正直かつ丁寧に、俊雄はこたえた。

「赤外線か……冬には便利そうだね、温かくて」

さりげなく発せられた俊雄の呟きに、香織は吹きだした。

「そういう機能じゃありませんよ、係長。遠赤外線じゃなくて、赤外線通信です」

俊雄の機械オンチ加減がよほど面白いのか、香織は目尻にシワをつくってまで笑いつづけていたが、その声には嘲笑の響きはまったく感じられなかった。

「赤外線通信っていうのは、お互いのケータイのセンサー部分を合わせるだけで簡単にアドレスの交換ができる機能です」

「そんな便利な機能があるのか。いやあ、初めて知った」

香織につられるように、俊雄は笑った。

香織はさりげなく俊雄の携帯電話を手にとって、あれこれとしばらくボタンを操作していたが、やがて顔をあげて、

「むやみにいじるより、私がアドレスを打ち込んだほうが早そうです
すね」

と言った。

「迷った時は、古典的な方法が一番です」

普段黙々と仕事にうちこんでいる彼女とは別人ではないかと思うほど、香織ははしゃいでいた。慣れた手つきで、俊雄の携帯電話を操作していく。

「アドレスの登録が終わりました。あとは私のアドレス宛てにメールを送るだけです」

「あ、ありがとう」

困惑の色を滲ませて、俊雄は頷いた。

とうとう、香織のメールアドレスを手に入れてしまった。香織のほうからアドレスを教えてきたとはいえ、これは上司としてかぎりなくタブーに近い行為ではないのか。

いや、そんなことはない。香織は今、人生の窮地に立っているのだ。部下からの相談にこたえてやるのは、上司として当然の責務で

ある。香織のメールアドレスを手に入れたからといって、罪悪感を抱く必要はないのだ。

「それでは、メールお待ちしています」

おどけたように、香織は敬礼を試みせた。

「係長はもうお帰りになられますか」

「まだ仕事が残ってるから、もう少しここにいますよ」

「そうですか。では、私はこれで失礼します」

慇懃に一礼をして、香織はオフィスを出ていった。艶めかしい香水の余韻に、俊雄はしばし恍惚とする。

パソコンのディスプレイに視線を戻しかけて、俊雄はある重大な事実を忘れていたことに気がついた。

そういえば俺、自分でメールを送れないんだった。もともと、電話は通話ができれば充分だという主義だったから、取扱説明書も通話の手順以外は読まずにどこかに押し込んでしまった。しかし、困ったぞ。このままだと香織にメールができないじゃないか。

そうだ、夏海に聞いてみよう。あいつならこういうことに詳しいだろうし、親子の間だから妙な遠慮もしないですむ。よしよし、我ながら名案だ。もしかしたらこれが親子の会話のきっかけに……。

根拠のない期待を膨らませる俊雄のしまりのない顔が、ディスプレイにぼんやりと映しだされていた。

予兆

夕暮れのさわやかな風が、校舎脇のポプラの葉を揺らした。それほど冷たい風でもないのに、夏海は背中から首筋にかけて寒気が走るのを感じた。

こんな季節に寒気がするなんて、ちょっとめずらしいわね。最近テスト勉強で疲れてるから、少しカゼ気味なのかな。

寒気を追い払うために激しく首を振ってから、夏海は歩きだした。駐輪場には、梢がいた。ちょうど今から帰るところらしい。

梢は夏海に視線を向けることもなく、無表情のまま自転車で走り去った。あまりにも素っ気ない梢の態度に、夏海の薄れかけていたはずの怒りがじわじわと込み上げる。

何よ、今の態度。昼休みのケンカのこと、まだひきずつてるのかしら。このままぐずぐずしてても時間のムダだから、あとで私から謝りのメールを送っとくか。メールなら表情が見えないから、本気で謝ってるかどうかなんてわからないだろうし。

こういう時に便利なのよね、メールって。

研究室の扉のノブに手をのばしかけて、助手はいったん格子状のガラス窓から中の様子を窺った。

博士の視線の先には、見るからにグロテスクな蛇のオブジェがあった。近頃流行しているヒーロー映画の主人公らしいが、濃い紫をベースとしたボディと狂気すら感じさせる伶俐な瞳を持つその物体は、ヒーローというよりも冷酷な怪物に近い雰囲気を漂わせていた。「入りましたまえ」

扉をノックすると、興奮の余韻が滲むくぐもった声が扉ごしに届いた。

「新しい研究の実験データをお持ちしました」
と助手が実験データの束を博士の前に置いても、博士は返事をせ

ず、視線ひとつ向けようとしなない。

「どうされたのですか、博士」

助手がそう呼びかけても、博士からの反応はない。

「博士……？」

不気味な予感を胸に、助手は博士の肩を軽くゆすった。すると、わずかな振動に流されるように、博士の体は助手が力を加えた方向にゆっくりと傾いていった。

「博士！」

雷にうたれたように、助手は博士の体を支えた。

「博士、大丈夫ですか！」

と助手が博士の顔を自分のほうにむけると、乱れた白髪の隙間から、目も鼻も口もない、完璧なのっぺらぼうの顔が現れた。

「ギャアッ！」

反射的にそう叫んで、助手は博士らしきものを放り投げた。おさえていた脂汗が一気にふき出す。

しばしの沈黙の後、どこからくぐもった笑い声が聞こえてきた。
「すっかり楽しませてもらったよ」

実験用具をしまうロッカーの陰から、博士がゆつくりと姿を現した。無邪気な博士の拍手が、淀んだ空気に包まれた研究室に軽快に響く。

「これは……何ですか」

かすれた声で、助手は訊いた。

「これは私の分身さ」

「からかわないでくださいよ！」

嗜虐的な響きすら漂う博士の微笑に、助手は怒りを爆発させた。

「実体を確かめずに翻弄されるとは、科学者にあるまじき態度だね」
助手の激昂にはとりあわずに、博士は平然と言つてのけた。

「計画は続行されるおつもりなのですか」

「当然ではないか。今回の計画のために私がどれだけ苦労したか、君もわかっているだろう」

博士はそう言うのと、スネークマンのオブジェを満足げに撫でた。それはまるで、最愛の孫を慈しむかのような、穏やかな仕草であった。

「このオブジェの内部には、強力な電磁波を発生させる装置が組み込まれている。この電磁波は、携帯電話に使用されるマイクロ波に強い干渉作用を引き起こす。私がスイッチを押してこの装置を作動させ、電磁波を周囲に伝播させれば、携帯電話での通信が不可能になるというわけだ」

頬をうつすらと紅潮させて、博士は説明した。

「計画が実行すれば、私はその功績によって歴史に名を残すことになるであろう。そう、これは全人類の未来を救う、偉大なる実験なのだよ」

「どうしても、やらなければいけませんか」

「ああ、もちろんだ」

微塵の逡巡も感じさせることなく、博士は頷いた。

「これさえなければ……」

熱に浮かされたように呟くと、助手はオブジェを手に取り、視線の高さまでゆっくりと持ち上げた。

「おい、どうする気だ」

「こうしてやるんですよ！」

狂気すら滲む怒声とともに、助手は寸分の躊躇もなくオブジェを扉に力いっぱい投げつけた。オブジェはあとかたもなく碎け散り、床にはその残骸が無造作に散乱した。

「何ということ……」

無気力に立ちあがって、博士は静かに慨嘆した。そして、オブジェの粉塵の傍らにゆっくりと屈み込んだ。

やがて、博士の哀切に満ちた嗚咽が研究室を包み込んだ。

とめどなく流れる博士の嗚咽には、これまですべてを犠牲にして取り組んできた研究の頓挫に対する無念が込められていた。それは、研究を破綻に追いやった助手に対してではなく、計画を成功に導け

なかった自分自身へと向けられているようであった。

しかし、嗚咽は徐々に嘲笑の色を帯び、ついには無邪気な高笑いへと変わっていった。

「今回も私の勝ちだな」

勝ち誇ったように、博士は悪戯っぽい微笑を浮かべて、言った。

「これは偽物さ」

その夜の出来事

時おり沈んだため息を洩らしながら、夏海はリビングのテーブルに頬づえをついて、携帯電話の画面を見つめていた。キッチンでは、美代子が慌ただしく夕食の準備をしている。

「ちょっと夏海、電話で遊んでばかりいないで、少しは手伝いなさいよ。お皿を並べるぐらいはできるでしょ」

「ダメ。いま忙しいから」

夏海は素っ気なくこたえた。こずえにメールを送るべきかどうか決めるのに、夏海は今、確かに忙しいのである。

「まったく、いつもそうなんだから」

美代子の諦めたような嘆息も、こずえとの関係修復の道を必死に模索している夏海の耳には届かない。

こういう場合、どんなメールを送ればいいんだろう。「ごめんね」だけじゃ素っ気ないだろうし、だからって余計なことをダラダラ書くのもメンドウだし……。それよりもまず、自分から謝るっていうのが気に入らないのよね。

「ほら、電話をどけてよ。食器が並べられないじゃないの」

苛立ちを含んだ美代子の一言が、夏海の思考を中断した。不満げなため息を洩らしながら、夏海は携帯電話を閉じる。

すべての食器がテーブルに並べられた頃、玄関のドアが開き、俊雄が帰ってきた。

「おっ、今日は冷しゃぶか。夏らしくていいな」

テーブルに並べられた料理をちらりと見やって、俊雄は言った。わけもなく込み上げる不快感に、夏海は顔をしかめる。

何よ、そのドラマから引っ張ってきたようなありきたりなセリフ。べつに夏じゃなくても冷しゃぶはおいしいわよ。それに、いつの間にかネクタイがまっすぐになってるし。朝見た時はあんなに曲がってたのに。部長さんから怒られたのかしら。まあ、どうでもいいけ

ど。

夕食が始まった。

「今日の冷しゃぶは特にうまいな」

と、俊雄は言った。

美代子は得意げに微笑んで、

「このお肉、すごく安かったのよ。いつもの半額近い値段で買えちゃったんだから」

「お母さんは買い物天才だね」

若干のからかいを込めて、夏海は言った。

「夏海も結婚すればそうなるわよ」

「そうかなあ」

かすかにやける夏美の頭に、守のさわやかな微笑が浮かぶ。

「夏海はきつと、お父さんみたいな人と結婚するんだよな」

ひやかすような俊雄の一言に、夏海の顔から笑顔が消える。

「そんなわけではないでしょ」

一日置いたコーヒーより冷めきった視線を、夏海は俊雄に送った。

「まあまあ、夏海。お父さんも冗談で言ってるんだから」

と美代子はとりなすように言ったが、一度凍りついた部屋の空気はそう簡単には変わらない。

「そんなに嫌な顔することはないだろう。夏海だって昔は……」

俊雄の言葉を遮るように、リビングの電話が鳴った。

「俺が出るよ」

気まずい沈黙に堪えきれなくなったのか、自分への弁解のように呟いて、俊雄は立ちあがった。

「もしもし。ああ、お袋か」

俊雄の声に安堵の色が滲む。

電話の相手はおばあちゃんか。おばあちゃんと喋ってる時のお父さんは、何だか子供みたい。それもそうよね。お父さんはおばあちゃんの息子なんだから。

「ああ、わかった。美代子たちにも伝えておくよ。はい、じゃあね」

俊雄は受話器を置き、悪戯っぽい微笑を浮かべてみせた。

「明日、お袋がこっちに出てくるってさ」

「お婆あちゃんがウチにくるの？ やったあ、またいっぱい遊んでもらえる！」

「お義母さんがまたいらっしやるのね」

無邪気に喜ぶ夏海とは対照的に、美代子はどこか浮かない顔で味噌汁を啜った。

「この味噌汁、ちょっとしょっぱいわね」

「ようし、明日にそなえて、今日は思いっきりエネルギーを補給するぞ！」

まるで食べ盛りの子どものように無邪気に冷しゃぶを頬張る俊雄に、美代子はかすかに恨めしげな眼差しを送っていたのだった。

食事が終わり、リビングで（こずえとの仲直り作戦）の続きを練っている夏海の隣に、俊雄はさりげなく座って、

「夏海、ちょっといいか」

「見ればわかるでしょ。私は今、すっごく忙しいの」

「メールの送り方をちょっと教えて……」

「そういうのは説明書を見ればわかるでしょ」

「どこにあるかわからないんだよ」

「もう、しつこい！」

自慢のストレートヘアをかきむしって、夏海は怒鳴った。

「自分の部屋でやる！」

夏海が憤然としてリビングを出ようとした時、脱衣場の扉が開き、美代子が顔を出した。

「何を怒鳴ってるの」

驚いたように、美代子は言った。そして、仏頂面の夏海とリビングでしょんぼりしたまま座っている俊雄を見比べて、納得したようにくすっと笑った。

「お風呂沸いてるから、さっさと入っちゃいなさい」

「うん、わかった」

助かったと言わんばかりに、夏海は頷いた。

「昔はかわいかったのに……」

「子どもなんて、そんなものよ」

うなだれる俊雄の肩に、美代子はそつと手を置いた。

「それはそうと、夏海に何か相談があったんでしよう。私でよければ相談に乗るわよ」

「いや、いいんだ」

さきほどまでの落胆ぶりから一転、かすかな狼狽の気配すらのごかせて、俊雄は立ちあがった。

「あら、そう」

がっかりしたように、美代子は嘆息を洩らした。

久しぶりに夫婦で話をするチャンスだと思っ俊雄に話しかけたのだが、あっけなく無視されてしまった。

倦怠期というわけではない。互いの愛情が失われてしまったわけでも、もちろんない。だが、何かが足りないのだ。長年一つの家で暮らしてきたのだから、日常生活での細々としたことはわざわざ口に出さなくても伝わる。けれど、それでも会話がほしいのだ。新婚時代のような緊密な会話を求めるのは自分勝手な理想論なのだろうか……リビングのソファに座って黙々と携帯電話を操作している俊雄の背中をぼんやりと眺めながら、美代子は静かにため息をついた。一体、いつからこうなっちゃったのかしら。夏海が生まれる前は二人でどんな小さなことでも口に出して、笑い合ってたのに。夏海がまだ小さかった頃は三人でいろんな所に出かけて、楽しい思い出をたくさん作ったのに。今は夫婦の会話なんかほとんどなくて、私はただ毎日家の仕事をするだけ。これじゃあ家政婦と同じじゃないの。それに、夜のお楽しみだっずいぶんご無沙汰だし……。

夫婦って、こんなものかしら。

嵐の前の慌ただしさ

いつものようにたつぷりと湯船に浸かって、リンスを入念に洗い流してから、夏海は浴室を出た。

水玉模様があしらわれたお気に入りのおパジャマを着て、洗面台の鏡の前に立つ。薄手のパジャマを着ているせいか、胸のふくらみが妙に目立って見える。夏海は同級生の中でも発育が早いほうで、最近どんどんふくらみはじめた胸が悩みの種なのであった。

脱衣場の扉を開けると、そこには携帯電話を手にした俊雄が立っていた。

「キャッ！」

夏海は反射的に、悲鳴に近い声をあげた。その半分は扉のすぐ前に何かの物体があったという驚き、もう半分はそれが俊雄だったという苛立ちであった。

「何してるのよ」

腹立ち紛れに、夏海の口調も刺々しくなる。

「何してるって、トイレから出てきただけだよ」

俊雄はぎこちなくこたえた。そして、夏海の胸のふくらみに視線を落として、

「大きくなったなあ、夏海も」

と緩みきった微笑を浮かべた。

その瞬間、体のずつと奥のほうから全身に一気に熱が伝わってくるのを、夏海は感じた。あまりに急激に体が熱くなったせいで、全身から湯気が出ていないかと心配になるほどだった。

「もう、サイテー！」

ありったけの力でそう叫ぶと、夏海はまるでチーターに追いかけられるジャッカルのように一直線に階段を駆け上っていった。ややあって、夏海の部屋の扉が閉まる乱暴な音がリビングに響く。

「なに怒ってるんだ、あいつ」

階段を見上げながら、俊雄は首をかしげた。

夏海の苛立ちの余韻が残る階段に、美代子は呆れたような、それでいてどこか懐かしげな視線を送っていたのだった。

ベッドに横になって好きなマンガを広げても、夏海の怒りはいつかにおさまらなかった。

（大きくなったなあ、夏海も）

数分前の俊雄の言葉が、まるで悪魔の囁きのように夏海の頭の中でしつこくりフレインする。その言葉を発した時の俊雄のやけに粘りけのある声、口もとに浮かんただらしな微笑、そして、夏海の胸元に注がれたいやらしい視線……そのすべてが、思春期真っ只中の夏海のコンプレックスをことごとく刺激するのだった。

高校生の娘の胸をジロジロと見つめるなんて、ホントに許せない。昔から鈍感な人だと思ってたけど、ここまでデリカシーがないとは思わなかった。もう、お父さんとは一生口きかない！

夏海の怒りをなだめるかのように、扉が優しく二度、ノックされた。

「入るわよ」

美代子の声だった。夏海は天井をぼんやりと見つめたまま何も言わない。

返事がないことを無言の承諾だと受け取ったのか、扉がゆっくりと開いて、美代子が入ってきた。

「お父さん、しょんぼりしてたわよ」

ベッドの縁に腰を下ろして、美代子は言った。

「胸のことを言われたら、女の子なら誰でもいやな気分になるわよね」

穏やかな美代子の口調に、夏海の苛立ちも少しずつおさまっていく。

「でも、お父さんの気持ちもわかってあげて」

「お父さんの……気持ち？」

「お父さんは、うれしいのよ」

「うれしい？ ハハッ、何が」

白けたように夏海は鼻で笑ったが、美代子は真剣な顔で、

「どこの世界に、娘の成長を喜ばない父親がいるもんですか」

と、かすかに語気を強めた。

「お父さんって不器用なのよ、昔から」

と言って、美代子は照れたように微笑んだ。

「自分の気持ちを言葉で伝えるのが下手な人なの。だから、夏海にもどう話しかけていいかわからないのよ、きつと」

「そうなのかなあ」

と呟きながら、夏海は考えていた。そう言われてみると、俊雄は自分に対して、どこか遠慮しているような気がする。携帯電話の操作方法の件にしても、俊雄なりの精一杯の表現方法だったのかもしれない。

「確かに胸のことに触れるのはちょっとデリカシーが足りないと思うけど、お父さんに悪気はないのよ、きつと。要は受け取り方の問題ってことかしら」

「受け取り方……」

「同じ言葉でも、受け取る人の気分次第ではめ言葉にも悪口にもなる。世の中ではよくあることよ」

美代子はベッドから立ちあがった。

「夏海がもし本当にお父さんの言葉で傷ついたのなら、そのことをお父さんに冷静に伝えるべきよ。一方的な捨て台詞で終わりにしても、何も解決しないわ。あんな言い方をしたら、おたがいに傷つくだけよ」

「お母さん……」

ようやく冷静になった頭で、夏海は美代子の言葉をゆっくりと反芻し、そして、一時の興奮にまかせて俊雄に感情的な一言を投げつけてしまった自分を反省した。さっきまでの全身の火照りがなくなっただけのは、湯上がりの熱気が冷めたせいばかりではないだろう。

美代子は朗らかな笑顔を浮かべて、

「はい、この話はもう終わり！ 明日も学校があるんだから、遅刻しないように早く寝なさい」

と部屋の扉を開けた。

「ありがとね、お母さん」

部屋を出ていく美代子の背中に、夏海は言った。美代子は振り返ると、

「どういたしまして、お嬢様」

とおどけてみせた。

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

ゆっくりと、扉は閉められた。室内に残る心地良い余韻に、夏海はわけもなく清々しさを感じていた。

夏海の頭の中に、ふと、梢の顔が浮かんだ。

梢も、同じ気持ちだったのかもしれない。何気ない気持ちで言った言葉でも、梢にとってはすごくショックなことだったんだ。だとしたら私、すごくひどい友達だ。これはやっぱり、私からちゃんと謝ったほうがいい。いや、絶対に謝らないと。

夏海は携帯電話を手を取った。メール作成画面を呼び出して、一文字ずつ丁寧に、梢の顔を思い浮かべながら入力していく。

——今日はひどいこと言っちゃってホントにごめんね——

ううん、何か違うなあ。やっぱり、（ごめんね）じゃ軽すぎるかな。謝るならちゃんとした言葉にしないと。

——今日はひどいこと言っちゃってホントにごめんなさい——
これでもちよっと軽いかな。

——今日はひどいこと言っちゃって本当にごめんなさい——
だいぶんマシになったけど、どこか違うんだよね。こんなに相手の気持ちを考えてメールを打つのは初めてかもしれない……。

——今日はひどいことを言っちゃって、本当にごめんなさい——
いくらなんでも、これは重すぎるか。これじゃまるで、テレビで

よく見る謝罪会見の挨拶みたいだもん。メールの内容がかたすぎるからって嫌われたらどうしよう。

でも、いいよね。大切なのは気持ちだもん。多少内容がおかしくても、精一杯考えて送ったってこと、梢に伝わるよね。

メールの本文をゆっくりと読み返して、夏海は送信ボタンに指を添えた。指に力を込めたところでふと不安になり、もう一度本文を読み直した。

念のために、もう一度メールを見直しておこう。もしかしたら何かの拍子でどこかの文字が消えてるかもしれないし。

——今日はひどいことを言ってしまったて、本当にごめんなさい——よし、これでカンペキ。これだけ心を込めたメールなら、梢もきつとわかってくれるはず。ケータイの電池が残り少ないから、はやく送信しなきゃ。

鼓動が速まるのを感じながら、夏海は送信ボタンに指を添えた。

そして、ゆっくりと指に力を込めていく……。

博士の覚醒

博士は、興奮していた。自らのあらゆる情熱を注ぎ込んでつくりあげた電磁波伝播装置のスイッチを手には、博士は一人、邪気を含んだ高揚感を噛みしめていた。

博士を駆り立てていたのは、自らの計画が間もなく遂行されようとしているという、きわめて閉鎖的な高揚感であった。それは、長年の理想をただ純粹に追求しつづけた科学者としての誇りのようでもあり、また、ささやかな悪戯の成功を無邪気に喜ぶ幼子の、果てしなく純真な好奇心のようでもあった。

——さあ、やるぞ——

博士は神妙な表情でスイッチに指を添えた。

——ついに、ついに——

博士の興奮が乗り移るように、スイッチに添えられた指に徐々に力が込められていく……。

（電池残量がなくなりました。すみやかに充電をしてください）

あまりにも素っ気なく表示されたメッセージに、夏海はちいさく舌うちをした。

何よ、もう。あとちょっとでメールが送れるところだったじゃない。せっかく心を込めてメールを打ったのに。まあ、いいや。寝てる間に充電しておいて、明日の朝一番にメールを送ればいいんだし。携帯電話に充電プラグを差し込んで、夏海は眠りについた。

研究室は、恐ろしいまでの静寂に包まれていた。妙に高揚した沈黙を縫うように、博士のくぐもった含み笑いがうつすらと漂う。

「クックック、ついに……ついに……！」

博士はまさに、恍惚の絶頂に浸っていた。積年の理想が、ようやく実現したのである。ただそれだけで、これまでの一切の苦悩と努

力が一瞬にして甘美な達成感へと変わるのだった。

込み上げる高揚感にたえきれず、博士は頭上高く両腕を突き上げて、そして叫んだ。

「ついにやったぞ！」

波紋（1）

朝の慌ただしさが漂うリビングに、制服姿の夏海が必死の形相で駆け下りてくる。

キッチンでは、美代子がせわしない様子で朝食の支度をしていた。そのスキをうかがうように、夏海はダイニングテーブルの上に置かれたトーストを素早くかじった。

「何やってるのよ。まったく、はしたないんだから」

どこに目がついているのか、美代子が夏海をたしなめる。

「だって忙しいんだもん！」

「それはあんたが寝坊するから悪いんでしょ。……そんなことより、いま世の中で大変なことが起こってるらしいわよ」

「大変なのはこっちよ！　今、授業に間に合うかどうかの瀬戸際なんだから」

二人の会話に割り込むようにトイレの扉が開いて、中から俊雄が出てきた。携帯電話を片手に、なぜか何度も首をかしげている。

「パン焼けましたよ、お父さん」

「ああ」

美代子の言葉にも生返事で、俊雄は携帯電話の画面を不思議そうに見つめている。

珍しいわね、お父さんがトイレで新聞を読まないなんて。しかも、そのかわりにケータイを熱心にいじってるし。そういえば昨日の夜、メールの送り方をやけにしつこく聞いてきたから、ひよっとしたらよっぽど急ぎのメールだったのかな。まあ、いいや。お父さんの仕事の都合なんて、私には関係ないし。あれっ……メール？

あっ、しまった。梢にメール送るの忘れてた。そのために昨日寝てる間にバッチリ充電しといたっていうのに。ああっ、慌てて起きたから朝のメールチェックも忘れてるじゃないの！

「あっ、もうこんな時間だ」

独り言のように呟くと、夏海はブレザーのシワをのぼし、玄関へと歩いていった。

「ニュースの説明がまだ終わってないわよ」

「そのことなら帰ってからゆっくり聞くから」

上体を後ろに反らせるようにして叫ぶと、夏海は玄関を出ていった。

開け放たれたままの扉にむかって、美代子は叫んだ。

「ケイタイが使えなくなっただってよ！」

教室は、いつになく無秩序にざわめいているようだった。クラスメイトたち（半分以上は女子）のとりとめもない嬌声が扉ごしに聞こえてくる。

夏海が引き戸を開けると、そのざわめきが夏海の耳へと一気に襲いかかってきた。まさに、雑音のサラウンド状態である。

「ねえねえ、夏海！」

ざわめきのすき間から、梢の興奮した声が聞こえてきた。

「朝のニュース、見た？」

「えっ、何のこと？」

「ウツソー！ まだ見てないの？」

キョトンとする夏海に、梢は大げさなほどに目を丸くしてみせた。「昨日の夜からあんなに騒いでるのに」

夏海は、不思議だった。昨日あれほど激しいケンカをしたのに、梢は今、何事もなかったかのように喋っている。本当に昨日のことを忘れているのか、あるいは忘れたふりをしているのか、夏海は不思議だった。

「ねえ夏海、聞いているの？」

「う、うん」

やはり昨日のことがひっかかり、返事もついきこちなくなってしまう。

「それで、何があったの？」

「だから、ケータイの電波がなくなっちゃったのよ」

「ああ、そうなの……って、ええっ！」

遅ればせながら、夏海は目を丸くした。電話が使えなくなるというのは、確かに一大事だ。

「アラーム機能とか計算機能とかは平気なんだけど、電話とメールだけが使えないのよ。っていうか、今ごろ気付いたの？」

「……うん」

曖昧に頷きながら、夏海は今朝起きてから今までのことをゆつくりと思い起こしていた。

今日も寝坊しちゃって、学校に遅れないようにってあせってたから、朝からケータイをいじる時間がなかったんだ。そういえば、お母さんが何かしつこく言ってたつけ。もしかしたらそれって、ケータイが使えなくなったっていうニュースだったのかもしれない。

「それって、みんなのケータイが使えなくなったってこと？」

「そうじゃないのかなあ、たぶん」

自信がなさそうにこたえると、梢はポシエットから自分の携帯電話を取り出した。

「ウチのケータイは、昨日の夜からずっとこれだもん」

梢は恨めしそうに、携帯電話の待受画面を夏海に見せた。梢にはいささか不釣り合いかと思われるグロテスクなガイコツのマンガ……はともかくとして、確かに画面隅の電波表示は圏外になっていた。地下にある音楽室や視聴覚室ならともかく、普通の教室で電波が圏外になるのは、ちよつと変だ。

「夏海も、自分のケータイを確かめてみなよ」

「ああ、はい」

梢に促されるままに、夏海は自分のケータイを取り出して、開いてみた。昨日の充電のおかげで電池残量ゲージはマックスになっていたが、やはり電波は圏外であった。わずかな希望を託してケータイを窓の外にかざしてみても、やはり圏外の表示が消えることはなかった。

あらためて周囲を見まわしてみると、電波の復活を願いながら電話を何度も振ってみる生徒、友人と一緒に解決策を懸命に探る生徒、対抗手段が何一つ浮かばず、ただひたすら不満をぶつける生徒……まさに統一感のない惨状が繰り広げられていた。そして今、自分もその混乱の輪の中に巻き込まれているのだ。

その混乱の渦の中で、ただ一人、喧騒には一切加わろうとせず、我関せずといった態度を崩さない生徒がいた。学校一の秀才、湯沢勉である。クラスの中、いや、学校の中で唯一携帯電話を所持していない彼は、周囲の雑音を完璧に遮断しているかのごとき達観した表情で黙々と参考書に目を通してのだった。まるでそれが、優等生に課せられた当然の義務であるかのように。

教室の引き戸が開いて、萩原が入ってきた。

「おいおい。何の騒ぎなんだ、これは」

普段以上に雑然とした教室を、萩原は呆れたように見まわした。

「出欠をとるから返事しろよ」

ざわめきの収束をはかる努力すら見せずに、萩原は出席簿を開いて出欠をとりはじめた。だが、誰一人として返事をする生徒はいない。

「安倍、安藤、石橋……」

名前を呼ぶ声すらも、教室全体を支配する無秩序な喧騒の中にあっけなくかき消されてしまう。

萩原の怒りは、頂点に達した。

「いい加減にしろ！」

渾身の力で怒鳴り、教卓まで思いきり叩いてみたが、いっこうに雑音が静まる気配はない。

「おい、少しは静かにしろよ！」

「そんなこと言っちゃって、今、緊急事態なんですよ」

携帯電話を片手でせわしなく操作しながら、梢は言った。

「緊急事態？」

「ケータイの電波が届かないんです」

「そうよ、そうよ!」

梢の言葉に勢いを得たのか、教室にいる女子全員が萩原に詰め寄る。

女子たちの熱気に気圧されそうになりながらも、萩原は叫んだ。

「届かないのは俺の指示だ!」

波紋(2)

会社に着いたのは、出社時刻の二十分前だった。こうして毎日定刻よりも早めに出社するのは、山積した業務を少しでも片付けておきたいという、会社員としての本能とも言うべき意識がはたらくせいでもあるのだが、もう一つ理由があった。

俊雄の予想通り、オフィスにはもう、香織の姿があった。仕事への熱意をうかがわせる表情でパソコンに向かい、淡々とキーボードを叩いている。

「おはようございます、係長」

パソコンのディスプレイから視線を上げて、香織は微笑んだ。すべてを受容するようなこの微笑を目にしただけで、不必要な早起きや駅から会社までの意味もない小走りが一瞬にして報われる。

「今日もお早いですね」

「君こそ、毎日僕より先に出社しているじゃないか」

「私は仕事が遅いですから。他の人より早く始めないと片付かなくて」

「そんなことないさ。君の仕事ぶりは部長も高く評価してると思うよ」

さして内容のない、しかし確実に心の栄養補給になる会話を楽しみながら、俊雄は自分のデスクについた。

壁の時計は、八時十五分を指していた。

俊雄は空席になっている中里のデスクに目をやって、

「あいつ、今日もぎりぎりにくるつもりだな」

苛立ったようにそう呟くのが、いつしか朝の習慣になっていた。

「そういうところだけは几帳面なんだから」

中里の小生意気な顔を思い浮かべると、どうしても仏頂面になってしまう。

「さあ、今日も始めるか」

パソコンのスイッチに指をのばしかけて、俊雄はあることを思い出した。

そうだ。昨夜のメールのことを、まだ香織に謝っていないではないか。今朝起きてからオフィスに入るまでずっとそのことを考えていたというのに、なぜ謝るのを忘れるのだ。これは上司として、いや、男として致命的な失態だ。香織はきっと、昨日は一晩中上司からのメールを待って一睡もできなかったに違いない。にもかかわらず、彼女は今、何事もなかったかのように仕事にうちこんでいるのだ。ああ、何と健気で可憐な姿なのだろう！

「あの……私の顔に何かついてますか」

気がつくと、俊雄の視線は香織に固定されていた。戸惑いがちな香織の表情にふと気恥ずかしくなり、俊雄はわざとらしく咳払いをした。

「実は、小野寺君に謝りたいことがあるんだ」

不自然なまでにあらたまった俊雄の口調に、香織の顔も緊張する。「せっかくアドレスを教えてもらったのに、メールを送れなくて、本当にすまなかった」

オフィスの空気が張り詰めた。しかし、それも一瞬のことだった。「いいんですよ、そのことなら」

香織の寛容かつアンニュイな微笑に、俊雄の内心の緊張も一気にほぐれる。

「係長はニュースをご覧になっていらっしゃらないんですか」

「ニュース？」

鸚鵡返しに問い返す俊雄に、香織はやっぱりな、という風に微笑んで、

「実は今、日本中で携帯電話が使えなくなってるんですよ」

「えっ……日本中で？」

「ええ。その証拠に……」

香織は立ちあがると、携帯電話を片手に俊雄のデスクへと歩いてきた。

「ほら」

香織が見せたのは、携帯電話の待受画面だった。

「圏外になってるでしょう」

と、香織は画面上隅の電波表示を指し示した。

「なるほどね」

ぼつりと、俊雄は呟いた。確かに、地下室にいるわけでも、鋼鉄製の壁に囲まれた密室にいるわけでもないのに電波が通じないというのは、やはり何かおかしい。

「係長の電話もそうなんですか」

「うん、実はね……」

曖昧に頷くと、俊雄は上着のポケットから携帯電話を取り出し、開いてみせた。

香織は俊雄に顔を寄せるようにして、携帯電話の画面をのぞきこんだ。香織の全身からたちのぼるほのかな芳香が俊雄の鼻腔を刺激する。

「やっぱり圏外になってますね」

軽く頷くと、香織は自分のデスクに戻った。香織の芳香の余韻が俊雄を優しく包み込む。

「ケイタイが使えないといういろいろ不便ですよね」

「ああ、そうだな」

反射的にそう呟いてはみたものの、携帯電話が使えないことによってどのような不便があるのか、俊雄にはイメージできなかった。仕事上のやりとりは会社のパソコンのEメールで事足りるし（Eメールという言葉も、俊雄は二年前に初めて知った）、プライベートで携帯電話を使う機会も、ほとんどない。

しかし一つだけ、不利益が思い浮かんだ。携帯電話の電波がつかまらないということは、当然、香織とのメールもできないということとだ。それは、俊雄にとって、由々しき問題であった。せっかくなにかみかけたはずの部下との交流の糸口が消えてしまうではないか。「逆に良かったのかもしれないね、ケイタイが使えなくなつて」

「どうして？」

「塚原さんと直接お話する機会が増えるから」

と言って、照れたように香織は笑った。

「やっぱり、相談事は面と向かって話すのが一番ですもんね」

不用意に感情を吐露してしまった自分を恥じるかのように、香織は言った。

何事もなかったかのようにキータイプを再開する香織を、俊雄は健気だと思った。それは、上司としての事務的な評価ではなく、人間として、いや、男としての、きわめて個人的な感情であった。美代子にもかつて、こんな感情を抱いていたのだろうか……。

俊雄の内心にわずかによぎった郷愁を、惰性的な靴音があっけなくうち砕いた。

「おはようございます」

オフィスに入った中里は、いつになく緊張した表情をしていた。

「係長、大変ですよ」

「どうした」

「昨日の夜から、日本全体でケータイの電波が……」

「そのことなら小野寺君から聞いたよ」

中里の話を遮るように、俊雄は手を振った。

「今、日本中で携帯電話の通話やメール機能が使えないって話だろ」

「そうですか……」

話を途中で遮られたことが気に障ったのか、中里は不満げに呟いて自分のデスクに着いた。

「ケータイが使えないと不便ですよね。仕事の面でも、プライベートな面でも」

「そんなものかね」

突き放したように言うと、俊雄はつまらなそうに鼻を鳴らした。

「みんな、真面目に仕事をしてるじゃないか」

ベテランらしい落ち着いた靴音を響かせて、井上が入ってきた。

「塚原君、ちょっといいか」

「はい、何でしょうか」

反射的に、俊雄は立ちあがった。その種の反射神経は、古老社員の域に入った今でも衰えていない。

「朝のニュース、見たか」

「ええ、携帯電話が使えなくなったっていう……」

「困ったことになったな」

と、井上は眉根を寄せて、苦渋に満ちた嘆息を洩らした。

「……と、言いますと？」

「君に任せた新プロジェクトのことだよ。あれは、ケータイが使えないことにはどうにもならんだろう」

ここで初めて、俊雄は自分の置かれた状況に気がついた。新プロジェクトというのは、女子高生やOLたちの商品に対する要望を携帯電話上のホームページ（ケータイサイトと呼ぶらしい）でアンケートによって集計し、その意見を新商品の開発に役立てるというもので、要するに携帯電話が使えなければどうしようもない類のプロジェクトなのである。

「まあ、まずはケータイ騒動の成り行きを見てからだな。明日になったら電波が復旧するかもしれないし」

安心させるように、井上は微笑んでみせた。しかし、まだ一抹の不安が残るのか、井上は俊雄にしか聞こえない程度に声をひそめて、「しかし、どんな状況にもしもというのはつねにあり得る。その時は、君も覚悟してくれよ」

と言い置いてオフィスを出ていった。

「もしもの時、か……」

脱力感にとらわれて、俊雄は崩れるように椅子に腰を下ろした。

井上が何を示唆しているかということは、会社人間として、俊雄にもよくわかっていた。しかし、今の段階において、俊雄はそのことについて深く考えたくはなかった。いったんそのことについて思案をめぐらせてしまうと、思考がとめどなく悲観的な方向に流れていってしまいそうで、俊雄はこわかったのである。

「大丈夫ですよ、係長」

暗く沈みつつある俊雄の意識に、香織の遠慮がちな慰めがほのかな光をともし。

「きっと明日には元に戻りますって」

「ありがとう、小野寺君」

ごく自然に、俊雄は微笑んでいた。

香織の言う通りだ。闇雲に悲観的になっても仕方がない。新プロジエクトのことは、しばらく考えないでおこう。

すぐに、結果は出るのだから。

朝の炊事や洗濯を終えて、美代子はリビングでのんびりコーヒを飲んでいた。一連の家事から解放されてたった一人でコーヒープレイクを楽しむのが、美代子の貴重な日課になっていた。

しかし、今日は一ヶ所だけ、いつもと違うところがあった。美代子の手に、携帯電話が握られているのである。

「つながらないわねえ」

と言って、美代子は唇を尖らせた。

「やっぱりダメなのかしら」

などと呟きながら、携帯電話を左右に振ってみる。しかし、いくら激しく振ってみたところで、いっこうに電波が復活する気配はなく、液晶画面の残像が眼にちらつくだけだった。

テレビのワイドショーは、携帯騒動のニュースで持ちきりだった。スーツをきっちり着込んだアナウンサーが深刻そうな表情で騒動の概要を伝えている。

「ケータイが使えないと、マジ困りますよねえ」

最近売らだしたばかりの、女子高生を中心に人気のある女性タレントが、特徴のある間延びした口調で言った。あまりにも周囲を意識していないだらけた物言いに、美代子は眉根を寄せる。

何なのよ、あの子は。まるで友達に話しかけるような口調で喋ってるじゃない。もしかして、スタジオを学校の教室か何かと勘違い

してるんじゃないかしら。こういう子でも簡単にテレビに出られるんだから、時代は変わったものね。

しかし、彼女の不躰な態度を一方的に嘆いてばかりもいられないのだった。携帯電話が使えずに困るのは美代子も同じなのだ。わずかな希望を託してもう一度携帯電話を振ってみるが、それでも電波は圏外のまま。

一体どうなっちゃったのかしら。テレビでも騒動の原因はわからないって言ってるし、もうどうしたらいいの！ このままじゃ、近所の奥さんからスーパールの安売り情報が届かないじゃないの……。

そういえば、夏海はどうしてるのかしら。携帯が使えなくて困ってるんじゃないかしら。あの子、一日中電話を手放さないから、今頃きつとパニックになってるわ。あの子にとって、携帯は（お守り）なのかもしれないわね。

ため息まじりに、美代子はコーヒーを啜った。

やけに、苦い味がした。

博士の狂気

独立記念日とあって、街は心地良い高揚感に包まれていた。しかし、そんな高揚感などには関係なく、博士はある種狂気じみた恍惚感に浸っていた。

早朝からつけたままにされたテレビには、日本の携帯騒動に関する報道が流されていた。インタビューにこたえる人々はみな、困惑と混乱の入り混じった表情を浮かべている。

「計画は成功したようですね」

若干の皮肉を込めて、助手は言った。

「そう、大成功だ。見ろ、みんな今回の騒動に混乱してるじゃないか。これで、日本の携帯電話信仰にも歯止めがかかるだろう」

助手の心情など一切関知しない様子で、博士は満足げに笑った。

「本当に、これで良かったのでしょうか」

「なぜわかりきったことを聞くのかね、君は」

興奮の余韻に水を差されたのが不満なのか、苛立たしげに博士は言った。

「これでやっと、我々の長年の夢が実現したのだ。これ以上の幸福はないではないか」

まるで悪戯の成功を誇らしげに語る無邪気な子どものように微笑む博士に、助手はそれ以上何も言えなかった。しかし、ただ一つだけ、助手の心にどんよりとわだかまるものがあつた。

我々――博士は確かに、我々の夢だと言った。一体いつ、俺は博士と同じ夢を持ったというのだ。連日の徹夜も厭わずにこれまで研究に血道を上げてきたのは、自分の研究がやがて世界の科学技術の向上に貢献する日を待ちわびているからであって、決して博士のきわめて利己的かつ幼児的な好奇心を満足させるためではない。

しかし、もう博士の暴走を阻止することはできないのだ。そのための対抗策は、何一つ残されていないのだから。

戸惑い

「 $x+6y=8$ という一次方程式のグラフは……」

硬質な静寂を背中に受けながら、笹本はいつになく熱心に数式を黒板に記していた。チョークと黒板の触れ合う音が室内に小気味よく響く。

「この等式を一次関数のグラフで表すと……」

淀みなく、笹本は黒板にグラフを書いていく。このあたりで少し解説に入ろうかと思い、笹本は振り向き、そしてかすかに肩を落とした。

教室全体が、無法地帯と化していた。ほとんどの生徒が携帯電話と無言の睨み合いをつづけ、授業に参加しているのはただ一人――学校屈指の秀才、湯沢勉だけであった。黒板とノートの間に視線を往復させ、まさに機械的な勢いで黒板の数式をノートにうつしている。

「みんな、携帯電話に夢中なんだね」

「朝からずっとこの調子ですよ。携帯電話の電波を何とか復活させようと、みんな必死みたいです。他にやるべきことがあるだろうに、まったくいい気なもんだ」

「湯沢君……」

「大丈夫ですよ。僕らの言葉なんか、こいつらの耳には届きません」人間味の一切感じ取れない湯沢の冷笑に、笹本の背筋に寒気が走った。チョークを持つ手がかすかに震える。

「君は大丈夫なのかい」

「ぼくは携帯電話を持っていませんから」

ここで初めて、湯沢は顔を上げた。よく磨かれた銀縁眼鏡のレンズに、窓からの陽射しが鋭角に反射する。ノートには、すでに黒板の文字が一文字変わらず完璧に転記されていた。

「授業を進めませんか、先生」

眼鏡のツルをわずかに持ち上げて、湯沢は言った。いかにも無意味な雑談に関わり合っている余裕はないんだと言いたげに、そしてさらなる獲物を与えろと貪欲に催促するかのように……。

「ああ、そうだね」

一抹の寂寥感を抱きながら、笹本はふたたびチョークを握った。

「西島先生はいらっしゃいますか！」

「西島先生に会わせてください！」

「今、すごい緊急事態なんです！」

「もう、うるさい！」

職員室前の廊下は、女子生徒たちの甲高い嬌声で埋めつくされていた。校内一のイケメン理科教師である西島圭介に携帯騒動の原因を聞こうと、授業の合間のわずかな時間を利用して職員室に押しかけているのである。

「もうすぐ授業だろ。こんなところで遊んでないで、さっさと教室に戻れ！」

女子生徒の大群に押し潰されそうになりながら、生徒指導の北川は言った。押し寄せる女子生徒たちを是が非でも職員室に入れさせまいと、地肌がかなり露出した頭頂部まで朱色に染めている。

「西島先生にご相談があるんです」

「西島先生は今お忙しいんだ。理科に関して何か相談があるなら俺に言え。俺も一応は理科教師なんだから」

自分で一応とつけてしまうところが、北川のわかりやすいところなのである。

「西島先生じゃなきゃダメなんです！」

威勢よく訴える夏海に、その他の女子生徒も同調する。だが、（西島先生のほうがイケメンだから）とは、さすがの夏海も口に出せないのだった。

「早く西島先生を出してください！」

「だから、先生は今お忙しくて……」

夏海たちの圧力に屈したのか、北川は温泉マークにも似たそのハゲ頭をかきむしった。

女子生徒の怒声のすき間を縫うように、軽快で滑らかな靴音が近づいてきた。

靴音のする方向に、夏海は素早く顔をむけて、

「あっ、西島先生！」

「おやおや、可憐な美少女たちがおそろいで。一体僕に何の用かな」

「西島先生、こいつらにあまり関わり合わないほうが……」

「ご心配は感謝いたします、北川先生。ですが、生徒をこいつらと呼ぶのは感心しませんねえ」

「さすが西島先生！」

女子生徒から歓声があがる。

「知りませんよ、私は」

自分がないがしろにされたことが不満なのか、北川は不機嫌にそう言い残して職員室に入ってしまった。

「実は私たち、西島先生に相談があるんです」

さきほどの威勢はどこへやら、緊張した表情で夏海は切り出した。

「ほう、相談か。生徒から相談を受けるのは教師として望外の喜びだ」

と、西島は大げさなほどに頷いてみせて、

「それで、どんな相談なんだい」

「ケータイが使えなくなった事件についてなんです……」

「その件なら、僕も関心を寄せていたよ。何しろ、ある日突然携帯電話の電波がつかなくなるといのは、科学的にも非常に興味深いことだからね」

「そうですね、やっぱり」

西島が自分たちの相談に対して否定的ではないとわかって、夏海は安心したように頬を緩めた。その他の女子たちも、西島の一言一句を聞き逃すまいと必死に耳をそばだてている。

「しかし、一連の現象が人為的に起こされたのだと証明されていな

い以上、事件ではなく事故と言ったほうが適切だろう。いずれにしても、君たちが今、大変な混乱に巻き込まれているということには変わらないだろうがね」

と言って、西島は静かに微笑んだ。時折見せるこのクールな微笑が西島の人気の一因であった。

「携帯騒動の原因は何ですか」

夏海の問いかけに、西島は深く考え込むように切れ長の眉をよせて、

「それは僕にもわからないよ。電話会社の通信システム異常か、あるいは誰かがイタズラで電波の干渉現象を誘発しているか、今のところ考えられるのはこの二つだね。いずれにしても、詳しい原因がわからないうちにむやみに騒ぎたてるのは、かえって混乱を招くだけだよ」

「さすが西島先生。冷静でカッコイイ！」

当たり前のことをごく普通に言っているだけなのだが、世の中にはこういう特殊な運をもった人間も少数ながら存在するのである。

そして、そうした「強運な」人間の陰には、その何倍も不運な人間もいるわけで……。

「用件はもう済んだだろ。ここにいられても迷惑だから、さっさと教室に戻れ！」

「言われなくても戻りますよ！」

「そんなに怒鳴らなくても……」

今にもかみつきそうな夏海たちの勢いに、北川は情けないほどに委縮していた。あたり前のことを言っているのも周囲（特に女子生徒）から反発を買う運命を、彼は背負っているのだった。

「西島先生、ありがとうございました」

と、夏海は西島にむかって丁寧に一礼した。それにならうように、他の女子生徒たちも神妙に頭を下げる。

「普段は教えてもちやんとやらんくせに」

卒業式でも見せたことのないような丁寧なお辞儀に、北川はちい

さく毒づいてみせた。

「では、失礼します」

敵意のこもった一瞥を北川に浴びせて、夏海たちは教室へと戻っていった。

「どういうつもりなのでしょね、まったく」

北川は苛立たしげに腕組みをして、憤慨の色を帯びた呟きを洩らした。そして、西島に同意を求めるように視線を投げかけたが、西島のほうはいたって呑気に整った鼻をひくつかせながら、

「ああ、麗しき少女たちの香水よ。何と芳しい香りなのだろう！」
などと言っている。

「俺だって一応理科教師なのになあ」

女子生徒の芳香の余韻に浸っている西島を横目で睨みながら、北川はうらめしそうに呟いた。

暗雲

「係長、ちょっとよろしいですか」

書類の処理を続ける俊雄に、香織がそつと声をかけた。

「奥のデスクで部長が呼びなのですが……」

香織の遠慮がちな口調に、俊雄の内心に鈍い予感が忍び寄る。

「わかった、ありがとう」

みじかく返事をして、俊雄は立ちあがった。

いつになく、井上は険しい顔をしていた。虚空の一点を睨みつけて、思案げに腕組みをしている。

「お呼びでしょうか、部長」

俊雄の言葉に、井上は途方に暮れたようにため息をついて、

「例のプロジェクトだけどねえ」

「はあ……」

いやな予感がした。井上の険しい表情といい、香織のどこか遠慮がちな口調といい、少なくとも俊雄にとって朗報ではないということとは容易に推察できた。

「あれ、中止になったよ」

予感は、鈍い戦慄に変わった。全身の血液が急速に冷却されていくような虚脱感が、俊雄ににじり寄る。

「正確に言えば一時凍結というかたちなのだが……ほぼ中止になったと考えたほうがいいだろう。ショックだろうが、まあ我慢してくれ」

と言って、井上は一切の苦渋を吐きだすかのように深く息を吐いた。

井上がただ事務的に今回の一件を伝えているのではないことは、俊雄にもよくわかっていた。それは井上の浅黒い顔に浮かんだ苦悩の色からも、またこれまでの仕事上の付き合いからも充分に想像可能であった。

だからこそ、辛いのだ。何の私情も交えることなく事務的に通達されたなら、俊雄もこれほど心痛にとらわれることはなかっただろう。

「この埋め合わせはあとで必ずする。来年度の人事異動で君に有利なポストが用意されるように、僕から上層部に図っておくよ」

「ご配慮、ありがとうございます」

俊雄は深く頭を下げた。

「仕事中にすまなかったな。もうデスクに戻ってかまわないよ」

「では、失礼します」

俊雄はもう一度、今度は事務的に一礼して、井上に背をむけて歩きだした。

あのプロジェクトは、常務の肝いりで案出されたものだ。そのプロジェクトの指導者に抜擢されるということは、会社組織の人間として認められたことを意味する。それに、収入などの面でも少なからず良い影響があるだろう。そんな現実的な算段が、俊雄にはあった。

しかし、その希望的観測が一気に崩壊しようとしているのだ。あるいは、もうすでに崩れ去っているのかもしれない。

「大丈夫ですか、係長」

デスクに戻ると、香織が気遣わしげに声をかけてきた。

「プロジェクトのことで、部長に何か言われたんですか」

「うん、ちょっとね」

俊雄は曖昧な微笑を浮かべた。

「今回のプロジェクトは、一時凍結になったよ」

報告はもう少し先にのばしたかったのだが、香織もプロジェクトのメンバーなのだ。それに、この種の事柄はいつまでも隠し通せるものでもない。

「そんな……」

香織の艶やかな目元に、さっと陰鬱な淀みが走る。

「まあ、君はまだ若いんだ。このプロジェクトがなくなったとして

も、チャンスはまだまだたくさんあるさ」

安心させるように、俊雄は言った。

「本当に、大丈夫ですか」

「ああ。こう見えても、仕事にかけては君たちよりもずっとベテランなんだ。この程度のハプニングくらい、何度も経験してるさ」

俊雄はあえておどけてみせたが、あとに残ったのは苦い虚しさだけだった。

「それを聞いて少し安心しました。でも、あんまり無理しないでくださいね。塚原係長は私たちの頼れる上司なんですから」

「ありがとう、小野寺君」

無意識のうちに、俊雄は微笑んでいた。

「大丈夫ですよ、係長。プロジェクトが潰れても、クビにはなりませんから」

いつの間にデスクに戻ったのか、中里が本気とも冗談ともつかない口調で言った。

「ああ、ありがとう」

と俊雄は言っ、そして苦笑した。多すぎるコーヒブレイクを注意する気には、どうしてもなれなかった。

友情

いつになく、テラスは静かだった。（ケータイ騒動）の影響なのか、テラスで昼食をとる生徒は少なく、かえって落ち着いて食事をするにはちょうどよい環境になっていたのである。

「それにしてもすごかったよね、あの時の夏海」

「あの時って？」

「ほら、西島先生にケータイ騒動の原因を聞きに行ったじゃない」

「ああ、あの時ね」

と頷きながら、夏海は内心に妙な気恥ずかしさが込み上げるのを感じていた。

「あの時の夏海はホント、すごかったよ。何か、頼れるリーダーって感じ」

「先生に怒られるよね、私たち」

不意に不安そうな表情になって、梢は言った。

「そうになったら、（塚本さんに無理やり誘われました）って言うからね」

「何でそうなるのよ」

「だってホントのことでしょ」

「確かに最初は私が誘ったかもしれないけど、梢だって西島先生に見とれてたじゃない」

「まあ、そうだけどね」

梢は悪戯っぽく笑った。

「だってホントにかっこいいんだもん、西島先生。教師にしておくにはもったいないよ」

「そう、そう」

などと同調しながらも、夏海は内心の焦りが徐々にふくらんでいくような感覚に戸惑っていた。弁当を食べても、何の味も感じない。早く、謝らないと。昨日のメールも結局送れなかったし、このま

まだとケンカを解決しないまま終わっちゃう。

それでも、いいか。梢は昨日のケンカのことを忘れてるみたいだし。

いや、やっぱりそれじゃダメだ。梢がケンカを忘れていたとしても、私は今、はっきりと覚えている。もしここで謝らなかったら、きっと一生後悔する。どんなに辛くても、大切なことはちゃんと伝えないと。メールじゃなくて、自分の言葉で。

「ちょっと、聞いてくれるかな」

「何よ、急にあらたまって」

めったに見ることのない夏海の真顔に、梢は戸惑いがちに微笑した。

「あの、梢……」

夏海はそう呟いたが、あとの言葉が続かない。

あれ、おかしいな。言葉がうまく喋れない。メールではすらすらと心にもないことまで打てるのに、どうしてこんな時にかぎって頭が真っ白になるのよ。

「どうしたの、夏海」

「梢、私……」

「ちょっと、夏海。大丈夫なの？」

梢が心配げに眉を寄せる。見えないプレッシャーに、夏海は全身が急激に火照るのを感じた。

「夏海、顔が真っ赤だよ」

それは自分でもわかってる。わかってるけど、どうにもならないのよ。何だか、口の中がカラカラになってきた。

何を言えばいいのかは、わかってる。けれど、肝心の言葉が出てこない。どうしてこんなに難しいんだろう。ただ、自分の気持ちを素直に言葉にすればいいだけなのに。そう、今の自分の気持ちを……。

「昨日はごめんなさい！」

やっこの思いで、夏海は言葉を絞りだした。精一杯の力で吐き出

された言葉は、テラスの天井に反響し、夏海の耳にも深く響いた。

「昨日って……何のこと？」

とぼける風でもなく、梢は聞き返した。

「昨日のお昼に、私、梢にひどいこと言っちゃって……」

「ああ、あのことね」

梢は軽く微笑んで、

「あのことなら、全然気にしてないわよ」

「ホントに？」

不安げに問いかける夏海に、梢はおかしそうに笑って、

「そんなことをいちいち気にしてたら友達じゃいられないって。だって親友でしょ、私たち」

「親友……」

梢の言葉が、夏海の心の中で何度も反響する。

いつしか、夏海は涙ぐんでいた。そして、（親友）という言葉を軽々しく使っていた自分が、たまらなく恥ずかしくなった。

「ありがとう、梢」

「どうして泣いてるのよ、夏海」

「おかずの味付けが辛くて」

「何よ、それ」

と言って、梢は呆れたように笑った。それにつられて、夏海も笑った。今までに経験したことのない感情が込み上げてくる。

何だろう、この楽しくてはずんだ気分は。もしかしたら、梢とこうして心から笑い合ったのは初めてかもしれない。

「何か恥ずかしいね、こういうのって」

「何だか、ホントの友情って感じ」

「ちょっと古くさいかな」

「いいんじゃないの。こういうのもたまには、さ」

二人はふたたび笑い合った。それは、何の計算も忍び込む余地のない、純粋な笑い声だった。

梢はちらっと壁の時計を見て、

「授業が始まっちゃうから、ホントに急がないと
と焦ったように言った。」

「じゃあ、私は先に行くね」

「うん。すぐに追いかけるから」

「遅刻は厳禁ですからね、塚原さん」

おどけた微笑を残して、梢は立ち去った。急がないといけないとはわかっていながらも、夏海はもう少しこのはずんだ余韻に浸っていたかった。守とのデートでも味わったことのないような高揚感が胸に込み上げてくる。

昼休みがもっと長ければいい——夏海は初めて、本気でそう思っていた。

確執

昼食を簡単に済ませて、美代子は午後の休息を楽しんでいた。正確に言えば、楽しもうとしていた。（ケータイ騒動）のことが気がかりで、せっかくの休息时间も心から休めないのである。

ほぼ五分刻みで携帯電話の電波をチェックしてみるものの、依然として圏外のまま。ニュースを見ても、相変わらず専門家たちの根拠のない憶測が飛び交うばかりで、ちっとも参考にならない。

一体、どうなってるのよ。専門家たちも口をそろえて（原因はわからない）と言うだけで、ちっとも頼りにならないじゃないの。

それに、何よ。あの、学校をサボって出てきたような下品な女子高生タレントは。根拠のない迷信を軽々しく発表されても迷惑なのよね。電話を地面に垂直に立ててみたけど、全然効果がないじゃないの。

ニュースの情報はまるで統一性に欠けたいい加減なものであったが、ただ一つはつきりしているのは、今、日本中で携帯電話が使えなくなっているということである。ということは、夏海や俊雄の電話も通信不能の状態にあるのだ。俊雄はめったに携帯電話を使わないからともかく、夏海のほうは今回のことで相当なショックを受けているはずだ。何しろ、自他ともに認める（ケータイ依存症）である。携帯電話はお守りがわりだと公言してはばからないのだ。もしかしたらパニックになっているのではないか、勉強意欲をまったくなくしているのではないか（それはもともとではあるが）などと、心配の種は尽きないのだった。

しかし、誰よりも困っているのは、何と言っても美代子自身である。主婦仲間からのスーパーの安売り情報に関するメールが届かないというのは、家計をあずかる身として死活問題なのだ。

美代子の不安などまるで関知しないように、呑気に電話が鳴った。「もしもし、塚原ですが」

「私じゃよ、美代子さん」

電話の声はトメのものだった。録画した大河ドラマでも観ているのだろうか。声のうしろで戦国武将が刀を交えるような仰々しい音が聞こえている。

「あら、お義母様。どうなさったのですか」

心なしか背筋を伸ばして、美代子は言った。決して不仲というわけではないのだが、トメとの会話はどうも緊張してしまう。

「今日からそっちでお世話になることは、俊雄から聞いておるじやろう」

「ええ、伺っております」

「今からこっちを出るから、夕方頃にはそっちに着くじやろう」

「今回も電車でこられるのですか」

「そのつもりじゃよ。長旅には汽車が一番じゃからな」

と言って、トメはカラカラと笑った。

「でしたら、東京駅に着いたらお電話ください。私たちが駅まで迎えに行きますから」

「それは駄目じゃ!」

「お義母様?」

美代子は困惑した。トメは確かに矍鑠としているが、いきなり声を荒げるような人ではない。何か気に障ることも言ったのだろうか。

しばらく間があって、

「ああ、すまなかつたね。こっちのドラマが盛り上がってきて、私もつい力が入ってしまったのじゃよ」

また始まった、と美代子は思った。まったく関係のない方向に話がそれてしまうのは、トメのいつもの癖だ。

沈黙がおとずれた。きつと、電話中であることを忘れてドラマに夢中になっているのだろう。

「あの、お義母様」

「ああ、そうじゃった。まだ電話中だったね。それで、何の話をし

てたのかな」

「私たちが駅までお迎えに行くというお話です」

「そのことなら結構じゃよ、美代子さん。心配してくれるのはありがたいが、私はまだまだ若いんだ。自分一人でも充分歩けますよ」

「そうですか。でも……」

「年寄りを見くびってもらっちゃ困るよ、美代子さん」

と凄んでみせたかと思うと、すぐにトメは楽しそうに笑った。

「今から出発すれば汽車にも間に合うじゃろう。汽車にだけは何かあっても乗り遅れたらいかな。田舎の汽車は一時間に一本しかないんだから」

自分に言い聞かせるようにトメは言う、そのあとで（一時十五分、一時十五分）と念仏のように繰り返した。どうやら汽車の発車時刻らしい。

「おいしい茨城土産を持って行くから楽しみにしててちょうだいな。それと、夏海には高校の入学祝いをやらないといかんね」

「そんなにしてくださいださなくても……」

遠慮ではなく、美代子は本当に恐縮していた。こっちからはほとんどお返しすらできないのに一方的に厚意を受けても、かえって気を遣うだけなのである。

「とにかく、夕方にはそっちに着くから。その頃には俊雄たちも……」

中途半端な語尾を置き去りにして、トメの言葉が途切れた。ドラマがクライマックスに入ったのだろう。武士たちの刀がぶつかる激しい音が受話器越しにも伝わってくる。

「あっ、そうじゃった」

というトメの短い呟きの後、あっけなく電話は切れた。

お義母様、大丈夫かしら——美代子は、不安になった。いくら好きなドラマに熱中していたとはいえ、自分からかけた電話を切り忘れるような人が、一人で東京まで出てこられるのだろうか。

これからのトメとの暮らしの窮屈さを暗示しているようで、美代

子はちいさくため息をついた。

誘惑

午前の仕事を片付けて、俊雄は行きつけの定食屋で昼食をとっていた。味はそれなりだが会社の近くのので、昼休みにはこの店で手早く食事を済ませるのが数年前からの日課になっていた。

「開いてますか」

引き戸が開いて、若い女性の声が聞こえた。こんな古びた店に女性がかかるとは珍しい。

「相席、よろしいですか」

俊雄の座っている席まで近づいて、彼女は言った。

「いや、ちょっと……」

俊雄は怪訝そうに言った。空席は他にもたくさんあるのになぜ――疑問を胸に顔を上げると、声の主は香織であった。

「小野寺君……」

「こんなところにいらしたんですね、塚原さん」

香織は微笑むと、俊雄の向かいの席に腰を下ろした。

「毎日ここでお昼を召し上がってるんですか」

「うん、まあね」

「オフィスにはいらっしやらないみたいだったから、この近くで落ち着いて食事ができるところと言ったらここかなと思って」

「昼休みはだいたいここにいますよ」

俊雄はそうこたえて、水を一口流し込んだ。

「実は私、係長に相談があるんです」

定食を注文しておいてから、香織は切り出した。

「相談？」

にわかに真剣味を帯びる香織の口調に、さんまの身をほぐす俊雄の手がとまる。

「ご迷惑……ですか？」

「いや、そんなことはないよ」

と、俊雄は即座にこたえた。

「部下から相談を受けるなんて、むしろ上司として喜ばしいくらいだよ」

「良かった、係長が温かい人で」

香織は安心したように微笑んだ。

「それで、どういう相談なのかな」

「実は、社内に好きな人がいるんです」

おずおずと、香織は言った。

俊雄は思わず、啜っていた味噌汁を吹きだしそうになった。仕事上の相談ならともかく、恋愛の悩みというのは俊雄にとって最も無縁な領域であった。

「社内というより、同じオフィスの中なんですけど……」

香織はそう言って、誘うような視線を俊雄に向けた。いや、少なくとも俊雄にはそう見えた。

もしか、香織は俺を誘惑しているのではなからうか。無難な恋愛相談に見せかけて、徐々に相手に自分の気持ちを伝えていくというのが高校生の間で広まっているらしい。

「となると、社内恋愛というわけか」

つとめて冷静に、俊雄は呟いた。

「やっぱりダメですよ、社内恋愛なんて」

自嘲気味に呟くと、香織は運ばれてきた定食に箸をつけた。

「そんなことはないさ」

幾分焦ったように、俊雄は言った。

「今どき社内恋愛を禁止する会社なんて、それこそ時代遅れだよ」

香織はすっかり感じ入ったように、

「進歩的なお考えなんですね、塚原さんって。ほんと、女性の味方って感じ」

「そんな大げさなものでもないけどね」

と言いながらも、俊雄は自尊心が刺激されるのをはつきりと感じていた。時折向けられる香織の蠱惑的な視線が、忘れかけていた男

としての本能をじわじわと解放していく。

「すぐにでも気持ちを伝えたいほうがいいと思いますか」

「それはまだ早いんじゃないかな」

かすかに声を上ずらせて、俊雄は言った。不自然なまでに喉が渴いているのは、味噌汁の塩分がきついせいだろうか。

「こういうことは、相手の気持ちを確かめたうえで遅くはないと思うよ。そのほうがお互いに傷つかないと思うし」

「そうですよね」

俊雄の言葉を内心で咀嚼するように、香織は頷いた。

「やっぱり頼れる上司ですよ、塚原さんは」

香織の屈託のない笑顔に、俊雄の頬も自然に弛緩してしまう。

「ちなみに、その人は塚原さんもよく知ってる人ですよ」

悪戯っぽく言う香織に、俊雄はふたたび食事の手をとめた。

もしかしたら、これは香織からの婉曲的な挑発なのかもしれない。あえて回りくどい言い方をしておきながら、こちらの動きを冷静に見定める。それは、冷酷な小悪魔の企みのようでもあり、清廉な淑女の精一杯の配慮のようでもあった。

「優しくて、頼りがいがあるって、ちょっと間抜けなところもあるけど、でもすっごく素敵な人で……」

うっとりとする香織を、俊雄は無意識のうちにじっと見つめていた。その純粹な、それでいてどこか挑発的でもある彼女の視線に、自分もいつしか理性を失ってしまうのだろうか。そうだったら、美代子や夏海との絆はたちまちのうちに崩壊してしまうだろう。

あるいは、それでもいいのかもしれない。たとえばほんの一瞬でも、香織との魅惑的な時間が過ごせるのなら、一切の理性を失ってしまうって……。

いや、駄目だ。そんなことをしたら、家族の絆どころか、人生そのものが破綻してしまう。第一、部下の女性と個人的に親密な関係を結ぶなど、上司として恥ずべき行為である。俺は一体、何を考えているのだ。

「あら、もう昼休みが終わっちゃう。一足お先にオフィスに戻りますね」

腕時計にちらっと目をやって、香織は言った。いつの間にか、香織の定食の皿はほとんど空になっている。

「この支払いが僕がもつから」

まだ半分以上残っている味噌汁を急いで胃袋に流し込んで、俊雄は言った。香織は軽い微笑とともに頭を振って、

「ここは私がお支払いします。相談に乗っていただいたお礼に」

「それは申し訳ないよ。部下から食事をご馳走になるなんて、上司として情けない」

「いや、それは……」

「小野寺君、本当に……」

財布から二人分の代金を出そうとする香織を、俊雄は手で制した。ほんの一瞬、二人の手が重なり合った。

「あっ、すまない」

そう呟いて、俊雄は反射的に手を離れた。香織の手の温もりが指先から脳の中樞部分へと伝わる。

「じゃあ、今日は割り勘ということだ」

わずかにおとずれた気まずい沈黙を振り払うように、香織は微笑んだ。心なしか、香織の頬が上気しているように見える。

「本当に、ありがとうございます」

会計を終えて店を出た後、香織は深々と頭を下げた。ただ悩みを聞いただけなのに大げさな……俊雄は内心で苦笑しながらも、香織の一点の打算もない律儀さに、封印したはずの淡い恋情らしきものが込み上げるのを感じていた。

波紋の原因

職員室に据え付けられたテレビでは、依然として携帯騒動関連のニュースを流していた。

「まったく、他のニュースはやってないのか」

萩原が不満げにチャンネルをむやみに切りかえてみるものの、どの局も決まりきったように携帯騒動についての特集を組んでいた。

「そんなにチャンネルをガチャガチャ替えたら、テレビが壊れますよ」

笹本が呆れたように言った。

「そんなに大事なんでしょうかねえ、携帯って」

しみじみとそう呟いたのは、歴史教師の大谷。考え方や身のこなしがいちいち古くさいので、普段はどことなく浮いた存在なのだが、この時ばかりはほとんどの教師の賛同を得たようだ。

我が意を得たりとばかりに、萩原が頷く。

「だいたい、今の子どもたちは機械に頼りすぎなんですよ。パソコンだの携帯だの、そんな現実味に欠けたものと顔を突き合わせてばかりいるから、人間同士の血の通った付き合いができなくなるんです」

「でも、それが彼らにとっての現実なんじゃないですか」

独り言のように、ぽつりと笹本が呟いた。

萩原は怪訝そうに声を低めて、

「現実？」

「確かに、パソコンや携帯電話での通信はバーチャルな一面もあります。でも、そうやって現実味の薄い通信手段に頼らざるを得ないという孤独な心理状態が、彼らが直面している現実なのではないでしょうか」

「これだから甘いんだよ、新入り君は」

萩原は鼻で笑った。

まだ半分以上残っている笹本の弁当箱に目をやると、萩原は生徒を叱責するのと同じ口調で、

「ほら、まだ半分も減ってないじゃないか。早くしないと昼休みが終わっちゃうぞ」

「わかってますよ」

ふてくされたように、笹本はミートボールを頬張った。

「でも、私は信じていますよ」

大谷が遠い目つきをして、言った。

「いつかまた、人類が一切の文明を拒絶して、携帯もコンピュータもない世の中がくることを」

「そうなるといいんですけどねえ」

萩原は皮肉まじりに言った。

「一番いいのは、このまま永遠に携帯電話がなくなることですよ。ねえ、西島先生」

「何でしょうか」

テレビの画面から視線を動かすことなく、西島はこたえた。

「先生なら科学に詳しいから、携帯の電波を遮断する方法もご存じなのでしょう。それを教育現場に応用すれば、携帯のうるさい電子音もおさらばだ」

「教育現場への応用、ですか」

新しい悪戯をひらめいた子供のように眼を鋭く光らせて、西島は立ちあがった。

「一番手っ取り早いのは、学校全体を電子レンジと同じ構造にすることです。校舎の内壁から強烈なマイクロ波を流せば、電波の干渉現象によって携帯電話は通信機能を失うでしょう。ただしその場合、みなさんの体が一瞬のうちに丸焦げになりますよが」

「丸焦げ……」

「もしかしたら、これは画期的な研究テーマになるかもしれないな。ハッハッハ」

表情を強張らせる萩原たちをよそに、西島は心底愉快そうに軽快

な笑いを響かせたのだった。

父と娘

淡いオレンジ色に染めあげられたアスファルトの上に、二つの人影が並んでいた。影は微妙な距離を保ちながら、夕陽に背をむけるように淡々と歩いていく。

「夕陽がきれいだなあ、夏海」

遠慮がちに、俊雄は言った。しばらく間があって、夏海は読んでいた少女マンガからわずかに視線を上げると、

「何か言った？」

と突っ慥貪に返した。

「いや、何でもない」

内心に一抹の寂しさがよぎるのを感じながら、俊雄は呟いた。夏海は何も言わずに、マンガに視線を戻す。

いつまで続くのよ、この退屈な時間は。今さらお父さんとしやべる気分にもなれないし、かといってケータイをいじるわけにもいかないし。仕方なくたまたまカバンに入ってたマンガを読むふりをしてごまかしたけど、それでもすっごくタイクツ。まあ、それもそうか。このマンガは私の一番のお気に入りで、ページのあちこちに手アカがつくくらいに何度も読んで、ラストもわかってるんだから。

ああ、もう。今すぐ全力ダッシュで家まで帰りたい。でも、体育の時間に持久走でちよつと頑張っちゃったせいで、太ももが筋肉痛なのよね。これじゃあ全力ダッシュどころか、スキップもできないよ。こんなことなら、体育の時間サボればよかったな。

アスファルトに落ちていた小石に、俊雄はつまずいた。そのはずみで、目を通していた書類の束が路上に散らばる。

「あっ！」

いささか大げさなまでに俊雄は叫んで、書類を一枚ずつ拾いはじめた。

「夏海も手伝ってくれないか」

わずかな期待とともに俊雄は夏海に視線をむけたが、夏海は無表情のまま、淡々と歩き去った。やっぱり駄目か……諦観まじりの嘆息を洩らして、俊雄は書類を集めていく。

一体いつまで続くのだろう。この妙にギクシャクした親子関係は。十年前の夏海なら、今だって喜んで書類を拾ってくれたはずだ。本当に、あの頃の夏海は可愛くて、素直だった。それなのに、今は……。

嫌われているというわけでは、決してない。話しかければ一応返事らしきものは返ってくるわけだし、何よりも同じ家に住んでいるということが親子の証ではないか。

しかし、何かが足りないのだ。同じ家に住み、同じものを食べていてもなお、どこか物足りないものが残るのだ。子供はいつか育つ。そんなことは、わかっている。だが、頭ではわかっていても心が理解できないことが人生にはあるのだ……。

よし、書類を全部集めたぞ。これで夏海とゆっくり話を……。あれ、夏海がいない。ちょっとくらい待っててくてもいいだろうに。

これが、親子というものだろうか。

「ただいま」

夏海がドアを開けると、美代子がキッチンで何やらせわしなく夕食の準備をしていた。

「お帰りなさい。あら、お父さんは？」

「知らない。あとからくるんじゃないの」

と、夏海は素っ気なくこたえと、通学鞆をリビングのソファに放り投じた。

ダイニングテーブルには、スーパーの袋に入った牛肉と白菜、それにしらたきが置かれていた。きつと今さっき買ってきたのだろう。

「今日はすき焼き？ やけに豪華じゃん」

「お昼に、おばあちゃんから電話があったのよ」

冷蔵庫に材料を詰め込みながら、美代子は言った。

「夕方にはこっちに着くそうだから、早くご飯の準備をしないと」
「っていうか、もう夕方だよ」

「だから急いでるんじゃないの」

苛立たしげに眉間に皺を寄せて、美代子はキッチンに立っている夏海を押しつけた。

「ぼうっと突っ立ってないで、あんたも少しは手伝いなさいよ」
「でも……」

「デモもストライキもないの！」

美代子のあまりの剣幕に、夏海は半ば強引に詰め込み作業を手伝うことになった。

玄関のドアが開いて、俊雄が帰ってきた。額には大粒の汗をかいて、肩で荒い呼吸をしている。

「どうしたの、お父さん」

材料を詰め込む手を休めることなく、美代子は言った。

「いや、何でもない」

乱れる呼吸を整えながら、俊雄は首を振って、

「今日はすき焼きか。妙に豪勢だな」

「お義母さん、夕方にはこっちに着くって」

「そうか、夕方か」

と頷くと、俊雄は壁の時計に目をやって、

「もう夕方じゃないか」

「だから、もうすぐ着くはずなんだけど」

「おふくろのことだから、どこかで寄り道でもしてるんじゃないのか」

俊雄は呑気に笑った。

「じゃあ、俺はしばらく書斎で休んでるから」

と言い置くと、俊雄は二階に上がった。

「私も自分の部屋に行こうかな」

「ちよっと待ちなさいよ」

リビングを出ようとする夏海の背中に、美代子是不機嫌な声を投げかけた。

「まだ全部入れてないじゃないの」

「半分くらい手伝ったんだからいいじゃん」

「そういう問題じゃないでしょ。手伝うなら最後まで……」

「私は忙しいの！」

苛立たしげにそう叫ぶと、夏海は刺々しい気配を残して階段を駆け上がっていった。

「まったく、ちっとも言うことを聞かないんだから」

材料を詰め込む作業を続けながら、美代子はため息をついた。そして、思い出したように壁の時計に目をやると、ちいさく不安げに呟いたのだった。

「それにしても遅いわね、お義母さん」

第四の老婆

黒革張りの長椅子に深く腰を落ち着けながら、俊雄は唯一とも言うべき平穏なりラックスタイムを楽しんでいた。書斎と言っても、長椅子と木製の机、それに三段づくりの本棚（これがなければ書斎とは呼べない）が窮屈そうにひしめいているだけの部屋なのだが、それでも一家の主としてはこの書斎に並々ならぬこだわりがあった。

（社内に好きな人がいるんです）

思慮深い哲学者よろしく思案げに瞑目しつつ、俊雄は昼間の香織の言葉をゆっくりと反芻していた。

前兆はあった。どんなに些細な相談であっても、彼女は必ず私にうち明けるのだ。これは、私との接触をできるだけ増やそうという気持ちの表れではないのか。何気ない相談を持ちかけるうちにいつしか不倫の関係へ……というのもよく聞く話だ。

それに、彼女は職場以外では私のことを（塚原さん）と呼ぶ。これこそ、私への恋情を言外に託そうというせめてものアピールではないのか。たんなる上司と部下という関係なら、職場以外でも（塚原係長）と呼ぶはずだ。

以上の考察から導き出される結論は一つである。問題は、結論への対処方法だ。もしも私が独身ならば、何の問題もなく香織の気持ちを受けとめてやれるだろう。しかし、私には家族がいる。そして――ここが一番重要なところだが――私は家族を愛しているのだ。しかしながら、香織の気持ちにはきちんとしたかたちで対処する必要がある。ここで一歩間違えば、香織の心は傷つき、これまで円滑に進んでいた仕事上の関係にも影響しかねない。私は一体、どうすればいいのだ。

まさに、五十にして大いに惑う、である。

ベッドに仰向けになって、夏海は携帯電話のディスプレイをぼんやりと眺めていた。

やっぱり、電波はつながらない。電話を小刻みに振ったり、電源ボタンを力強く押してみたり、携帯電話を地面と垂直に立ててみたり……とにかく（ケータイ裏ワザ百科）に載ってるテクニックをいろいろ試してみたけど、それでも電波はつながらなかった。やっぱり、西島先生の言うように、原因が発見されるのを待つしかないのかな。

電話が使えないと、とにかく不便だ。こずえたちともメールで連絡が取れなくなるし、それに何より授業がタイクツでしょうがない。ケータイがあればこずえとメールで会話をして時間をつぶせるけど、電波がつかない今はそれもできない。

それと、もう一つ――たぶんこれが一番不便なことだと思うけど――ケータイが使えないと、守からのメールもこない。当たり前のことだけど、やっぱり寂しい。そういえば、今日は校庭にサッカー部の姿がなかった。放課後はだいたい毎日校庭で練習してるのに。顧問の先生が休みだったかな。ケータイが使えないから練習は休み……なんてことはないよね、まさか。

守、覚えててくれてるのかしら。私たちが付き合いはじめてもうすぐ一年になるってこと。サッカー部の練習で精一杯で、そっちのほうにまで気がまわらないかもしれない。記念日を忘れるのはカナシイけど、守に直接聞くのも恥ずかしいし。ううん、どうしたらいいんだろう。ケータイが使えれば、メールでそれとなく探りを入れられるんだけど。

「お父さん、夏海、ちょっと降りてきて」
リビングから美代子の声が聞こえた。

おばあちゃんが着いたのかな。チャイムの音はしなかったみたいだけど。

携帯電話を無意識のうちに手に持って、夏海はベッドから起き上がった。

リビングでは、美代子が不安げな表情で玄関のほうを見つめていた。
「おふくろ、まだこないのか」

美代子の不安がうつったように、俊雄は眉を寄せた。

美代子は壁の時計に目をやって、

「やっぱり駅まで迎えに行けばよかったかしら」

「携帯を持ってないからなあ、おふくろは」

「持ってたとしても、今は使えないわよ」

「おばあちゃん……」

不安になって、夏海は腕組みをした。

真夏とはいえ、あたりはもう徐々に暗くなりはじめている。あと一時間もすれば、外灯を頼りに歩かなければならなくなるだろう。

「私、そこまで迎えに行くよ」

「待ちなさい、夏海」

玄関へ行きかける夏海を、美代子が呼びとめた。

「むやみに歩きまわっても、すれ違うだけよ」

「でも……」

でも、何かしなきゃ——美代子の視線を振り切って、夏海は玄関へと歩いていく。

「事故にでも遭ってなきゃいいけどな」

俊雄の呟きが、夏海の不安を増幅させる。

夏海が玄関のドアノブに鍵を差し込もうとしたその瞬間、妙にはずんだ調子でチャイムが鳴った。

「美代子さーん！」

しわがれた声がドア越しに聞こえる。

おばあちゃんだ——夏海の全身に張り詰めていた緊張感が一気に緩む。

夏海は玄関を開けた。

「あら、夏海！」

嬉しそうに目を丸くして、トメは叫んだ。

「待ってたよ、おばあちゃん」

「ようこそ、お義母さん」

「おふくろ、よくきたな」

三人がそれぞれに歓迎の言葉を口にする。

「うれしいねえ、三人そろってお出迎えなんて」

「長旅でお疲れになったでしょう。奥に入ってゆっくりお休みください」

「先にこれを渡しておこうかな。忘れないうちにね」

自分に言い聞かせるように言うと、トメは巾着袋から熨斗袋を取り出した。

「これ、夏海の高校の入学祝いだからね」

「おばあちゃん、ありがとう！」

熨斗袋を両手で抱きしめるように持って、夏海は笑顔を浮かべた。

「そういうお気遣いは結構ですのに」

「こうして構ってやれるのも生きてるうちじゃからね」

トメは快活に笑って、

「それから、これは三人へのお土産じゃ」

「本当に何から何まで……」

「これは……プチトマト？」

小首をかしげる夏海に、美代子の冷たい視線が突き刺さる。

「茨城名物のさくらんぼじゃよ」

愉快そうに笑って、トメは言った。

「どうしてこれがプチトマトなのよ」

「だって似てたんだもん」

夏海の膨れっ面に、ふたたび温かい笑いが起こる。

「さあ、そろそろ夕飯にしよう。おふくろも腹が減ってるだろう」

俊雄の号令で、夕食の準備が進められた。普段は食べるほう専門

の夏海も、この日ばかりは自分から準備を手伝う。

テーブルに鍋や野菜が並べられていくのを見て、トメは、

「今日のご飯はすき焼きかい」

「そうだよ、おばあちゃん」

「今日は奮発して高級牛肉を買ってみました」

おどけたように微笑むと、美代子は冷蔵庫から特売品のシールが貼られていない牛肉のパックを取り出した。

「珍しいじゃん。お母さんが高い肉を買うなんて」

「だって、今日はおばあちゃんの歓迎会ですもの」

「そんなに豪勢にしくなくてもよかったんじゃないかねえ」

「何言ってるんだよ、おふくろ」

手際よくテーブルに食器を並べながら、俊雄は言った。

「遠慮することないって。今日はおふくろが主役なんだから」

準備が整った。四人が食卓について、夕食が始まる。

「このお肉おいしいね、お母さん」

「当たり前でしょ。いつもの倍くらいの値段だったんだから」

美代子は誇らしげに、それでいてどこか悔しさを滲ませて、言った。

「こういう豪華な食事もたまにはいいかなと思って買ってきたのよ。今日はおばあちゃんもいらっしやるしね」

「突然押しかけて悪かったね。何せ、こっちにこようと急に思ったもんだから」

美代子はどこかひきつった笑みを浮かべた。

「それはそうと、やけに遅かったじゃないか」

「汽車を一本乗り過ぎしてしまったんだよ」

と言って、トメは呑気に笑った。

「汽車の時間だけはしっかり覚えたつもりなんだけどねえ」

三人のやりとりを聞きながら、夏海は不思議に思った。

おばあちゃんは確か、記憶力が自慢だったはずだ。何年か前に茨城の家に泊まった時なんか、デビューしたばかりのアイドルの名前をほとんど覚えて、私やお母さんを驚かせたくらいなもの。それなのに汽車の時間を間違えるなんて、やっぱりおばあちゃんもトシをとったのかな。

「このお肉、すごくおいしいねえ」

肉を次々に口へと運びながら、トメは言った。

「こんな上等なお肉を食べるのはひさしぶりじゃよ」

「そうですか。奮発した甲斐がありました」

和やかな雰囲気の中で、食事は進んでいった。トメを中心に、穏やかな笑いの輪が広がっていくようだった。

「そうだ。忘れるところだった」

「何でしょう、お義母さん」

「美代子さん。あんた、家庭菜園が趣味だと言ってたじゃろう。茨城からカイワレ大根の種を持ってきたから、庭で育てておくれ」

「お義母さん、よろしいんですか」

反射的に笑顔を作りながらも、美代子は素直に喜べない自分に気付いていた。確かに、家庭菜園が趣味だと言ったことはあるが、それはナスやキュウリといった、とにかく主菜になりそうなものを育てたいからで、カイワレ大根のような（食卓の脇役）には意欲が向かないのである。

「カイワレは育てるのが簡単じゃから、家庭菜園には向いているじやろう」

「よかったじゃないか。おふくろと共通の趣味ができて」

「……そうね」

「カイワレの生長が楽しみじゃ。ハッハッハ」

美代子の内心にくすぶりがけたささやかな不満も、トメの鷹揚な笑いにかき消されてしまった。

「学校は楽しいかい、夏海」

「うん、楽しいよ!」

力強く頷いて、夏海はとびきりの笑顔をとメに向けた。

「勉強は頑張ってるかな」

「それは……」

口ごもると、夏海はうつむいた。

「特に数学が苦手なのよね。何たってこの前のテストで……」

「それは言わない約束でしょ！」

不満げに唇を尖らせて、夏海は美代子をにらみつけた。

「勉強も大事じゃが、元気なのが一番じゃ」

トメはうれしそうに目を細めた。

「どのお部屋でお休みになれますか、お義母さん」

思い出したように、美代子は切り出した。

「私はどこでも構わないんだけどねえ」

と言ってから、トメは遠慮がちに美代子を見て、

「できれば畳のある部屋に寝かせてもらいたいんじゃないが……」

「そりゃあそうだよな」

美代子が口を開くより先に、俊雄は頷いた。

「やっぱり畳の上で寝たほうが落ち着くよな。よし、だったらおふくろはその部屋で寝ればいいよ。他の部屋はみんなフロリングだし、その部屋なら階段を使わなくていいから」

「美代子さんはそれでいいのかい」

「ええ、もちろん」

美代子は笑顔でこたえた。

夕食も終わりに近づき、鍋もかなり閑散としつつあった。

トメはすっかり膨れた腹を満足げにさすって、

「ああ、今日はずいぶんなご馳走でした」

「そう言っていただけだと、こちらとしても光栄です」

「明日は高級しゃぶしゃぶにしようか。ねえ、お母さん」

「毎日豪華なものばかり食べてると体に毒なのよ、夏海」

表面では優しく言っておきながら、美代子はテーブルの下で夏海の足を踏みつけた。

「イタッ！」

ちいさく呻いて、夏海は顔をしかめる。

「そろそろ休んだら、おふくろ」

壁の時計に目をやって、俊雄は言った。

「おや、もう八時を過ぎてるんだねえ。お言葉に甘えて、そろそろ

休ませてもらうとするかね」

と頷くと、トメはゆっくりと立ちあがった。

「カイワレをちゃんと植えてくださいね、美代子さん」

「もちろんですよ」

と美代子は微笑んだが、やはりその笑顔もひきつつている。

「さて、そろそろ片付けに入りましょうか」

はずみをつけるようにパン、と手をたたいて、美代子は言った。

「片付けなら私も手伝おうかね」

と言って立ちあがりかけるトメに、美代子は首を横に振って、

「お義母さんは畳の部屋でゆっくりお休みください。片付けは夏海たちに手伝わせますから」

「ちよっと、お母さん」

「のんびりしてないで、さっさと手を動かしなさい。片付けは夏海の仕事でしょ」

「まったく……」

込み上げる不満を呑み込んで、夏海は皿を流し台に運んだ。さりげなく美代子の顔を見ると、いかにも（少しの間の辛抱だから）とでも言いたげにそっと片目をつむってみせた。

何よ、もう。片付けなんて、一度も手伝ったことないのに。今日のお母さん、何となくよそよそしい。昨日からちよっと神経質になっているのは感じてたけど。そんなにおばあちゃんに対して気をつかうようなことがあるのかしら。お父さんはいつの間にか腕まくりまでして食器を洗ってるし。今さらこっそり自分の部屋に逃げ込むわけにもいかないじゃないの。まあ、いいや。おばあちゃんからお土産をたくさんもらっちゃったし、その分だけはちゃんと働かないと。そうすればまたお小遣いをもらえるかもしれないし。

大人に付き合うのって、ホント疲れる。

母と娘

夕食の片付けからようやく解放されて、夏海は自室のベッドの上で一人の時間を楽しんでいた。慣れない作業を長く続けたせいか、手首のあたりがジンジンと痛む。

鈍い痛みが走る夏海の手には、トメからもらった熨斗袋が握られていた。早く中身を確認したいという気持ちがある一方で、きれいに結ばれた帯を開封してしまうのがもったいないという意識もはたらいっているのだった。

一体、いくら入っているのだろう……素直な感情で、夏海は考えていた。手に持った感触といい、蛍光灯ごしに透かしてみた時のシルエツトといい、小銭だけというのはまずなさそうだ。

不意に、扉が遠慮がちにノックされた。自分の不純な内心を見抜かれたような気がして、夏海はびくつとした。

「入っていい？」

美代子の声だった。

「べつにいいけど」

片付けを手伝わされた不機嫌さが、返事に残っていた。無意識のうちに、熨斗袋を後ろ手に隠す。

「片付けもだいたい終わったから、ちょっと息抜きにね」

扉を丁寧に閉めて、美代子は悪戯っぽく微笑んだ。

こっちが本当のお母さんだ——妙なところで、夏海は安心感を覚えていた。

「いま何してたのよ」

「べつに。ぼうつとしてただけだよ」

「おばあちゃんからの入学祝いを見てたんでしょう」

「違うわよ」

できるだけ素っ気なく夏海はこたえたが、右の眉がほんのわずかに動いてしまった。

「ほら、右の眉が動いた。それ、嘘をついた時の昔からの癖よ」

夏海は黙ってしまった。本当のことなのだから、反論のしようがない。

「入学祝い、お母さんにも見せなさいよ」

「嫌よ」

「いいじゃないの。べつに悪いことでもらったお金じゃないんだから」

しつこく粘られて、夏海は渋々熨斗袋を美代子に渡した。

「上等な袋じゃない」

そう言って、美代子は熨斗袋を丁寧に眺めながら、

「こういう袋を何ていうかわかる？」

「えっ、この袋？」

予想もしない問いかけに、夏海は戸惑った。

こういう袋にも名前があるの？ ただの袋でいいじゃん、もう。こんなこと、学校の授業でも習ってないよ。

「お祝い……袋」

いかにも自信なさげな夏海のこたえに、美代子はふっと笑って、

「これはねえ、熨斗袋っていうのよ」

「ノシブクロ……初めて聞いた」

「こういうのは社会の常識よ」

責めるわけでもなく、美代子は言った。

「じゃあ、この文字は読める？」

熨斗袋の表書きに記された文字を指さして、美代子は聞いた。見たこともない崩れた字体に、夏海は思わず目を細める。

うわっ、何？ この、字のヘタな人が酔っ払って書いたようなグジャグジャな字は。今どき小学生でもこんな字は書かないよ。これ、ホントにおばあちゃんが書いたの？

「……全然読めない」

「このくらい読めなくてどうするのよ」

美代子はあきれたように笑うと、

「これはねえ、（夏海ちゃんへ）って読むのよ」

「夏海ちゃん……」

と呟くと、夏海はもう一度トメの字をゆっくりと眺めてみた。あらためて見直してみると、確かに（夏海ちゃんへ）と読めないこともない。しかし、やっぱりこれは読みにくい字だ。

「おばあちゃんって、字がヘタなんだね」

「バカね。こういうのを達筆っていうのよ」

「タツピツ……」

その言葉なら、書道の授業で聞いたことがある。確か、字がものすごくきれいな人のことだ。ってことは、こういうグジャグジャなのもきれいな字に入るってこと？

「こういう常識を一つずつ身につけていくのが、教養のある女性になるってことなのよ」

押しつける風でもなく、美代子は言った。しかし、そのすぐあとで照れたように微笑むと、

「まあ、これもおばあちゃんの請け売りなんだけどね」

「何だ、請け売りか」

美代子につられるように、夏海も微笑んだ。

「マジメに聞いて損した」

「これから、いろんなものに触れて育つのよ。夏海はまだ若いんだから」

不意に真顔になって、美代子は言った。

「決して、自分の知ってる世界がすべてだと思わないようにね」

「それもおばあちゃんの請け売り？」

「これはお母さんのオリジナルよ」

美代子は穏やかな微笑を浮かべた。

「美代子さーん！」

リビングのほうからトメの声が聞こえ、美代子は立ちあがった。

「おばあちゃんが呼んでるみたい。もう少しだけ、良妻賢母を演じなきゃ」

「頑張って、お母さん」

「夏海もしばらくは孝行娘になりきってよね」

「私はいつも親孝行だよ」

「ホントかしらねえ」

からかいをこめた視線を、美代子は夏海に向けた。

「ほら、早くしないとおばあちゃんが待ってるよ」

「はいはい。まったく、生意気な孝行娘だこと」

おどけた微笑を残して、美代子は扉を開けた。

「そのお金、大切にするのよ」

扉を半分ほど閉めかけて、美代子は真剣な表情で言った。

「わかってるよ、お母さん」

夏海の頷きに、美代子は安心したように微笑んで、ゆっくりと扉を閉めた。

教養を持つって、どういうことなんだろう。ただ知識だけを深めることも違うような気もするし、マナーだけにやたらと詳しくなることもちょっと意味が違udarうし……。

大人になるのって、ホント難しい。

携帯電話のアラームが室内に鳴り響く。窓から射し込む真夏の刺々しい陽射しを瞼のあたりに感じながら、夏海はゆっくりと目を開いた。

もうちよつと寝てたかったのに……心地良い眠りへと誘う睡魔と闘いながら、手さぐりで携帯電話を開く。いつものように新着メールのチェック画面を呼び出そうとするが、依然として電波状態は圏外のまま。

やっぱりまだ直ってないんだ、ケータイの電波。

朝は戦争だ！

リビングを包む心地良い静寂を、階段を駆け下りる夏海のけたたましい足音がうち破る。

「もう少し静かに降りてきなさいよ。おばあちゃんもいるんだから」朝食の準備をする手を休めることなく、美代子はたしなめるように言った。反射的に、夏海はその場で足踏みをする。

しまった、今日はおばあちゃんがいるんだった！

「おはよう、夏海」

ダイニングの椅子にきちんと腰かけて、トメは夏海に笑いかけた。普段とは違う光景に、夏海の内心に一瞬違和感が走る。

「おはよう、おばあちゃん」

「夏海もそこに座って朝ご飯を食べなさい」

トメに促されるままに、夏海は椅子に座った。

「朝はご飯と味噌汁が一番じゃよ」

「おばあちゃん、ありがとう」

夏海の微笑まじりの礼も、ついぎこちなくなってしまう。

朝からこんなのにのんびりご飯を食べてたら、学校に遅刻しちゃうよ。でも、おばあちゃんがせっかく用意してくれたから、しっかり最後まで食べないと。サイアク一時間目に間に合えばいいもんね。

「お父さん、会社？」

「もうとっくに出ていったわよ。ほら、早く食べないと本当に遅刻しちゃうわよ」

「わかってるって！」

テレビのワイドショーでは、飽きもせず携帯騒動関連の続報を流していた。続報といっても何一つ新鮮味のない情報を大げさに繰り返しているだけなのだが、それでも映っていれば無意識のうちに視線がそちらに動いてしまう。

「昨日から同じようなニュースをやってるけど、これは一体何だい」

緑茶をのんびりと啜りながら、トメはのんびりと言った。

「昨日から全国的にケイタイの電波がなくなってるんですよ。そのせいで、私たちも困ってしまっ

「ふうん、そうかい」

さして興味もなさそうに、トメは呟いた。

「私の若い頃は携帯電話なんてものはなかったけど、それでもちつとも困らなかったねえ」

何気なく発せられたトメの言葉に、夏海の箸を持つ手がとまった。それは時代の違いよ……モヤモヤしたものが夏海の内心に込み上げたが、それをトメに言う気にはなれなかったし、第一時間もなかった。

「ごちそうさま！」

朝食をきれいに食べ終えて、夏海は顔の前で手を合わせた。

「きちんとあいさつができるなんて、やっぱり夏海はえらいねえ」
感心したように、トメは目を細めた。

夏海はカバンを手に立ちあがると、

「行ってくるね、おばあちゃん」

「歯みがきはもうすんだのかい」

「学校でするからいい！」

とっさの言い訳にしてはなかなかうまいじゃないの、と夏海は思った。朝食もきちんと食べて、そのうえ歯みがきまでしては本当に遅刻してしまう。

「あっ、しまった！」

ドアノブに鍵を差し込みかけて、夏海は叫んだ。

「ケイタイを忘れてた！」

「ケイタイは使えないでしょう」

「これはお守りなの！」

半ばパニックになりながら、夏海はドタドタと階段を駆け上がっていく。

「ケイタイがお守りなんて……時代は変わりましたねえ、お義母さ

ん」

と呟いて、美代子は同意を求めるようにトメに視線を向けたが、トメは自分の世界に浸っているのか、緑茶をゆっくりと啜って、「わざわざ歯みがきの時間まで用意してくださるだなんて、夏海もいい学校に通っているんだねえ」

と、嬉しそうにしみじみと呟いたのだった。

ありふれた会話

いつものように定刻の十分前に出社すると、オフィスにはすでに香織の姿があった。

「おはよう、小野寺君」

「おはようございます、係長」

一日の始まりにふさわしい香織の清楚な微笑を楽しんでから、俊雄は中里に視線を向けた。

「中里君、おはよう」

「おはようございます」

少し遅れて、無気力な返事が返ってきた。素っ気ない態度は中里の専売特許だが、それにしても今日はやけに覇気がない。

「コーヒーブレイクはもう終わったのかい」

できるだけ軽い調子で、俊雄は言った。嫌味に聞こえないように気をつけたつもりだったが、中里は俊雄をにらむように見ると、

「今日はそんな気分じゃありませんよ」

と吐き捨てるように言って、手もとの資料に視線を落とした。

一体、どうしたのだろう……腹が立つより先に、戸惑いが俊雄の内心を支配した。

中里は珍しく、定刻より早く出社した。単純に考えれば、これは喜ばしいことだ。しかし、今の中里は明らかに普段と様子が違う。今日の彼は、どこか他人の介入を避けているような気配すら感じられる。昨日から今までの短時間に彼を変えるような何かがあったのだろうか。あるいは、他人を遠ざけようとする性質がもともと彼の中にあつて、それが何らかのきっかけで顕在化したということなのだろうか……。

熱い視線を感じて、俊雄は中里から顔をそらした。

視線を感じた方向に目をやると、香織が何かを訴えかけるような表情で俊雄を見つめていた。

その視線の意味を、俊雄は懸命に探ろうとした。中里のいつになく反抗的な態度についてであろうか。あるいは、昨日の妙に謎めいた相談（告白と言うべきか）について何か付言しておきたいこともあるのだろうか。

いや、きっとそうだ。あの、過剰なまでに勿体をつけた告白で果たして自分の気持ちが伝えられたのか、香織は不安なのだ。その不安は、上司として、いや、男として、一刻も早く解消してやらなければならぬ。しかし、さすがに勤務時間中に、他の社員のいる前でこのようなきわめて私的な会話を交わすわけにはいかないだろう。安心させるように、俊雄はゆっくりと頷いた。（その件はあとでゆっくり聞くとよ）という無言のメッセージを、数秒間の視線の中に込めたつもりだった。

俊雄のメッセージが伝わったのか、香織は納得したように軽く頷き、そして微笑んだ。

さあ、決断の時がきた。香織の気持ちにどのようにこたえるにしても、ここは男としてきちんと英断を下さなければならない。成り行き次第では家庭にも大きな波紋が及ぶ可能性もあるのだから……。パソコンのディスプレイに視線を移すと、真っ黒な画面に俊雄の沈鬱な表情がぼんやりと映っていたのだった。

いつものように、昼休みのテラスは女子たちの明るい喋り声で賑わっていた。ただ一つだけ普段と違うのは、当たり前のように鳴り響いていた携帯電話の着信音がすっかり姿を消してしまったことであつた。

「ホント、どうしちゃったのかしらねえ」

携帯電話の画面に何度も目をやりながら、夏海は言った。規則的に弁当のおかずを口に運んでいながらも、一方の手には携帯電話がしっかりと握られている。

「ケータイは夏海のお守りだもんね」

こずえはひやかすように、それでいて同調の意志をこめて、言っ

た。

「お守りっていう意味もあるけど、ケータイが使えないと困るんだもん、すっごく」

「マモル君ともメールできないしねえ」

「ちょっと、からかわないでよ」

「ゴメン、ゴメン」

二人は笑い合った。こずえの切れ長の目が細くなる。

ひとしきり笑いがおさまったあとで、こずえは思い出したように、
「ねえ、知ってる？ ケータイの電波がつかなくなる裏ワザ」

「何よ、それ」

勿体ぶるようなこずえの口調に、夏海も思わず身を乗り出す。

「朝のワイドショーで言ってたのに。あっ、夏海はニュースを見ないもんね」

「そんなことはいいいから、早く教えてよ」

痛いところをつかれた気がして、夏海はつい唇を尖らせてしまう。

「いろいろ複雑な説明があったんだけど、簡単に言うと、真夜中に満月の下でケータイを開くと、電波が復活するらしいのよ」

「えっ、マジで？」

反射的に夏海は叫んで、ゆっくりと周りを見まわした。幸い、みんな自分たちの会話に夢中で、こちらの話には興味を持っていないようだった。

「科学的な根拠はないらしいんだけど、試してみる価値はあると思うわ」

自信たっぷりな、こずえは頷いた。

「でも……満月っていつ？」

「それが、今夜みたいなのよ」

心霊スポットを紹介するリポーターのように、こずえは声を低めた。

「チャンスは今夜ってことか……でもなあ」

「でも、何なのよ」

「今、おばあちゃんがきてるからなあ」

と言って、夏海は思案げに腕組みをした。

二階の寝室から玄関に出るには、トメの寝ているリビングを通らなければならない。トメを起こさずに玄関を開けられるのか、それが問題だ。

「へえ、夏海の家におばあちゃんがきてるんだ」

「うん、昨日からね」

「大丈夫？ 嫁姑問題とか」

「そんなのはないわよ」

夏海は笑って言った。

「だって、もうカンペキにうちに馴染んでるんだもん」

「うらやましいなあ、ホント」

と、こずえは深いため息をついて、

「うちなんかもう、毎日が戦争よ」

「そんなにすごいの？」

「だって、顔を見合わせるたびにイガミ合ってるんだもの。見てるこっちのほうがストレスたまっちゃう」

「そうなんだ……」

適当に相槌をうちながら、いろんな家族がいるんだな、と夏海はめずらしく感じ入っていた。

「ねえ、夏海のお母さんとおばあちゃんは、ホントに仲いいの？」

「うん、もちろん！」

自信を持って、夏海は微笑んだ。

嫁と姑

ああ、疲れた――海老のように折り曲げた腰を負担から解放するうちに、美代子は大きく背伸びをした。

ここで休むわけにはいかない……休息を欲する神経を何とかなだめて、美代子はふたたび腰を折り曲げ、浴槽をスポンジでこすりはじめた。昼食の片付けも終わり、いつもなら一時間ほどコーヒーを飲みながらワイドショーを見るという、いわゆる（午後のひととき）を満喫している時間なのだが、今日はトメがいるのでそれも許されない。いや、トメはべつに（休むな）と言ったわけではないのだが、リビングのテレビはトメに占領されているし、ほぼ十分間隔で何かしら用事を言いつけられるので、片時も心の安まる暇がないのだ。

「美代子さーん！」

リビングのほうでトメの声がした。

「はい、何でしょう」

ゴム手袋をはずしながら美代子がリビングに行くと、トメが湯呑みを片手に困ったように眉根を寄せていた。

「お茶のおかわりをいただきたいんじゃないけど、注ぎ方がわからなくてねえ」

「わかりました、おかわりですね」

笑顔で返事をする、美代子は湯呑みに緑茶を注いだ。

「急須、ここに置いておきますね」

急須をトメの取りやすい位置に置いて、美代子は言った。トメはすまなそうに、

「すまないねえ。何から何までお世話になって」

「いいんですよ、お義母さん」

美代子は微笑とともに首を横に振って、

「私を自分の娘だと思って、遠慮せずにどんどん用事を言いつけてくださいね」

「そうかい。本当に、美代子さんはよくできた人だねえ」

「いえいえ、そんな……」

謙遜するように、美代子は顔の前で手を振った。いつの間にか、本心とは裏腹のことを平然と口にできる才能が身についたらしい。

「では、また何か用事がありましたらお呼びください」

そう言い置いて、美代子は浴室に戻った。浴室とリビングの往復だけで、すでに軽く汗をかいている。

ゴム手袋をはめ、スポンジを手につつ。

浴室用洗剤が、残り少なくなってきた。早いうちに近所の薬局で買っておかないと。スーパーの安売り情報が届かないのは、やっぱり不便だわ。

「美代子さーん！」

ふたたび、リビングのほうからトメの声がした。鉛のようになった腰を、美代子はゆっくりと上げる。

「はい、何でしょう」

「テレビのチャンネルを変えたいんじやが、うまくいなくてねえ。リモコンが壊れてるのかしら」

などと呟きながら、トメはしきりにリモコンのボタンを押している。

「お義母さん、それは……」

まるで幼児のようにテレビの画面とにらめっこを続けているトメの姿に、美代子の口もとに自然と苦い微笑が浮かぶ。

「リモコンが逆ですよ、お義母さん」

「ああ、そうじゃった！」

トメは自分のほうにむいたリモコンのビーム発射部分をのぞきこんで、しまったというように額をたたいた。

「ありがとう、美代子さん」

「どういたしまして」

幾分疲労の混じった微笑を残して、美代子は浴室に戻った。

ゴム手袋をはめて腰を折り曲げると、ひとりでに嘆息が口からこ

ぼれてくる。

さて、あと少しだ……浴槽の内側にクレンザーをかけてしまえば、風呂掃除も終わりだ。そうすればやっと休憩に……。

「美代子さーん！」

幻聴だと思った。いや、そう思ったかった。

「美代子さん、いないの？」

美代子の疲労感にいうちをかけるように、もう一度トメの呼ぶ声が聞こえた。ゴム手袋をはずすこともなく、美代子は浴室を出る。「何でしようか」

自分では穏やかな微笑のつもりでも、無意識のうちに疲労が滲んでしまう。

「どうしたんじゃね、その恰好は」

風呂掃除中にしか見えない美代子の恰好を見るなり、トメは目を丸くした。

「こんな昼間からゴム手袋なんかはめて」

「今、ちょっとお風呂のお掃除をしていたものですから」

「風呂掃除なんかあとにして、ゆっくりお茶でも飲みなさいよ、ほれ」

トメの呑気な言葉に、美代子は自分の顔に張りついた笑みが次第にひきつっていくのを感じた。

あなたが（風呂掃除は昼間にしろ）って言うから、お昼の休憩を我慢してせつせと風呂掃除をしてるんじゃないの。もしかして、これは私へのイヤミかしら。

「じゃあ、お言葉に甘えて、ちょっと休憩しちゃうかな」

固まりかけた微笑を何とかほぐして、美代子は言った。

「ゴム手袋だけお風呂に置いてきちゃいますね」

「あせらなくていいからね」

のんびりとしたトメの声が美代子の背中を追いかける。

ゴム手袋をはずして美代子がリビングに戻ると、トメは相変わらずの呑気な口調で、

「おや、ゴム手袋をはずしてるね。風呂掃除は終わったのかい」

「お義母さん……」

美代子の微笑が瞬時に固まり、そして、凍りついた。

「まだ終わっていませんけど……」

凍りついた微笑はそのままに、美代子は言った。

もしかして、これは私に対するイヤミかしら？ それとも、自分の言ったことをすぐに忘れるくらい、老化が進んでるってことなのかしら……。

良妻賢母って、本当に難しい。

さらなる誘惑

終業時刻を過ぎ、オフィスは俊雄と香織の二人だけになっていた。

「今日も疲れたなあ」

と呟くと、俊雄は大きく伸びをした。背後にある窓からは柔和な西日が射し込み、手もとの資料を淡いオレンジ色に染めあげている。

「二人だけになっちゃいましたね」

パソコンのキーボードからふと顔を上げて、香織は悪戯っぽく微笑んだ。

「中里は五時きっかりに帰っちゃったしな」

と言って、俊雄は中里のデスクに目をやった。

「今日は普段と様子が違いましたね、中里さん」

「確かに……」

「係長はご存じですか。中里さんが落ち込んでいる理由」

「さっぱりわからないよ。それに、あれで落ち込んでるって言うのかね」

言外に皮肉を交えつつ、俊雄は肩をすくめた。香織も同調して微笑を返すものだったと思ったが、彼女は意外にも、深刻な表情で、

「ああ見えてけっこう落ち込んでるんですよ、中里さん」

「君は何か知っているのかい」

いつになく意味深な香織の口調に、俊雄は思わず身を乗り出した。「私から聞いたなんて、中里さんには言わないでくださいね」

遠慮がちに前置きしたうえで、香織は話しはじめた。

「中里さん、同期の人たちに劣等感を持っているみたいなんですよ」「劣等感？」

反射的に、俊雄は眉根を寄せた。中里に劣等感というのは、思春期の娘に従順さと同じくらい不釣り合いな結びつきに思えた。

「同期の仲間が順調に出世しているのに、自分はまだこんな部署に……すみません。こんな部署だなんて」

「いいんだよ」

俊雄は寛容に微笑んだ。中里のような潜在能力の高い社員にとって、この部署での業務は確かに物足りないのかもしれない。

「中里さんについてもとプライドの高い人だから、そういうことを必要以上に気にしちゃうのかもしれないね。まあ、本人に直接聞いたわけではないので、それが事実かどうかはわかりませんが」

香織はそう付け加えたが、その語り口には充分に真実味がこもっていた。ほぼ毎日、同じオフィスで働いている彼女の同僚としての洞察には、全幅の信頼を置いてもいいだろうと俊雄は思っていた。それに、ここ数ヵ月間で中里の同期にあたる社員の昇進が相次いでいることは、俊雄自身もそれとなく耳にしていた。

「中里さんを何とか励ましていただけませんか」

いささか唐突に、香織は切り出した。

「同じオフィスで働く仲間として、これ以上中里さんの落ち込む姿を見ているのは辛くて……」

「わかった、何とかやってみるよ」

温和な微笑とともに、俊雄は言った。中里の心のわだかまりを解きほぐす自信などまるでなかったが、今はとにかく香織を安心させることが先決だと、上司としての本能が囁いていた。

「ありがとうございます、塚原さん」

香織の顔に安堵の色が浮かんだ。

「私では到底力不足だと思っていたのですが、塚原さんならきつとうまくやってくださるだろうと信じていました」

疑う様子の微塵もない香織の笑顔に、俊雄は次第に気が重くなっていく。

本当に、できるのだろうか。同じオフィスで仕事をしているとはいえ、中里とは世間話の一つも交わしたことがない。そんな、きわめて希薄な関係でありながら彼の内面の奥底にまで踏み込むというのは、無一文で世界一周旅行を敢行するほどの暴挙ではないのか。しかし、すでに約束してしまったのだ。一度約束した以上は、ど

んな困難があろうとも任務を達成しなければならない。中里を励ますことは、香織を不安から救うことでもあるのだ。

「もう一つだけ、お願いしてもよろしいですか」

「もちろんさ。部下の頼みを聞くのは、上司として当然の責務だからね」

「明日の午後は、お忙しいですか」

「明日の午後……」

「もしよかったら、東京あたりでお食事でもいかがですか」

「食事、か……」

俊雄はかすかに逡巡し、そして気分がにわかに高揚するのを感じた。

明日は、土曜日である。土曜日であるということは、すなわち休日である。つまり、香織は休日に、直属の上司を食事に誘っているのだ。この事実が指し示す意味は、ただ一つ。香織は一人の女として、この私を誘惑しているのだ。それ以外に妥当な結論は考えられない。だとすれば、一体どのようにこたえるべきか……。

「お忙しい……ですか？」

「いや、そんなことはないよ」

俊雄は即座に頭を振った。赤信号を無視して猛スピードで突っ切るような、かすかな後ろめたさが、俊雄の内心に広がった。

「明日は何の予定もないから、喜んで付き合うよ」

「そうですか。ああ、良かった！ 実は、昨日の相談の続きをゆっくりさせていただきたいと思っていたんです」

「小野寺君の相談なら、何時間でも聞くよ」

「やっぱり頼りになるなあ、塚原さんって。それで、待ち合わせはどこにしますか？」

「東京っていったら、やっぱり東京駅だろう」

「じゃあ、東京駅に午後二時ということだ」

「了解！」

これでいいんだ……俊雄はそう、自分に言い聞かせていた。これ

は決して、不純な交際ではない。部下からの深刻な相談に、上司として真摯にこたえてやるだけだ。そう、これは正当な業務の範疇なのである……。

「では、私はお先に失礼しますね」

いつの間に帰り支度を整えたのか、香織はバッグを手に立ちあがった。

「明日のお食事、楽しみにしてます」

おどけたように一礼をしてオフィスを出ていく香織の後ろ姿を、俊雄はいつまでも目で追っていた。香織が残した芳香の余韻が、俊雄の苦い不安をあっけなく吹き飛ばす。

自分のやろうとしていることは、社会人としての倫理に反する背徳行為であろうか。これから起こるであろう波紋は、これまでの人生やすべての人間関係を崩壊させてしまうほどの破壊力を備えているのだろうか。

俊雄の思考を遮るように、六時を告げるチャイムが鳴った。

香織のことを考えるのは、もう終わりにしよう。起こってもいないことについてあれこれと思索をめぐらしても仕方がない。今はとりあえず、目の前に山積した仕事を一つずつ片付けていかなければ。初恋の幸福感を味わった思春期の少年のような高揚した気分で、俊雄はふたたびパソコンの画面に向かった。すべての悩みがきれいに消え去ったように、快調に指が動いていく。

中里のことは、もう頭から消え去っていた。

恋心

いつもの帰り道を、夏海と梢は並んで歩いていた。

「一緒に帰るのなんてひさしぶりだね」

うれしそうに、梢が微笑む。

「おたがいろいろと忙しかったりするからね」

それは半分本当のようで、半分はウソだった。携帯電話を持ちはじめた以来、夏海はあまり友達と面と向かって喋らなくなった。用事なら電話かメールで伝えればいいし、何もわざわざ直接会って話すことはないか……夏海だけでなく、ほとんどの友達がそう思っている。けれど、今日はなぜだか梢と一緒に帰りたい気分なのだった。「今日の歴史の授業、すっごくタイクツだったよね」

「そうそう。あの先生、すぐ自分の世界に入っちゃうんだもん。いつもならケータイが使えるからいいけど、今日はそれもないから困っちゃった」

「私も。一応ケータイにゲームがついてるんだけど、それもすぐに飽きちゃうし」

「私なんか、ゲームはテトリスしかやったことないよ。それにしても、メールとか電話が使えないとホント困るよね。ああ、一日でも早く電波が……」

不自然に言葉を切って、梢は立ちどまった。

「あれ、マモル先輩じゃないの」

「えっ？」

思わず、夏海は眉の端を吊りあげた。梢の視線が指し示す方向を目で追っていくと、確かに少し先のバス停に守の姿があった。サッカー部員らしき数人の男子と何やら楽しげに話している。部活が終わって、これから帰宅するところらしい。

「近づいて、話してきなさいよ」

ひやかすように、梢は耳もとで囁いた。夏海の全身がにわかに熱

を帯びる。

「ほら、早くしないとバスがきちゃうわよ」

「えっ、でも……」

「私は別の道から帰るから。じゃあ、頑張って！」

夏海の肩を軽くたたくと、梢はきたばかりの道を慌ただしげに引き返した。

戸惑っているうちに、守のほうに夏海に気付いたようだった。部員との会話を中断して、驚いたような表情でこちらに向かってくる。「珍しいな、こんなところで夏海に会うなんて」

守のさわやかな微笑が、夏海の鼓動をさらに速まらせる。

「部活の帰り？」

「ああ。今日は練習が早めに終わってね」

「そう……」

と呟いたとき、夏海は言葉に詰まってしまった。本当は直接話したいことが山ほどあったはずなのに、いざ守が目の前にいると何も言えなくなってしまう。

「ちようどよかった。夏海に話したいことがあったんだ」

緊張しているのか、守は両手をこすりあわせて、

「明日の土曜日、ちよつと会えないかな」

「明日……」

夏海は瞬時に、頭の中にスケジュール帳を呼びだした。

うん、大丈夫。確か、明日は何もなかったはず。っていうか、それを話すためだけにこっちにきたの？ そんなことならケータイで……って、今はメールが使えないんだった。

「明日は忙しい？」

「ううん、そんなことないよ」

大げさなほどに、夏海は頭を振った。

「明日は一日ヒマだよ」

「そうか。じゃあ、明日は東京駅で午後二時……」

と守が言いかけた時、バスが停留所に到着した。

「長谷川！ 急がないとおいてくぞ！」

「わかった、すぐ行くよ！」

部員の呼ぶ声に、守は振り返って返事をした。

「詳しいことはあとで電話するから」

と言い置いてバスに乗り込む守を、夏海はぼんやりと目で追っていたが、やがてハツとしたように目を見開いた。

あとで電話するって、今はケータイが使えないじゃないの。ってことは、家に電話をかけるってこと？ それはダメだって、絶対。お父さんにはカレシがいることはヒミツにしてるんだから。

ああ、バスが走りだしちゃった。でも、このままじゃいけない。何とかして、守にこのことを伝えなきゃ！

猛然と、夏海は走りだした。守に事実を伝える術を持たないまま、夏海は全力で疾走した。通行人が遠慮なく投げかける訝しげな視線も、切迫した危機意識にかられた夏海には抑止力として作用しないのだった。

バスが徐々に加速していく。少しずつバスとの距離が離れていくという冷厳な事実にもめげることなく、夏海は必死にバスと併走しつづけた。しかし、どんなに全力で疾走したところで、また、一切の恥じらいを捨て去って守にむけて口を大きく開けてみたところで、夏海の無言のメッセージは守に届かないようだった。そればかりか、まるで夏海の行動を迷惑だと考えているように、守は深く俯いてしまったのだった。

バスはさらに加速し、ついに夏海のエネルギーも限界に達した。肩で息をしながら、夏海は悔しげにバスをにらみつける。

私は一体、何をやっているのだろう。バスと並んで走るなんて、できるわけじゃないじゃない。そんなことぐらい、どうして気付かなかったのかしら。よく考えたら、帰ってから電話の近くでずっと待ってれば済む話じゃないの。そうと決まったら、早く家に帰らなきゃ。

テレフォンノイローゼ

「この煮物、すっごくおいしいねえ」

里芋を満足げに頬張って、トメが微笑んだ。

「煮物を食べるのなんて、本当にひさしぶりだなあ」

「今日はおばあちゃんのご指導のもと、腕によりをかけて作ったのよ。さあ、夏海もたくさん食べなさい」

と、美代子は言った。

食卓には、里芋の煮物、さばの塩焼き、豆腐とワカメの味噌汁と、いかにも（家庭料理）然とした料理が並べられていた。いつものレトルトばかりの夕食とは大違い——皮肉まじりの正論を、夏海はいつもより濃いめの緑茶とともに呑みこんだ。そんなことを美代子に言ったら、あとで何をされるかわからない。

「明日にでも、東京見物に行きたいねえ」

はしゃいだ様子で、トメは言った。

「東京見物ですか。それはいいですね」

と、美代子は一点の曇りもない笑みを浮かべた。

「東京にはデパートがたくさんあるから、美代子さんもゆっくり買い物ができるじゃろう」

「私も……ですか」

美代子の笑みがにわかに曇った。しかし、すぐにもとの表情に戻って、

「そうですよね。お義母さんお一人で東京見物というのは、ちょっと危ないですよね」

「そうかい。わしはべつに一人でも大丈夫なんじゃが、美代子さんもたまには気晴らしがしたいじゃろうと思ってな。じゃが、もし他に用事があるなら無理せんでもいいんじゃないよ」

「いえいえ、そんな……。ホッホッホ」

美代子のわずかな表情の変化に、夏海は思わず苦笑した。

ああ、もう。お母さんったら、無理しちゃって。きっと、おばあちゃんがない間に思いっきり羽を伸ばすつもりだったんだろうな。ホントにわかりやすいんだから、お母さんって。

「夏海も一緒に東京に行くかい」

「私は友達と遊ぶ約束があるから、明日は行けないや」

夏海は即座にこたえた。まるで、あらかじめ何度も練習した劇のセリフのように。

「友達って、男か」

思いもよらぬ方向から、横槍が入った。俊雄の険しい視線が、夏海に突き刺さる。

「女の子に決まってるでしょ」

突っ慥貪にこたえてから、夏海は、自分の眉がかすかに動くのを感じた。マズい、ウソを見破られるかもしれない。

「そうか。それなら安心だな」

俊雄は頷くと、何事もなかったように味噌汁を啜った。

ああ、よかった――夏海は安心しながらも、心のどこかではわけもなく腹が立っていた。

お父さんって、どこまで鈍感なんだろう。娘のウソも見抜けないなんて、父親失格ね。

「友達ねえ。てっきり彼氏かと思った」

一難去ってまた一難。さらなる強敵が、夏海の前に立ちはだかる。「そんなわけないでしょ。もう、お母さんまで」

自分ではうまくごまかせたつもりだったが、やはり眉が動いてしまった。微妙な動揺を隠すために、つとめてさりげなく味噌汁を啜る。

「彼氏って、何じゃ」

「恋人のことですよ、お義母さん」

「夏海にはもう恋人がいるのかい」

からかうように、トメは言った。夏海は困ったように顔をしかめて、

「だから、そんなじゃないって」

「いいんじゃない、いいんじゃない。若い頃はたくさん恋をせにゃあならん」と、トメは愉快そうに笑った。

「命短し恋せよ乙女、なんてな」

何よ、それ。命短しなんて、いかにも不吉じゃない。

「あつ、そうだ」

何かをひらめいたように、美代子はぽつりと呟いた。

「明日は会社休みよね、お父さん」

「ああ、そうだけど」

「じゃあ、私たちを東京駅まで送って行ってよ」

「だけど……」

わずかに逡巡しかけて、俊雄は思いついた。

香織との待ち合わせも、東京駅なのだ。ということは、美代子たちを車で送っていけば効率が良い。もつとも、美代子が香織と鉢合わせにならないように細心の注意を払わなければならないのだが……。

「べつに構わないよ。俺もちょうど、明日は東京で部下と会うことになってるし」

「へえ、そうなの。じゃあ、ちょうどよかったわね」

「こういう時に頼りになるのは、一家の大黒柱じゃなあ」

大黒柱などと言われて、俊雄はひとり悦に入っている。

「その部下って、女の人？」

「男に決まってるだろう」

俊雄はあっさりと否定したが、その顔には動揺の色が浮かんでいた。

「夫婦そろっての外出なんて、何年ぶりかしら」

言外に妙な色気を滲ませて、美代子は言った。

「東京駅に着いたら別行動だからな」

釘を刺すように俊雄は言うのと、すっかり冷めてしまった緑茶を飲みほした。

「夏海にもお土産を買ってきてやらんといかんね。さて、何がいいかな」

「私は何でもいいよ」

ぎこちなく、夏海はこたえた。まるで見えない糸に導かれるように、視線がひとりでに壁の時計のほうに引きずられていく。

時計の針は、もう七時半をまわっている。それなのに、いつこうに電話のかかってくる気配がない。夕食が終わる前に電話がこないと、お母さんかお父さんが電話に出ちゃう。

「何やってるの、夏海。ぼうつとしてないで、早く食べちゃいなさい」

「わかってるよ」

そう返事をしながらも、夏海の視線は時計の秒針に固定されたままだった。

守ったら、一体何やってるんだろう。もしかして、私のこと忘れられてる？ いや、そんなことはないよね。きっと、たぶん、おそらくは……。

時計の針は、九時ちょうどを指していた。依然として、守からの電話はない。

「夏海、早くお風呂に入っちゃいなさい」

「ちょっと待ってよ。勉強があとちょっとで終わるんだから」

数学の教科書と壁の時計を交互に見やりながら、夏海はこたえた。美代子はため息をついて、

「勉強なら自分の部屋でやればいいじゃないの」

「ここでやったほうが集中できるの！」

自分でも見え透いたウソだとは思ったが、今はそうこたえるしかないのである。

「試験勉強もロクにやらないような人が、それも一番苦手な数学を熱心に復習してるだなんて、どういう風の吹きまわかしら」

どんなにイヤミを言われようと、今は必死に我慢しなければなら

ない。最後の部分だけは意味がよくわからないが、きっと皮肉を言っているのだろう。

「こんな時間まで熱心に勉強するなんて感心だねえ」

と、トメが呑気に笑う。

「今日はおばあちゃんがいるから、いい子を演じてるだけだよな」
からかうように微笑む俊雄に、夏海は手もとの消しゴムを思いきり投げつけたくなった。本当のことを何も知らないくせに、的はずれなこと言わないでよ。

「お義母さんからも言っちゃってくださいよ。一人がのんびりしていると全体のリズムが崩れるんだって」

「まあまあ、美代子さん。そんなにきつく言わんでも」

と、トメは穏やかに笑いながら、

「勉強熱心なのはいいが、あんまり頑張りすぎるのも体に毒じゃよ」
「ありがとう、おばあちゃん」

さすがの夏海もトメには逆らえない。それは、威圧感や威厳とはまた別の、もっと温かい結びつきによるものかもしれない。

「さてと、この続きは明日にするか」

わざとらしく呟くと、夏海は立ちあがった。

リビングを出る前に、もう一度時計を確認する。

九時十分。もう、大丈夫。規則正しい生活をしてる守のことだから、今頃はきつと寝てるはずだ。電話は明日の朝かけるつもりなのかもしれない。そういえば、守はバス停で、（明日は午後二時に東京駅で……）ってところまでは聞こえたから、待ち合わせは大丈夫だと思う。けれど、やっぱり電話が待ち遠しい！

夏海の内心の焦燥感を愉しむかのように、電話機はリビングの片隅で素知らぬ顔を決めこんでいた。

いつもの倍以上のスピードで体を洗って、夏海は浴室を出た。本当はリンスもじっくり流したいところだが、今は緊急事態だ。

急いでパジャマを着て、鏡の前に立つ。どんなに急いでいても、

日課の髪型チェックは欠かせない。よし、今日も合格。

それにしても、どうしたんだろう。守が約束を破るなんて、今まで一度もなかったのに。もしかして、守も親の目を盗んで電話をするのに苦勞してたりして……。

いくらなんでも、こんな遅くになって電話をかけるほど、守は非常識じゃないよね。電話がこないとわかってたら、数学の復習なんかしなかったのに。ああ、熱心に勉強して損した。

リリリ、リリリ……。

ん？ 今、リビングのほうで何か音がしたような……。もしかしてこれ、電話の音？

雷鳴にはじかれたネズミのように、夏海はリビングへと走りだした。受話器を片手に困惑する守の姿が脳裏に浮かぶ。

「じゃあ、そういうことで」

夏海がリビングに入った瞬間に、俊雄が受話器を置いた。

「何よ。家の中でドタバタ走るなんて、みっともない」

美代子のたしなめる声も無視して、夏海は俊雄をまっすぐに見据えたまま、口を開いた。

「今の電話、誰から」

「守っていう男の子だったよ。夏海先輩らしいな」

「それで、何てこたえたの」

「『夏海さんはいらっしゃいますか』って聞くから、『娘はいま、高熱を出して寝込んでいます』ってこたえたよ」

「何でそんなことするのよ!」

頭の先から湯気がたちのぼるほど、夏海は興奮して言った。

「何かまずいことでも言ったか?」

「大事な用事だったかもしれないでしょ! 明日会いたいとか」

「だって、明日は友達の子と遊ぶんだろ」

「ああ、もう!」

夏海は苛立ち紛れに床を足で強く踏みならすと、俊雄を押しつけるようにして電話の前に立った。

受話器を取り上げて、夏海はふと気がついた。

そういえば私、守の家デンを知らないんだった。連絡はケータイで充分だと思ってたから、わざわざ聞こうとしなかったんだっけ。私ってホントついてない。こんな時にかぎってケータイが使えなくなるなんて！

「もう、サイテー！」

やり場のない怒りを視線にこめて、夏海は俊雄をにらみつけた。受話器をたたきつける音が刺々しく室内に響く。

「なにカッカしてるんだ、あいっ」

呆れたように、俊雄は首をかしげる。

「何だか懐かしい光景だねえ」

緊迫した雰囲気の中で、トメはひとり呑気に遠い目つきで呟いたのだった。

満月の夜に

完璧なまでの静寂の中で、夏海は目をさました。窓からわずかに射し込む月明かりだけが、部屋の天井を淡い乳白色に照らしている。まだ、夜か……ふたたび深い眠りへと引きずりこまれかける夏海の脳裏に、ふと昼間の梢の言葉が浮かんた。

（真夜中に満月の下でケータイを開くと、電波が復活するらしいのよ）

この言葉が、夏海の頭の中で何度も繰り返される。

チャンスは、今日だ。今日を逃したら、もう一生ケータイを使えないかもしれない。

よし、やろう——夏海は決意を固めた。もうすでに睡魔は消え去り、意識は普段の授業中以上に明敏に覚醒している。

制服の内ポケットに入れてある鍵を取り出し、夏海はゆっくりと扉を開けた。

玄関を出るためには、どうしても美代子たちの寝室を通らなければならぬ。夏海は息を殺して、慎重に階段を一段ずつ下りていく。不意に背後で物音がして、夏海はあやうく悲鳴をあげそうになった。寝室の扉が開けられたのかと思ったが、どうやら錯覚のようだ。ホラー映画のヒロインになったような気分で、夏海はそっと安堵のため息をつく。

ついに、玄関までたどり着いた。乱れる息をいったん整えてから、夏海はドアノブに鍵を射し込む。できるだけ音をたてないように、ゆっくりと鍵を右にひねっていく。

玄関を開けると、そこには、どこまでも果てしなく続いていそうな暗闇が広がっていた。夏海の前方数メートルだけが、常夜灯によってかろうじてほの白く照らされている。

玄関を慎重に閉めて、夏海は空を見上げた。紺色のインクを全体

にこれでもかと塗りたくったような夜空には、満月が暗闇にとり残されたようにひとり寂しげに輝いていた。

よし、やるぞ……深呼吸を一つすると、夏海は携帯電話を開いた。そして、紺碧の夜空で孤独に微笑んでいる満月に向けて、ゆっくりと携帯電話を掲げていく……。

「何をやっとなるんじゃ」

突然、頭の上のほうから鋭い声が聞こえた。声の方向に視線を向けると、トメがベランダから夏海を見下ろしているところだった。

「さては、寝付かれないんじゃろ」

何もかもを見透かしているように、トメは言った。

「ちよっときてごらん。わしも眠れんから、ちよっとばかし話し相手になっておくれ」

と言うと、トメは手招きするような仕草を見せた。

悔しさと安堵感が入り混じった複雑な思いに、夏海はとらわれていた。夜中に家を抜け出したことをトメに咎められなかったのは嬉しいが、このままでは携帯電話が使えなくなってしまう。

けれど、仕方ない。どうせ、トメはすぐに眠くなるだろう。梢のアドバイスを実行するのは、それからでも遅くはない。あせらずに、ゆっくりとやろうではないか。

夜は、まだまだ長いのだから。

風通しが良いようにつくられているのか、ベランダは思いのほか涼しかった。

トメは二人分の椅子を用意して、夏海に座るように勧めた。

「カイワレの具合が気になったもんだからねえ」

言い訳をするようにトメは言うど、テーブルの中央に置かれたカイワレのプランターを目を細めて見つめた。

「こんな時間にどうしたんだい」

咎める風でもなく、トメは訊いた。

「ちよっと、夜風にあたりたくなったから……」

慎重に言葉を選んで、夏海はこたえた。無意識のうちに、手がポケットの携帯電話へと動いてしまう。

「今日は満月じゃなあ」

遠い目をして、トメは夜空を見上げた。それにつられるように、夏海も顔を上げる。

「おじいちゃんとの馴れ初めは、話しておらんかったかな」

幾分照れたように、それでいてどこか楽しそうに微笑を浮かべて、トメは言った。

「おじいちゃんのこととは、あんまり聞いたことないかも」

そうこたえながら、夏海はトメの夫、つまり自分の祖父にあたる人物について思いをめぐらせていた。

おじいちゃんって、どんな人だったんだろう。名前が徳造っていうこと以外は、ほとんど何も聞いていない。私が生まれてすぐに亡くなっちゃったから、話をした記憶も、遊んでもらった記憶も全然ないんだよね。若い頃に小学校の先生をしてたっていうことはお母さんから聞いたことがあるけど、そのほかはほとんど知らないや。

「おじいちゃんとは、茨城で出会ってねえ」

どこまでも懐かしげに、トメは目を細めた。

「うちの近所には大きな小学校があったんじやが、そこに一人特に熱心に生徒たちを教えている若い先生がおってね。それがおじいちゃんだったんじやよ」

はにかんだように語るトメの横顔を見ているうちに、夏海は自分まで心が温まるような気分になっていた。

自分からこんなによく喋るおばあちゃんを見るのは、初めてかもしれない。何だか、この数分の間でおばあちゃんが一気に若返ったような気がする。だって、おじいちゃんの話をするおばあちゃん、すっごくうれしそうだもん。

「その頃おばあちゃんはまだ女学生でねえ。男の人と話したことなんてほとんどなかったから、おじいちゃんに直接気持ちを伝えようにも、どういうふうに伝えればいいのかわからなかったんじやよ。」

何せ、学校のほうからおじいちゃんらしき声が聞こえただけでも耳まで真っ赤になるくらいじゃったからねえ」

トメは豪快に笑った。どんなことにも驚かないトメがこんなにシヤイだったとは、何十年前のこととはいえ、夏海は信じられなかった。

「おじいちゃんに会おうまで、男の子と話したことなかったの？」

「まあ、すれ違えば挨拶くらいはしたじやろうが、今のように恋人同士で手をつないで堂々と歩いたり、ましてや人前で口づけをしたりするなんてできなかったんじやよ」

「それは……恥ずかしかったから？」

「恥ずかしいよりも何よりも、まずはこわかったんじやな」

「こわかった？」

「ああ、こわかったさ」

大げさなほどに、トメは唇をすぼめてみせた。

「その頃の学生は、いろいろなものに縛られておった。学校には当然校則があったし、家庭には一家の主が定めた厳しい家訓があった。それらを一つでも破ろうものなら、先生やお父さんからこっぴどく叱られたものじやよ」

夏海は少しずつ、トメに親近感を抱きはじめていた。時代の差こそあれ、トメも自分も結局は同じ世界に生きているという当たり前の事実が、夏海に新鮮な驚きを与えていた。

何だ、おばあちゃんも私と同じじやないの。私だって、今までお母さんや先生にたくさん叱られてきたわよ。叱られるって言っても、ちょっと長いお小言を聞かされるくらいだけど。

「叱られるって、どんなふうに？」

「それはそれは厳しかったさ。家訓を守らなければ有無を言わさず座敷で一日正座をさせられたし、校則を破れば、真冬であろうと廊下に容赦なく立たされたものじや。学校で一番こわかった鬼束先生なんか、持っている竹刀で私たちのお尻を思いきりたたくんじやから」

竹刀でお尻をたたく？ それって、立派な体罰じゃない。それ
よく、おばあちゃんは先生に文句を言わなかったわね。

「そんなにひどいことをされて、どうして我慢してたの？」

「その頃は、親や先生の教えは絶対じゃったからねえ」

と言って、トメは懐かしそうに目を細めた。

「それで、おじいちゃんにはどうやって気持ちを伝えたの？」

「気持ちを伝えるなんてとんでもない。顔を合わせる機会といえ
地域の運動会や学校行事しかなかったから、想いをうち明けるど
ろか、おじいちゃんに会うことすらままならなかった」

なかなか進展しないトメの恋を、夏海はもどかしく感じた。会
うチャンスは少なくともメールで気持ちを……って、その頃はケー
タイなんてないのか。

「会えない日々が続いたものじゃから、おじいちゃんとはもう、一
生結ばれないんじゃないやろうなあと、わしも諦めておったんじやよ。そ
んな時じやったな。叔父さんからわしに、縁談が持ち込まれたのは」
「エンダン？」

「ああ、わからないのも無理はないね。縁談っていうのは、お見合
いのことじやよ」

「お見合い……」

お見合いなら、テレビの古いドラマとかで聞いたことがある。お
見合いなんて古くさい……そう思ってたけど、おばあちゃんの時代
には、それが当たり前だったんだ。

「わしも年頃になっておったし、あまりいつまでも嫁がないでいる
のも家の恥じやったから、おじいちゃんへの想いはきっぱり忘れて、
その縁談を受けることにしたんじやよ。乙女の甘酸っぱい恋心は胸
にしまってたな」

トメは悪戯っぽく微笑んだが、夏海はつられて笑う気にもなれな
かった。

好きな人と結ばれない世の中なんて、絶対におかしい。それに、
(嫁にいかないと家の恥)なんて、どう考えてもひどすぎる。どん

な時代でも、好きな人と結婚するのが幸せに決まってるのに。

「でも、仏様はやっぱりどこかで見ていてくださったんじゃないあ」

「どういう意味？」

「その縁談の相手が、おじいちゃんだったんじゃないよ」

「ええっ、ウソ！」

反射的にそう叫んだあとで、夏海はリビングのほうに目をやった。しばらく待っても美代子たちが起きだしてくる気配がないので、夏海はホッと胸をなで下ろした。

何よ、このドラマみたいな展開。いや、ドラマよりもずっと面白いかもしれない。いけない、いけない。本当の人生を面白いなんて言ったら、おばあちゃんに失礼だよな。

「おじいちゃんは、何て言ってプロポーズしたの？」

「プロポーズなんて洒落たものじゃなかったさ。ただ平凡に、『結婚してください』って言われただけだよ」

結婚してください、か……確かに平凡なプロポーズだけど、そのほうが逆にロマンチックなような気がする。

「それで、おばあちゃんは何てこたえたの」

「そりゃあ、結婚を申し込まれてるんじゃないから、『末永くよろしくお願いします』って言うしかないじゃろう」

そう言って、トメははにかんだように微笑んだ。

「おじいちゃんと初めて口づけを交わしたのが、満月の晩だったんじゃないよ」

満月を見上げるトメの横顔に、麗しき少女の面影が重なった。深く刻まれていたはずの幾筋もの皺は消え、色白できめの細かい繊細な肌を持つ、一切の苦勞を知らないうら若き乙女が、ただ純粋に夜空を見上げているのだった。

「おばあちゃんって、幸せな人生を過ごしたんだね。一番好きな人と結ばれてさ」

「幸せな人生ねえ……。あの戦争さえなければ、確かにそうだったのかもしれないね」

トメの顔に、ふと翳りがさした。そして、徐々に雲に覆われつつある満月に目をやると、

「おっと、今日は少しばかり話すぎたみたいだね。夏海ももう部屋に戻って、ゆっくりお休み。明日はデートなんじゃろ」

「でも、待ち合わせの時間と場所がわからないし……」

「明日、おばあちゃんと一緒に東京駅まで乗っていけば、こたえはきっと見つかるはずじゃよ」

意味ありげなトメの視線に、夏海はすべてを察した。

「うん、わかった。ありがとう、おばあちゃん」

「命短し恋せよ乙女、じゃよ」

「その言葉、なんかロマンチックだね」

ベランダの窓を開けて、夏海は微笑んだ。

「じゃあ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

夏海が自分の部屋へと歩いていくのを、トメは穏やかな眼差しで見届けていた。夏海の姿が見えなくなると、トメは優しく語りかけるように夜空に浮かぶ満月を見上げた。

あなたの孫はちゃんと素直に育っていますよ、徳造さん。だから、心配しないでのんびりと暮らしててくださいね。それと、そっちにも私の居場所を作っておいてくださいね。もしかしたら私もそろそろそっちに……。

「お義母さん」

窓ごしに美代子の声が聞こえ、トメは振り返った。

美代子は窓を半分ほど開けて、

「こんな時間に、何をなさっているのですか」

「ちよっと、カイワレの具合が気になってね」

「そういうことは明日にして、早くおやすみになってくださいね。」

夜更かしは体に毒ですよ」

「わかってますよ。わしももうすぐ寝るから、美代子さんも安心しておやすみくださいな」

「あんまりご無理をなさらないでくださいね。……それはそうと、さっきまでここに夏海がいませんでしたか？」

「いや、きてないよ」

「そうですか。でも、確かに夏海の声が聞こえたような……」

「それはきつと、美代子さんの空耳じゃろう」

「そうですね、きつと。じゃあ、お義母さん、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

首をかしげながら歩いていく美代子を見て、トメは深く息を吐いた。

夏海の声が寝室まで聞こえておったか。夜ふかしはあまり褒められたものではないが、まあ、今日のところはわしの胸にしまっておいたほうがいいじゃろう。あのくらいの年頃には、眠れぬ夜のつや二つはあるはずじゃ。

嘘をつくのは、案外疲れるわい。

ヘビ男

日曜日にしてはたいした渋滞もなく、車は順調に進んでいた。

「東京にはどんなお店があるのかねえ」

後部座席の窓から外の景色を食い入るように見つめて、トメはずんだ口調で言った。昨晩の夜ふかしなどものともしない、超人的なはしゃぎぶりである。

遠足前日の子供のように無邪気にはしゃぐトメとは対照的に、夏海はその隣でぐったりとうなだれていた。昨晩の夜ふかしが予想以上に体にこたえたらしい。

「どうしたんだ、そんなに疲れた顔して」

カバのような大あくびを連発する夏海に、俊雄は心配そうに言った。

「夜更かしでもしてたんじゃないの」

「そんなわけではないでしょ」

と言いつ返したそばから、またもや大きなあくびが洩れる。

夏海の全身に蓄積された眠気も、東京駅が近づくにつれて次第に吹き飛んでいった。執拗な睡魔といれかわるようにな夏海の内心を満たしたのは、もうすぐ守に会えるという、若々しい高揚感であった。

「さあ、着いたぞ」

東京駅周辺のコインパーキングに車を止め、俊雄は言った。

「俺はこれから部下と会う約束があるから、この後は夕方まで別行動にしよう」

「部下の人と約束ねえ」

夏海の訝しげな視線を俊雄は無視して、

「美代子はお袋に付き添ってくれるか」

「まあ、いいけど……」

美代子の表情が微妙に曇るのを、夏海は見逃さなかった。お母さんだったら、また無理してるな。

「わしは一人で大丈夫じゃよ」

周囲にもの珍しそうにキョロキョロと見まわして、トメは胸を張ってみせた。

「駄目だよ、お袋」

と、俊雄は首を横に振って、

「東京はこわいところでもあるんだ。そんな場所を、お袋一人で散策させるわけにはいかないよ」

「そうかい」

意外なほどにあっさりと、トメは頷いた。

「一緒にきてくれるかい、美代子さん」

「ええ、もちろん」

ぎこちなさが残る笑みで、美代子はこたえた。

夏海はふと、腕時計に目をやって、そしてあせりを感じた。

あつ、もうこんな時間じゃない！ ボヤボヤしていると、守に会えなくなるかもしれないじゃないの。ケータイが使えないんだから、ちよつとでもすれ違っちゃったら連絡が取れなくなるんだからね。

「友達が待ってるかもしれないから、もう行くね」

「楽しんでくるんじゃよ、夏海」

「夕方までには帰ってくるんだぞ」

「わかってるって！」

鬱陶しげに俊雄を一瞥すると、夏海は駅へと走っていった。

「うらやましいねえ、若さってやつは」

駅前の雑踏に紛れていく夏海の姿を目で追いながら、トメはしみじみと呟いた。そして、自分に気合を入れるように深呼吸をすると、

「さあ、夢の大会に挑みますかね、美代子さん」

「そうですね、お義母さん」

美代子は力なく微笑んだ。

四人のささいな悶着など一切興味がなかったかのように、東京駅はただ悠然と人の流れを見届けていたのだった。

絶えることのない人の往来の中、守は、駅の時計台と腕時計との間でせわしなく視線を往復させていた。時折改札口周辺の雑踏に目をやってみるが、やはりそこに夏海の姿はなかった。

やっぱり、待ち合わせの時間と場所をもっと詳しく決めておけばよかった。これまで携帯電話に頼りきっていたものだから、いつの間にか待ち合わせの方法を忘れてしまっていた。考えてみれば、時間と場所を決めておくだけなのに。

守はふと、閃いた。駅には待ち合わせのための連絡板が設置されていると、いつの日か母親から聞いたことがある。まあ、それは守が生まれるはるか前の、ずっと昔のことだから、今でもそれがあるかどうかはわからない。

それでもわずかな望みを託して周囲を見まわしてみると、雑踏の向こう側に、遠慮がちに連絡板が設置してあるのが見えた。昨日からの携帯騒動による混乱をおさめるために、臨時に設置されたらしい。連絡板にはまだ、誰の文字も記されていないかった。チョークを手に持って、待ち合わせ場所はどこにしようと考えあぐねているところに、スネークマンの奇怪なオブジェが目に入った。

あのオブジェなら、人混みの中でも充分に目立つし、見失うこともないだろう。ちょうどいいタイミングで、絶好の待ち合わせ場所ができた。

納得するように何度か頷いて、守は戸惑いながらも連絡板にチョークを走らせていく。

（スネークマンのオブジェの前で待ってるよ。守）

次々と視界を彩る高級食材の数々に、美代子の気分は時間を忘れるほど高揚していた。

牛のロース肉が一キロ九百円ですって。うちでいつも食べてるお肉の二倍近い値段じゃないの。やっぱり、東京のデパートはランクが違うのね。

えっ、サローインが千五百円？ 完全に予算オーバーになるけど、

お義母さんがきてるんだし、今日の夕飯は奮発してステーキにでもするか。ええと、向こう側にはデザートのコナーがあるみたいね。デザートを買う余裕なんかないけれど、せっかくここまできたんだから目の保養にちよつと見て行くか。ウインドウショッピングっていう言葉もあるんだし……。

トメのいない解放感に浸る美代子だが、やはり心の片隅には一片の不安があった。

お義母さん、大丈夫かしら。こんなに広いデパートを一人でまわるなんて、あの体にはちよつと負担がきつすぎるような気がするけど。それに、待ち合わせの時間と場所も決めずに別れちゃったんだもの。（最悪は迷子センターのお世話になるさ）って冗談めかして笑ってたけど、八十を超えたおばあちゃんが迷子っていうのもねえ。いけない、いけない。いつもの癖で、ついお義母さんのことを考えちゃった。大丈夫よね、きつと。お義母さんは、まだまだ元気なもの。せっかく一人の時間をもらったんだから、余計なことは考えずに思いきり楽しまなきゃ。

そう自分に言い聞かせてみるものの、そのすぐ後にはトメの顔が脳裏にちらつくのであった。

本当に大丈夫かしら、お義母さん。

時計の短針が二時をあっけなく行き過ぎるのを見て、香織は悩ましげにため息をついた。綺麗に整えられた流線型の眉が悲壮に歪む。やっぱり、こないのだろうか。休日を返上してまで部下の相談に乗ってやる上司が減多にいないことは、香織もよくわかっていた。俊雄はその数少ない有能な上司だと思っていたのだが、それもただの理想像にすぎなかったということか。

いや、悲観的な決断を下すのはまだ早すぎる。俊雄はただ、道に迷っているだけかもしれないではないか。

そうだ。俊雄は道に迷っているだけなのだ。待ち合わせの時間と大雑把な場所を決めただけで安心していたのだが、東京駅がこれだ

け広いとは思わなかった。今さらになって、携帯電話の使えない不便さが身にしみる。

「どうかなさいましたか」

誰かに肩をたたかれて、香織は思わず飛びのいた。

声の方向に顔を向けると、そこには制服をきっちり着込んだ女性の駅員が立っていた。香織と同年輩であろうか。後ろ髪を地味な色のゴムで結わえて、いかにも仕事熱心な印象の女性である。

「どなたかと待ち合わせですか」

「ええ、まあ……」

戸惑いがちに頷く香織に、駅員はにっこりと微笑んで、

「あちら側の改札の近くに臨時の連絡板がございますので、よろしければそちらをご利用ください」

「ありがとうございます」

「では、ゆつくりとお楽しみください」

微笑とともに一礼をして、駅員は雑踏の中に消えていった。

香織の頬に、にわかに笑みが浮かんだ。さきほどまでの心細さが急速に薄らいでいくようだった。

駅員の指し示した通りの道順を歩いていくと、確かに連絡板の前にたどり着いた。

記入欄には、もうすでに守という人物の書き込みがあった。名前の語感や字体から判断して、高校生くらいの若者だろう。書き込みの内容から察するに、恋人とのデートかもしれない。

チョークを手にとってから、香織は気付いた。駅員に促されるままにここまでできたのはいいが、肝心の待ち合わせ場所を考えていなかった。これだけの広い駅だ。よほど目立つ場所でないとするれ違ってしまうだろう。

「あのヘビのオブジェ、すっごくカッコいいよね」

「そうそう！」

まだ学生と思われる女子たちの会話が耳に入り、香織はちいさく手をうった。

東京駅の前に映画のキャラクターのオブジェが置かれていることは、香織もニュースで知っていた。あまり詳しくは見えていないが、ずいぶんグロテスクなオブジェだと思ったことだけは印象に残っている。

そうだ、あれを待ち合わせ場所にしよう。あのオブジェなら遠目からでもかなり目立つし、人の往来にも巻き込まれずにすむ。よし、そうと決まれば……。

チョークを持つ香織の手が滑らかに動いていく。

（グロテスクなヘビのオブジェ前で待ってます。香織）

ふう、そろそろ休憩にするかね。

デパートのベンチにどっかりと腰を下ろして、トメは疲労感と満足感の入り混じったため息を洩らした。両脇に置かれた買い物袋には、この数十分間で手に入れた（戦利品）がぎっしりと詰め込まれている。

ひとしきり疲労がやわらいだところで、トメはそばにある壁掛け時計に目をやった。

おやおや、もう二時を過ぎているじゃないか。さてと、買い物も一通り済んだことだし、そろそろ美代子さんと合流……。

大儀そうに立ちあがりかけて、トメはたと気がついた。

そういえば、美代子さんの待ち合わせ場所を決めておかなかったんだね。何しろ、早く買い物をしたかったものだから、焦って美代子さんと別れてしまったんだ。

でも、大丈夫さ。こういう時のために、駅にはちゃんと（連絡板）つてものが用意されておるんじゃないから。年寄りを見くびったらいかんよ。何せ、携帯電話なんてのができるずっと前からこっちは生きてるんだからね。ええと、東京駅の連絡板は確か……。

トメはデパートを出ると、東京駅の構内を悠然と歩いていく。重い買い物袋を両手にぶら下げ、行き交う雑踏をものともせず突き進むその姿は、さながら水面を自由に泳ぎまわる華麗なイルカのよ

うであつた。

やがて、視線の先に連絡板が見え、トメは満足げな微笑を浮かべた。

ほら、あつたじゃないか。やっぱりわしのカンは正しかった。しかし、この連絡板はやけに安っぽいな。わしの近所の駅の連絡板は、もっと頑丈に作られておるのに。

連絡板を懐かしげに見つめてから、トメはチョークを手を持った。さて、肝心なのは待ち合わせの場所じゃ。改札の近くは人の往来が激しいし、できればこの周辺で待ち合わせをしたいのじゃが。

トメは細めた目であたりを見まわして、人の流れの終点がある一点に集中していることに気がついた。

雑踏が向かう先には、ヘビともトカゲともつかない、何とも珍妙な怪物の銅像があつた。

そうだ、あれがいい。あの置物なら、遠目からでも目立つじやろう。

嬉々とした表情で、トメは連絡板に文字を記していく。

（変なヘビの置物の前で待つ）

グッドタイミング

まるで魚群が一気に放流されるように、改札口から人の波が押し出されていく。だが、その波の中に香織の姿はなかった。

俊雄は、いよいよ不安になった。香織は、本当にこの駅の中にいるのだろうか。

若干のはにかみを交えたあの誘いは、たんなる冗談だったのかも知れない。休日にならぬ上司と食事をしたがる部下など、今の時代にはいないだろう。

いや、待てよ。決断を下すのはまだ早い。ただ単に、電車を一本乗り過ごしただけという可能性もあるではないか。あるいは、香織ももうすでにこの駅に到着しているのだが、こちらの居場所を見つめるのに苦労しているのかもしれない。携帯電話が使えないのだから、電話一本で連絡を取り合うわけにもいかない。

とにかく、香織と連絡を取る術が残されていない以上、今はここでじっと待っているしかない。万一、香織に弄ばれているだけだとしても、それは自分がその程度の人望しかない、愚かな人間だったというだけのことだ。

（当駅南口改札の正面に、臨時の連絡板を設置しております。待ち合わせや緊急時のご連絡にご利用ください）

途絶える気配のない喧騒に紛れて、幾分くぐもった調子の構内アナウンスが聞こえてきた。腕時計を睨む俊雄の視線がかすかに上がる。

臨時の連絡板？　そういう便利なものがあるなら、もっと早く知らせてくれよ。確か、南口の正面だったな。今立っているのが北口だから、ちょうど反対側になるのか。少しばかり歩くことになるが、ここでじっとしていても仕方がない。もしかしたら、連絡板に香織からのメッセージが書き込まれているかもしれない。いつだったか、香織も言っていたではないか。迷った時は古典的な方法が一番だと

……。

人混みをかきわけるようにして南口にたどり着くと、改札の正面に簡易の連絡板が設置されていた。携帯電話が使えないとあって、連絡板には数件のメッセージが書き込まれていた。

（グロテスクなヘビのオブジェ前で待ってます。香織）

ひとときを遠慮がちに記されたメッセージに、俊雄の内心に安堵感が広がった。

やはり、香織はきていたんだ。香織と連絡がついて、とりあえずはひと安心だ。あとは、指定された待ち合わせ場所に行くだけだな。（グロテスクなヘビのオブジェ）というのは、おそらくはここにくる途中に車の窓から見かけた、奇妙なヘビの怪物のことだろう。新作映画か何かのキャラクターらしいが……そんなことはどうでもいい。

無機質な発車ベルでさえも自らの幸運を祝福しているかのように、俊雄には思えた。

人混みに目をこらすのに疲れて、美代子は目頭を手でおさえた。

まだ買い物に夢中になってるのかしら、お義母さん。私はもうとっくに買い物が終わって、かれこれ三十分以上もここで待ってるっていうのに。もしかして、本当に迷子になっちゃったんじゃないでしょうね。それとも、今頃誰かに誘拐されて……いやいや、そんなことはないわよね。あんな元気なおばちゃんを誘拐するのは骨が折れるわよ、きっと。

そもそも、待ち合わせの場所と時間をちゃんと決めておかなかったお義母さんが悪いのよ。ケイタイも使えないから、お義母さんの居場所を確かめる手段がないし、ホントに困っちゃったわ。何でもいいから、お義母さんと連絡を取り合えるスペースがあるといいんだけど……。

そうよ、連絡よ。昔は、こういう駅にはだいたい共用の連絡板があって、待ち合わせの時にはすごく便利だったのよ。もしかしたら、

そこにお義母さんの伝言も書いてあるかもしれない。

手近な駅員に連絡板の場所を尋ねると、南口の改札正面に設置されているという。すでに疲労の色が滲む脚を宥めながら指示された道順を進むと、即席の連絡板前にたどり着いた。

（変なへビの置物の前で待つ）

書き込まれた数件のメッセージの中にひととき特徴的な文字を見つけ、美代子は思わず苦笑した。

これは絶対、お義母さんの字だわ。名前が書いてなくても、こんなに達筆な文字を書く人はそうそういないもの。

えっと、変なへビの置物って、駅前の交差点にあるオブジェのことかしら。ちょっと前にアメリカから届けられたって、ニュースで話題になったわよね。他の伝言もあのオブジェを待ち合わせ場所に指定してるってことは、きっと相当目立っただわ。

隣のメッセージは、たぶんまだ若い子が書いたのね。字の感じが幼いもの。名前は……守君か。もしかして、デートかしら。

えっ、守君？ 同じような名前を、私も最近聞いたような気がするんだけど……まあいいか。そんなことより、今はお義母さんと合流するのが先決ね。

何度目かの発車ベルが通り過ぎて、夏海は心細さはもちろん、やり場のない苛立ちすら覚えはじめていた。

夏海と同じように人待ち顔で立ち尽くしていたワンピース姿の女が、ぱっと明るい表情になった。その視線の先には、改札付近の人混みからはずれて笑顔で女のほうに向かってくる、茶髪の男の姿があった。

「待たせて悪かったね」

と顔の前で手刀を切る男に、女は微笑とともに首を横に振って、

「いいのよ。それより、連絡板見てくれた？」

「ああ、見たからここにきたんだろ」

微笑みあう二人を、夏海は陰のこもった眼差しで見つめていた。

その視線に気付いているのかいないのか、二人は腕を絡め合って雑踏の中に紛れていった。

何よ、あれ。こっちの迷惑も考えずに二人の世界に入り込んでやって。そういうことは、人目につかないところでやりなさいよ。

そんなことより、連絡板って何のこと？ この駅の中に、そういう便利なものがあるのかしら。連絡板って、学校の職員室前にあるようなものかな。

そうよ、待ち合わせよ。私は今、守と待ち合わせをしてるんだわ。ってことは、その連絡板の前に行けば何とかなるかもしれない。

考えるより先に、足が動きだしていた。駅の構内をぐるりと歩きまわってみると、（南口改札正面に臨時の連絡板設置）という看板が目に入った。表示通りに南口に急ぐと、改札の真正面に粗末なつくりの掲示板が見えた。

これが連絡板ね。けっこうメッセージが書き込まれてるじゃない。（スネークマンのオブジェの前で待ってるよ。守）

やっぱり、あった。機転のきく守のことだから、きっとここに何かのメッセージを残してくれると思ってたんだ。

それはそうと、その左隣の字、けっこう汚いわよね。同じような感じの文字を最近どこかで見たことがあるような……まあ、いいや。そんなことより、今はスネークマンのオブジェ前に急がなきゃ。

「あっ！」

スネークマンのオブジェを中心に、六人の驚きの声が重なった。

「どうしてここにいるのよ、お父さん！」

「それはこっちが聞きたいよ」

「このオブジェが、待ち合わせにちょうどよかったんですよね」
必死にとりなそうとする香織の声も、困惑気味に震えている。

「そんなことより、夏海、今日待ち合わせするのはクラスの女の子じゃなかったの？」

「そ、それはですね……」

当の夏海本人よりも、守のほうが慌てている。

「親に嘘をついて遊びに行くなんて、あまり感心しないなあ」

「そう言うお父さんだって、部下は男の人だってウソついたじゃん」
「それはなあ……」

平然と言い返す夏海に、俊雄のほうが額に脂汗を浮かべてうろたえている。

「急に予定が変わっちゃって、私が代理で係長とお会いすることになったんですね」

「ああ、そうだった」

香織のとっさの機転に、俊雄はぎこちなく頷いた。それから、とつてつけたように父親としての表情に戻って、

「お父さんはいいんだ。れっきとした仕事なんだから。でも、夏海はただの遊びじゃないか。しかも、親に隠れて男友達と……」

「何よ、その言い方！ これはただの遊びなんかじゃないの。一生をかけた真剣な……」

「真剣な付き合いつて、まさかそんなところまで……」

「もう、うるさい！」

「やめなさいよ。ここは人通りも多いんだから。守君もあきれてるじゃないの。ねえ？」

「ええ、まあ……」

「守までお母さんたちの味方なの！」

「いや、まあ……」

夏海に睨まれて、守は曖昧に微笑んだ。

「まあまあ、いいじゃないの」

と、トメは鷹揚に頷いた。

「何はともあれ、こうして無事に集合できたんじゃないから」

「さて、これからどうしようか」

これまでの気まずさをたちきるかのように手をたたいて、俊雄は言った。

「また、それぞれのペアに分かれますか」

「それが一番だな」

美代子の提案に、俊雄は頷いた。

「では行きますか、美代子さん」

「……そうですね」

いささか不本意そうに、美代子はこたえた。

「私たちも行きましょうか、係長」

「そうだな。大事な打ち合わせもあるし」

わざとらしく胸を張って、俊雄は頷いてみせた。

「俺たちも行こうか」

「うん、そうだね」

しおらしく、夏海はこたえた。すぐにでも腕を絡め合いたいところだが、俊雄たちの前ではさすがにそうもいかない。

「夕方までには帰ってくるんだぞ」

「できるだけ頑張るよ」

駅に向けて歩いていく夏海に、俊雄は威厳の欠片もない忠告を投げかけた。

「できるだけじゃ許さんぞ！」

どこか物悲しい俊雄の呼びかけも、すっかり守との世界に浸っている夏海にはあっけなく受け流されてしまった。

六人の滑稽かつ珍妙なやり取りを、スネークマンはその怜悯な眼光で静かに傍観していたのだった。

上司と部下

「この駅の中に、コーヒーのおいしい喫茶店があるんですよ」
香織に促されるままに、俊雄はコンコース内にある喫茶店に入っ
た。

「テレビでも何度か取り上げられるくらい有名なですよ、このお
店」

香織の言葉通り、店内は混雑していた。

「素直な娘さんじゃないですか」

と言って、香織は微笑んだ。

「そうでもないんだよ。家じやなかなかの反抗期でね」

「幸せなご家庭だと思いますよ。奥さんもきれいだし」

「社交辞令がうまいね、君は」

俊雄は苦笑して、メニューに視線を落とした。

「さて、何にするかな」

「ここの自慢は、アメリカンコーヒーらしいですよ。私はそれにし
ようかな」

「じゃあ、僕も同じのを」

気軽な調子で、俊雄は言った。香織と二人きりで対面していると
いう緊張感は、いつしかなくなっていた。

「それで、ご相談なのですが……」

注文が済んでから、香織は切り出した。

「やっぱり、彼に気持ちを伝えようと思うんですよね」

薄れかけた緊張感が、じわじわと俊雄ににじり寄っていた。

動揺を鎮めるために水を一口含んでから、俊雄は口を開いた。

「どうしても、待てないのかい」

「ええ、どうしても」

そうこたえる香織の瞳には、蠱惑的な光が宿っていた。迂闊に見
つめているとその淫靡な魔力に吸い寄せられてしまいそうで、俊雄

は香織から視線を落とした。

「君の想いに、その男性は気付いているのかな」

「たぶん、それはないと思います」

「どうしてそう言いきれるんだい」

「どうしてって……」

女というのは、なぜこれほどまでに回りくどいのだろう。戸惑いがちに返答を洩る香織を見ながら、俊雄はある種の苛立ちを覚えていた。彼女はもしや、悪戯に返答を先延ばしにして、こちらが焦りを覚えるのを愉しんでいるのかもしれない。俺は今、狡猾な小悪魔と対峙しているのだろうか。

「何だか、警察の取り調べみたいです」

「そんなつもりじゃないんだ。ただ、状況をできるだけ正確に把握しておきたくて。君が気を悪くしたのならすまなかった」

テーブルに両手をつけて、俊雄は頭を下げた。

「いいんですよ、塚原さんが謝ってくださなくても」

恐縮したように顔の前で手を振って、香織はとりなすように笑ってみせた。

コーヒーが運ばれてきた。インスタントとはまるで違う色合いのコーヒーに、俊雄はかすかに戸惑いを感じた。

「ずいぶんオシャレなコーヒーだね」

「このコーヒーは初めてですか」

「ああ。恥ずかしながら、コーヒーというと専らインスタントなものでね」

照れたように微笑んで、俊雄はカップを口もとに運んだ。と、唇に触れる寸前で手もとが狂い、コーヒーがネクタイにかかってしまった。

しまった、と俊雄がハンカチを取り出すより先に、香織が俊雄のほうに素早く身を乗り出していた。

「コーヒーのシミは落ちないんですよ」

子供の悪戯をたしなめるように香織は言うと、バッグから取り出

したポケットティッシュでネクタイについたコーヒーを拭き取りはじめた。

香織の全身からたちのぼる清廉な芳香が俊雄の鼻腔をくすぐる。鼓動がにわかに速まるのを、俊雄は感じていた。それは、駅のホームを全力で駆け上がった時の気だるい動悸とはまったく違う、どこか郷愁を誘う胸の高鳴りだった。

気がつくのと、香織は何事もなかったかのようにコーヒーを啜っていた。芳香の淫靡な余韻だけが、俊雄の本能を静かに刺激する。

「このコーヒー、やっぱりおいしいですね」

「ああ、そうだね」

屈託のない香織の笑みに、俊雄は曖昧に頷くしかなかった。

「彼の件だけど、君がもし本当に彼に好意を抱いているのなら、思いつてその気持ちを伝えたほうがいいと思う」

思い詰めたような俊雄の言葉に、香織は次第に真剣な表情になっていく。

「彼もきっと、小野寺君の気持ちを真摯に受けとめてくれると思うよ」

それは、香織への励ましと同時に、自分自身の勉励の言葉でもあった。ここまで二人の関係が進展してしまった以上、男としてきちんと責任を取らなければならぬだろう。

「塚原さん……」

か弱い乙女よりもはるかに純粋な香織の視線が、俊雄の理性の中核部分に深く突き刺さる。

「本当に、ありがとうございます」

香織は神妙に頭を下げた。

「でも、本当に大丈夫でしょうか」

「不安なのかい」

「だって私、何の取り柄もないダメ人間だし……」

「そんなこと言っちゃダメだよ」

自分でも驚くほど強い調子で、俊雄は言った。

「誰から見ても、君はとても魅力的な女性だよ。仕事の上でも有能だし、性格も朗らかで、それに女性としても……」

あとに続く言葉を、俊雄はあわてて呑み込んだ。わずかに乱れた呼吸を整えるために、ゆっくりとコーヒーを食道へ流し込む。

「とにかく、君は魅力溢れる女性だよ」

「塚原さんって、優しいんですね」

香織の瞳は、かすかに潤んでいた。

「塚原さんの部下になって、本当によかった」

「そう言ってもらえると、上司冥利に尽きるよ」

心地良い照れ臭さを感じながら、俊雄は鷹揚に微笑んだ。

「じゃあ、僕のほうもちょっと相談していいかな」

「塚原さんから相談ですか？」

驚いたようにそう言ってから、香織は子供っぽく笑った。

「塚原さんの相談なら、何でもお聞きしますよ」

「中里君のことなんだが……」

そう切り出しておいて、俊雄は緊張気味に手をすり合わせた。

「恥ずかしながら、彼をどうやって元気づければいいのか、僕にはわからないんだよ」

「そうですか……」

と呟いて、香織は思案げにコーヒーをストローでかきまわしていたが、やがて顔を上げると、

「塚原さんなりのやり方でいいですよ、きっと」

「僕なりのやり方……」

「ごめんなさいね、無責任な言い方しちゃって。本当は同僚の私たちが励ますべきなのに」

「そんなことはないさ」

自戒の意味を込めて、俊雄は頭を振った。

「部下を励ますのも、上司として当然の責務だよ」

と言ってはみたものの、具体的な方策はいっこうに浮かばないのだった。特に中里が相手となると……。

「でも、やっぱり自信ないんだよなあ」

「塚原さんだって、新人の頃は先輩に励まされたでしょう」

「まあ、それはそうだけど……」

唸るように呟くと、俊雄は記憶の糸を手繰り寄せるように目を細めた。

あの頃は、周囲に自分を支えてくれる仲間たちがいた。同僚はもちろんのこと、直属の上司や違う部署の先輩にいたるまで、とにかく自分と関わりのある人間は着実に人生の支えとなってくれていた。そういう役割を担う人間が、中里の周囲にいるのだろうか……。

「その頃の方法が今でも通用するかどうか、僕にはわからないし……」

「通用しますよ、きっと」

きっぱりとした香織の口調に、俊雄は軽い衝撃を受けた。香織の純朴な、それでいて強固な意志を持った視線が俊雄をまっすぐに見据えている。

「部下を励ます方法に古いも新しいもありませんよ。係長がちゃんと誠意を持って中里さんと向き合えば、気持ちはずっと伝わるはずですよ」

「ありがとう、小野寺君」

「迷った時は、古典的な方法が一番です」

「何だか、立場が逆転しちゃったな」

体の中心から熱気が全身に広がっていくのを、俊雄は感じていた。冷房は充分に利いているのに、体全体が妙に暖かい。

喫茶店を出ると、街全体が淡いオレンジ色に染めあげられていた。日没にはまだ早い、もう一軒店をまわるほどの余裕もない。

東京駅の改札前で、俊雄は香織と別れた。

駐車場まで歩く途中、居酒屋が林立する裏通りを並んで歩いていくスーツ姿の二人組が見えた。一目でわかるその年齢差から、会社の上司と部下という関係であるということは容易に察しがついた。

会話の中にどこかぎこちなさを感じられる彼らに、俊雄は茫漠と

した親近感を抱いていた。

あの頃はよく、自分も先輩社員から飲みに誘われたものだ。そうやって酒の付き合いを積み重ねていくこと自体が、会社人間としての業務の一環のようになっていた。

（塚原さんなりのやり方でもいいんですよ、きっと）

香織の言葉がゆっくりと反芻される。

それで、いいのかもしれない。このまま時間の経過にすべてを委ねるよりも、自分で行動を起こしたほうがずっとすっきりするのではあるまいか。古くさい方法だと笑われようと、今の自分にはそれしか手段が残されていないのだ。

晴れやかな気分で、俊雄は茜色の空を見上げた。俊雄の背中を軽く押すかのように、夕陽が温かに微笑みかけているようだった。

青春

東京駅から路地を一本離れると、さきほどまでの喧騒が嘘のように、あたりは静けさに包まれた。

「今日は悪かったな、夏海」

幾分かすれた声で、守は言った。

「家族で出かける予定じゃなかったのかい」

「ううん、そんなことはないよ」

夏海は首を横に振った。

「おばあちゃんが東京見物をしたって言うから、みんなで東京駅まで送っていっただけだよ」

「それならいいんだけどさ」

俯いたまま、守は呟く。

「けっこういい家族じゃん、夏海の家って」

「そう？」

「お母さんは優しそうだし、お父さんもものわかり良さそうだし」

「そんなことはないよ」

強い口調で、夏海は言った。美代子のことはともかく、俊雄に関してはいきっぱりと否定しておかなければ。

「外ではどう見られてるのか知らないけど、ウチではただのガンコ親父だよ。考えが古くさいし、ファッションにもちっとも気を遣わないし、それに、今日の待ち合わせのことだって……」

ここまで言いかけて、夏海はその先の言葉を呑み込んだ。余計なことを言って、守に心配をさせるわけにはいかない。

「おばあちゃんも、まだまだ元気そうじゃん」

「それは、まあね」

高架下の短いトンネルにさしかかった。遠くのほうからは電車の警笛が聞こえてくる。

「そういえば、もうすぐ一周年だよな、俺たち」

さりげなく、守は言った。トンネルのせいで、声がいつまでもあたりにぼんやりと反響する。

夏海は何も言わずに、守の次の言葉を待っていた。緊張しているのか、守は鼻の下をしきりに指でこすっている。

「あのさ……」

と呟いたきり、守は黙ってしまった。唇だけはもごもごと動いているのだが、肝心の言葉が出てこないようだ。

「だから、その……」

もどかしさを感じながらも、夏海は守の言葉を辛抱強く待ちつづけた。トンネルの終わりが近づいてくる。

何かを決意したように守は立ちどまり、夏海の正面を向いた。

「今まで付き合ってくれて、どうもありがとう」

それまでのぎこちなさとは対照的に、あっさりと守は言った。

「そして、これからよろしく」

「守……」

全身がゆっくりと熱気に包まれていくように、夏海は感じていた。照れくささをごまかすように、守は頭を掻いて、

「一周年らしいプレゼントを用意しようかと思ったんだけど、何を渡せばいいかわからなくて。センスねえよな、俺」

「そんなことないよ、守」

震える声で言うのと、夏海は頭を振った。

「守にそう言ってもらえることが、最高のプレゼントだよ」

守をまっすぐに見つめる夏海の視界は、涙でかすんでいた。守の端正な顔が歪んで見える。

何の前ぶれもなく、守の顔が近づいてきた。そして、次の瞬間には、柔らかく温かな何かが夏海の唇に触れた。

守の唇は、かすかに震えていた。守の熱い想いを受けとめるように、夏海はゆっくりと守の背中に両手をまわす。

固く抱き合う二人を、トンネルの出口から射し込む夕陽が淡いオレンジに染めあげていた。

団欒

家に着くころには、もう夕方になっていた。両手にさげた買い物袋をリビングのソファに置いて、美代子は疲労の入り混じった吐息を洩らした。

車で走れば近いように感じるが、電車で帰るとなると、やはり辛い。夕食の準備に取りかかる前に、コーヒーでも飲んでひと息つくうか。夏海たちが帰ってくるまで、まだしばらく余裕があるだろう。「お義母さんもお疲れでしょう。リビングでコーヒーでもお飲みになって……」

美代子が言い終わらないうちに、トメはまるで何かにせきたてられるように階段を上がっていった。

「お義母さん、何をなさるのですか」

「カイワレの具合が気になるんじゃないよ。何しろ、長い間留守番をさせてしまったからね。ほら、美代子さんも手伝っておくれ」

疲労の色ひとつ見せずにベランダへと歩いていくトメに呆氣にとられつつも、美代子は仕方なくそのあとを続いた。

何よ、もう。今やっと東京から帰ってきたばかりで、コーヒーでも飲んで休憩しようと思ってたところなのに。カイワレの世話なんて、あとでもいいじゃない。

でも、まあいいか。疲れを感じないのは、まだまだ元気だっていうことなんだから……。

そうやって自分を強引に納得させようとする美代子だったが、それでもその口からはひとりでに沈んだ嘆息がこぼれてくるのであった。

電車は、それなりに混雑していた。日曜日とあってサラリーマンの姿はほとんど見られないが、そのかわりにレジャー帰りの家族連れが車内を占有していた。

いつもなら煩わしく感じるはずの子供の甲高い喋り声も、幸福な高揚感に満たされた夏海の耳には入らなかった。座席横の手すりに頭をもたせかけて、夏海はトンネルの中での出来事をゆっくりと思いを返してみる。

（今まで付き合ってくれて、どうもありがとう）

この一言によって、どれほどの幸福感が全身を駆けめぐったことか。そして、ぎこちなく重ねられた唇……あの時の柔らかな感触は、きっと一生胸に深く刻みこまれることだろう。

私は今、本当に幸せなのかもしれない——規則的な電車の揺れに身をまかせながら、夏海はぼんやりと考えていた。仮に今でも携帯電話が使えていたなら、今日の一言も直接言われることはなかっただろう。同じことをメールで送られたとしたら、きっと今日ほどの感動は受けなかったに違いない。

これで、いいのかもしれない。他人との円滑なコミュニケーションを求めて携帯電話に頼りきっているうちに、かえって孤立を深める結果となってしまったのではないか……ぼんやりとした意識の中で、夏海はそんなことを考えていた。

高級牛肉のステーキ、カレイの煮付け、有機野菜のサラダ……見るからに豪華な料理がテーブルに並べられていた。

「今日の料理はいちだんと豪華だなあ」

どの料理に箸をつけようかと迷っている様子で、俊雄が言った。せわしなく宙をさまよう俊雄の箸を、トメは自分の箸で軽くたたいて、

「こら、俊雄。迷い箸はいかんと、子供の頃に厳しくしつけたじやろうが」

「だって、今日はいつもの倍以上のおかずがあるんだもん」

本当に子供に戻ったかのような俊雄の口調に、夏海の口からも自然と笑みがこぼれる。

「今日のおかずはみんな、お義母さんが東京のデパートで買ってき

てくださったのよ」

美代子は微笑んで、高級ステーキを一口頬張った。

「うん、おいしい！」

「東京のデパートはえらい広いなあ。となりのコーナーに行くだけでもひと苦勞じゃったよ」

自慢するように、トメは豪快に笑った。

「東京って街は一日じゃとても回りきれん。あと二、三回は俊雄たちと連れていってもらわんと」

「それまで長生きしないとね、おばあちゃん」

「そうじゃ、そうじゃ！」

温かい笑いに包まれながら、夕食は進んだ。

「せっかく家族がそろってるんじゃから、ベランダで線香花火でもやらんかね」

夕食も終わり、食器の片付けも一通り済んだところで、トメが言った。

「線香花火？」

「おばあちゃんがデパートで買ってきてくれたのよ。夏海へのお土産にって」

「まあ、無理にとは言わんがね」

と言いながらも、トメはすでに買い物袋から線香花火入りのビンールを取り出している。

「線香花火か。懐かしいなあ」

遠くを見るような目つきで、俊雄は言った。

「みんなでやろうよ、きれいな線香花火を」

無邪気な笑顔とともに、夏海は頷いた。

「そうかい。それはうれしいねえ」

心の底からうれしそうに、トメは笑った。

その笑顔につられるように美代子は微笑んで、言った。

「さあさあ、みんなでベランダに行きましょう！」

線香花火

まるでそこだけが別世界であるかのように、ベランダには心地良い夜風が流れていた。ネオン街の灯りが邪魔をしているのか、ほの暗い夜空には一筋の星の輝きすら浮かんでいない。

「線香花火のやり方は知ってるかい？」

トメにそうきかれて、夏海は返事に困った。

線香花火が燃えるのは、テレビドラマで何度か見たことがある。

あと、理科の実験でも一回やったっけ。でも、こうして間近で線香花火をやるのは、たぶん初めてだ。だいたい、こうやってご飯の後に家族そろって何かをするなんてこと、今までなかったんだから。

「……わからないかも」

おずおずと頷く夏海に、俊雄は驚いたような表情で、

「そんなはずないだろ。線香花火なら、昔、お父さんがよくここで見せてやってたじゃないか」

「お父さんったら、どのくらい昔だと思ってるのよ。あれはまだ夏海がやっと一人で歩けるようになった頃だから、きっと忘れてるわよね」

美代子の言葉に、俊雄はあからさまに落胆の色を顔に浮かべた。

「まあ、いいじゃないか。思い出なら、これからいくらでも作れるんじゃないから」

と、トメは快活に笑った。

おばあちゃんの言う通りよ。人生、プラス思考が大切だわ。でも、今さらお父さんとの思い出を増やす気はないけど。

「さあ、いよいよじゃぞ」

もったいをつけるようにトメは言うのと、線香花火をビニールから取り出し、三人に一本ずつ配った。

「火をつけるならライターが……」

「いいんじゃないよ、美代子さん」

立ちあがりかける美代子に、トメは穏やかに首を振った。そして、巾着袋からマッチ箱を取り出すと、

「時間はたっぷりあるんじゃないや。ゆっくりやろうじゃないか」

「そうですね、お義母さん」

「マッチを擦るのもひさしぶりだなあ」

トメに配られたマッチを懐かしげにしげしげと見つめて、俊雄は言った。

「マッチの擦り方はわかる、夏海」

「そのくらいわかるわよ」

即座に言い返してはみたものの、いざマッチを箱にこすりつけようとするとなかなか火がつかない。頭の中のイメージ通りにマッチの先端をマッチ箱にこすりつてはみるのだが、シュッシュッ、というかすれた摩擦音がするだけで、いっこうに火のつく気配がないのだ。

「つかないよ、お母さん」

「どれ、見せてごらん」

美代子は夏海の手もとをのぞきこんで、

「そりゃあつかないはずだわ」

と、目尻にシワをつくってまで笑いころげた。

「だって、マッチを擦る面が違うもん」

「どれどれ、見せてごらん」

と、トメは夏海が目線までかがみこんで、そしておかしそうにケラケラと笑った。

マッチは、マッチ箱の上面に対して垂直に立てられていた。つまり、夏海は、マッチ箱の絵柄が描かれている面に、必死でマッチをこすりつけていたのである。

「いいかい、夏海」

ひとしきり笑い終わったあと、優しく教え諭すようにトメは言う
と、夏海のマッチ箱を側面が上に向くように動かした。

「マッチっていうのは、マッチ箱のここの面にこすりつけて初めて、火がつくものなんだよ」

自分のマッチ箱からマッチを一本取り出すと、トメは指でなぞっておいた面にこすりつけた。いや、こすりつけるというよりも、マッチ箱の側面を軽くなぞっているだけののように、夏海には見えた。まるで、トレーディングカードをカードリーダーに読み取らせる時のように。

シュツというかすかな摩擦音とほぼ同時に、マッチの先端に火がともった。

「さあ、やってごらん」

トメに促されるままに、夏海はマッチを手を取った。そして、マッチ箱の側面に瞬時にこすりつける。

わずかな火花があがって、マッチに火がついた。あまりの驚きに、夏海は思わずトメと顔を見合わせた。

「よくやったな、夏海」

トメは目を細めて、夏海の頭を優しく撫でた。懐かしい快感が、夏海の全身を駆け抜ける。

そういえば、最近、こうやって誰かにほめられることなんてなかった。大人になってまでほめられるなんて恥ずかしいと思ってたけど、いざほめられてみると、けっこううれしい。

全員のマッチに火がともり、ベランダはほのかな熱気で包まれはじめた。

「さあ、いよいよじゃ」

愉快そうに笑いながら、トメは持っている線香花火の末端にマッチの炎を近づけた。炎が線香花火へゆっくりと受け渡され、その末端からは細かい破裂音とともに弱い火花がとびちりはじめた。

トメに倣うように、夏海たち三人も線香花火に火を移す。四人の足元が、赤みがかったオレンジ色にほんのりと照らされた。

「きれいだねえ、夏海」

線香花火の火花へと視線を落しながら、美代子がおつとりと言った。

「そうだね、お母さん」

そう呟きながら、火花のむこうに奇妙な残像がちらつくのを、夏海は感じていた。忘れていたはずの記憶の断片が、にわかに甦ってくる。

夏海の脳裏に浮かんだのは、幼い頃、俊雄の膝に抱かれて見た、線香花火の淡い光であった。火花のものの悲しい輝き、火花ごしに見える果てしない暗闇、そして、俊雄の膝の温もり……その一つ一つが今、夏海に鮮烈な衝撃を与えていた。

「こうやって家族そろって会話をするのも、ずいぶんひさしぶりだよな」

どこか感傷的な眼差しを火花に投げかけながら、俊雄はしんみりと呟いた。

言われてみれば、その通りだ。一応、夕ご飯の時には家族全員がそろうけど、みんな食べるのに夢中なのと、何を話していいのかわからないのとで、会話らしきものはほとんどない。けれど、それが普通だと思ってた。ケータイが使えなくなるまでは……。

「夏海に話したことあったかしらね、あなたの名前の由来」
穏やかな口調で、美代子は言った。

「その話なら、お父さんから聞いたことがあるよ。確か、お父さんが海が好きで、私が夏に生まれたからだったよね」

確認するように、夏海は俊雄に視線をむけた。だが、俊雄はぎこちなく頷くばかりで、なぜか照れたように背中を丸くしている。

「あなた、そうこたえたの？」

と、美代子は悪戯っぽく微笑みかけた。

「実は、それはウソなのよ」

「えっ、そうなの？」

反射的に、夏海は素っ頓狂な声をあげた。そんなウソで私を十年間もだましつづけるなんて、やっぱりお父さんは許せない！

「それで、ホントの由来は何なのよ」

「どうしても聞きたい？」

「うん、聞きたい！」

勢い込んで、夏海は何度も頷いた。肝心の俊雄はというと、ベランダの隅のほうですっかり知らん顔を決め込んでいる。

「わしも聞きたいなあ」

好奇心を丸出しにしてそう言うと、トメは美代子のほうにぐいと身乗り出してきた。その無邪気な笑顔はまるで、悪だくみに参加する少年のようだった。

「お父さんとは、真夏の海で出会ったのよ」

恥ずかしそうに目尻にシワを寄せながら、美代子は語りはじめた。「あれは私がまだ大学生の頃で、お父さんは社会人になりたての新人サラリーマンだったのよ。大学の夏休みを使って友達とビーチに遊びに行ってたんだけどね」

お父さんがビーチねえ。休みの日に家で一日中ゴロゴロしている姿からは想像できないけど、若い頃はあれでけっこうスポーツマンだったのかもしれない。

「それで、どっちから声をかけたの？」

「それが、そういうんじゃないのよ」

ここで、美代子がかすかに表情を曇らせた。

「あんまりはしゃぎすぎたせいで、お母さん、波に体をすくわれて溺れちゃったのよ。その時に助けてくれたのがお父さんだったんだけどね」

美代子の口から語られる思い出はどれも新鮮で、まるで昨日起こったことを聞かされているように、夏海は感じていた。俊雄も会話の内容は気になるのか、時折美代子のほうにちらちらと視線を向けては、懐かしげな微笑を浮かべている。

「溺れてるところを助けられて結ばれる、か……。何だかロマンチックだね」

「普通のドラマだとそうなるんだろうけど、実はお父さん、根っからのカナヅチなのよ」

「えっ、ウソ！」

「おい、それは言わない約束だろ」

俊雄は不満げに横槍を入れたが、その目は笑っていた。

「そうじゃ、そうじゃ。俊雄は子供の頃から泳ぐのがヘタじゃったな。水泳の授業でもいつも……」

トメの言葉を遮るように、俊雄はわざとらしくせき払いをした。ささやかな笑いがベランダに広がる。

「勇ましく助けにきてくれたのはいいけど、自分も泳げないものだから、二人とも溺れかかってね。結局はお父さんの友達に助けてもらったから、まあ無事だったんだけど」

「せっかくのロマンチックムードが台無しじゃん」

「現実はそのなものよ」

と、美代子は笑ってみせた。

「でも、泳げないのを忘れてまで助けようとした優しさは本物だったわ。そして、それは今でも変わってない」

妙に熱っぽい視線を、美代子は俊雄に向けた。

「なにを言い出すんだよ」

照れたように言って、俊雄は視線をそらした。

「夏海も結婚するなら、そういう本物の優しさを持った人を選ぶのよ」

「本物の優しさ、か……」

と呟いて、夏海は顔を上げた。線香花火の炎に照らされて、美代子の顔が幾分上気したように映る。

優しさなら、何となくわかる。お年寄りに親切にするとか、困っている人に力を貸してあげるとか。でも、（本物の優しさ）となると、イメージがぼんやりとしすぎていて、よくわからない。友達にノートを見せてあげるとか、学校の帰りにハンバーガーをおごってあげるのとは、ちょっと違う気がする。

「そういう男の子は当分現れないだろうな」

「そんなことないわよ」

俊雄の冗談に、条件反射のようにそうこたえてから、夏海はふと考えこんだ。

お母さんの言う（本物の優しさ）を、守は持ってるのかな。確かに、私がヘコんだ時にはちゃんと慰めてくれるし、だいたいワガママも聞いてくれるけど、それだけじゃ物足りないような気がする。よし、夏休みに二人でビーチに行つて、（本物の優しさ）つてやつを試してみるか。でも、守は泳ぎがすごく得意だし……。

「さて、もうそろそろかな」

どこか寂しげに呟くと、トメはそれぞれの線香花火に視線を走らせた。

あれほど勢いよく燃えていた炎が、わずかな風にさえも吹き消されてしまいそうなほどにしぼみかけていた。四方に飛び散っていた火花はいつしか消え去り、炎の名残のような弱々しいオレンジの灯火が線香花火の先端にかろうじて留まっているだけだった。

「もう少しかな」

トメが呟くのとほぼ同時に、夏海の線香花火の先端に残っていたほのかな火がポトリと地面に落ちた。自分の存在を最後に主張するかのように、か弱い火の粉はベランダのコンクリートにはね返って、夜の闇にはかなく紛れた。

「夏海の花火が一番先に落ちたわね」

「うん……」

切なげに俯く夏海に、美代子は優しく微笑みかけて、

「最初に花火が落ちた人は願い事が何でも叶うのよ」

「そうなの？」

夏海の顔に、ぱっと明るさが戻る。

「でも、もう遅いわね」

「どうして？」

「だって、花火が落ちる前に心の中で願い事を唱えないと、おまじないにはならないんだもの」

「何でもっと早く教えてくれなかったのよ！」

「夏海にそんな願い事があるなんて知らなかったから」

「もう、意地悪！」

「ほら、まだ間に合うぞい」

むくれてみせる夏海に、トメは自分の線香花火をさしだした。棒の先端にろうじて火が残っているものの、今にもあえなく力尽きそうであった。

「ありがとう、おばあちゃん」

線香花火を受け取ると、夏海は懸命に守の笑顔を思い浮かべた。

いつか必ず、守と結婚できますように。そして、永遠に幸せな家庭を守ることが出来ますように……。

火花が、落ちた。足元のコンクリートでかすかに赤く光っている火の粉を見つめて、夏海はもう一度、内心で強く念じた。どうか、絶対に守と結ばれますように！

「願い事は終わったかな」

火の粉が完全に力尽きるのを見届けて、トメはおごそかに言った。

「一体、どんな願い事をしたのかしらね」

「それは誰にも秘密よ」

「お父さんが健康でいられますようにって、お願いしてくれたんだよな」

「ない、ない。それは絶対にない」

夏海があまりにも真剣に否定したので、ふたたび温かな笑いが起こった。ただ一人、俊雄だけがその輪の中で、どこか釈然としないような表情を浮かべている。

「さて、そろそろお開きにするかね」

トメが言った頃には、月は薄い雲に覆われ、夜風もだいぶん冷たくなっていた。それまで賑やかに燃え盛っていた線香花火もすっかり静まりかえり、ベランダの塀を隔ててすぐむこうには淡々とした紺碧の暗闇が迫っている。

「ねえ、お母さんは何か願い事したの？」

「もちろんしたわよ。夏海の実績がもっと良くなりますようにって」「もう、お母さんったら！」

「わしも、夏海がもっと素直になりますようにってお願いすればよ

かったかのう」

「おばあちゃんまで！」

目尻のあたりまでクシャクシャにして、夏海は屈託なく笑いこぼげた。こんなに笑いの絶えない時間を過ごしたのは何年ぶりだろう……何の打算もない笑顔に囲まれながら、夏海はしんみりとそう考えていた。

幸福感に浸る四人を、倍以上の背丈に生長したカイワレが夜風に揺れながらそっと見守っていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2046q/>

東京原人

2011年2月9日15時10分発行